

東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

— 平成17年度 —

2006. 3

東大阪市教育委員会

はしがき

東大阪市は大阪府の東部にあり、生駒山の懷に抱かれ、自然に恵まれた50万都市です。

生駒山地のふもとには、先人の残した貴重な文化遺産、遺跡が数多く眠っています。本市ではこれら遺跡・埋蔵文化財を保護、顕彰する立場から昭和47年に文化財課を設置、郷土博物館を開館するなど、広く市民の方々に文化財の活用と普及に努めてまいりました。平成14年11月には、市立埋蔵文化財センターがオープンし、多くの市民に利用されています。

本書では、平成17年度国庫補助事業による発掘調査の成果を報告します。今回の報告では、河内寺跡、山畠古墳群、若江遺跡、縄手遺跡、皿池遺跡、馬場川遺跡の調査概要を掲載しています。いずれも遺存状態の良好な遺構・遺物に恵まれ、既往の調査成果に新たな知見を加えることができました。限られた調査範囲ではありますが、各々の地域史の解明に大きく寄与できたものといえます。河内寺跡では、昨年度の塔跡の発見に引き続き、南面回廊の一部が確認され、伽藍配置の確定に大きく寄与する成果を得ました。また寺院に先行する集落が検出されるなど、貴重な発見が相次ぎました。これらは次世代に引き継ぐべき貴重な考古資料であり、本書が埋蔵文化財保護の報告書としてだけでなく、文化財の普及啓発冊子として市民の方々に広く読まれることを期待します。

最後になりましたが、調査の実施や報告書の刊行にあたり、個人・関係諸機関から多大なご協力を賜りましたことに深く感謝し、今後とも文化財保護にご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げます。

平成18年3月

東大阪市教育委員会

目 次

はしがき

目次・例言

第1章 平成17年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要	1
第2章 河内寺跡の調査	5
第3章 山畠古墳群第25次・26次発掘調査	41
第4章 若江遺跡第82次発掘調査	71
第5章 繩手遺跡第18次調査	80
第6章 皿池遺跡第7次発掘調査	87
第7章 馬場川遺跡第17次発掘調査	97

例 言

- 本書は、国庫補助50%・市負担50%(総額13,000,000円)で実施した、個人住宅建設工事及び個人による賃貸共同住宅建設工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
- 調査は、調査原因に係る個人の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。
- 現地の上色および土器の色調は、農林水産省農林水産技術事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準上色帖』(2000年版)に準拠し、記号表示も同書に従った。
- 本書には、開発工事に伴う発掘調査・確認調査・立会調査の成果を含んでいる。
- 本書の執筆は次のとおりである。
第3章1)2)3)遺構4)遺構5)、第7章1)2)3)5)は若松博恵、第6章1)2)3)5)は青柳佳奈、第2章2)③3)②4)
③、第3章3)遺物4)遺物、第4章3)、第5章3)、第6章4)、第7章4)は釜田有理絵、その他の章節及び編集は菅原卓太。
- 考古学用語については、佐原真・田中琢『日本考古学事典』(2002年)の表記に従った。
- 調査では、遺構名称に略号を使用した。略号は以下のとおりである。

SP	ピット・柱穴	SD	溝・濠・溝状遺構
SK	上坑	SE	井戸
SX	その他の遺構		

- 現地調査の実施及び報告書作成にあたり、下記の方々や関係諸機関からご協力いただいた。記して謝意を申し上げる次第である。
坂本 義一・川田 敏次・川田 義成・前田 輝久・山崎 高義・山崎 康恵・
東大阪市教育委員会施設整備課・バナホーム株式会社・七島建設株式会社・
サンエス建設株式会社・有限会社慎健・有限会社林建設興業・大昭和建設株式会社
森 郁夫・大脇 濶・上原 真人・堀 大輔

第1章 平成17年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要

平成17年度の文化財保護法第93条・94条に基づく埋蔵文化財包蔵地での届出(通知)件数は、平成18年2月28日現在で届出523件、通知73件で合計596件である。届出(通知)にかかる工事内容の内訳は次のとおりとなる。

個人住宅	99件	分譲住宅	199件	共同住宅	12件	兼用住宅	1件	工場	3件
店舗	5件	その他建物	29件	道路	8件	学校	7件	宅地造成	7件
公園造成	2件	ガス	75件	電気	2件	上水道	28件	下水道	111件
電話	2件	河川	5件	その他の開発	1件				

596件の届出(通知)の指導内容は、発掘調査85件、工事立会176件、慎重工事335件であった。

平成15年度では届出(通知)が853件、16年度はそれより71件の減少で782件であったことと比較すると、約200件の大幅減となった。工事内容別では、分譲住宅、ガス、下水道で落ち込みが著しい。ガス工事は宅地への引き込みや下水管理設に伴う仮設工事で行われ、下水工事も宅地開発工事と連動して実施されることが多い。つまるところ分譲住宅の減少に伴った動きと考えられる。

東大阪市教育委員会では、個人専用住宅建設ないし個人・小規模事業主による賃貸共同住宅建設に伴う確認調査と発掘調査について、次ページ一覧表のとおり平成17年度国庫補助事業として実施した。その内容は、個人住宅建設に伴う確認調査が31件、個人による賃貸共同住宅建設に伴う確認調査が2件、個人による農業用温室建設に伴う確認調査が1件、個人住宅建設に伴う発掘調査が1件、個人による寄宿舎ビル建設に伴う発掘調査が1件、個人による排水管理設工事に伴う発掘調査が1件、保存目的で行なう発掘調査が1件で合計38件であった。

平成17年度の国庫補助事業では、依然個人住宅建設に伴って実施する確認調査が増加傾向にあることが指摘できる。遺跡内の個人住宅建設のうち、地盤改良や柱状改良、杭打設を伴う工事については、国庫補助事業として悉皆的に確認調査を行なっている。これらの建設工事は住宅の建替に伴うことが多く、既設住宅を解体後、新築工事に着手される。届出は、法の遵守からかなり先んじて提出されるが、解体工事終了後の地盤調査で、地耐力の関係から急遽基礎形状の変更を申し出されるケースが近年激増している。本市ではこれらの事例に国庫補助事業で対応し届出者と調整を行っているところである。

次に、平成17年度で調査成果を得つつ発掘調査に至らなかった確認調査事例を報告しておきたい。No.6の若江北遺跡では、現地表-0.5mで室町時代の遺物包含層を検出した。この取扱いについて協議した結果、届出者は遺物包含層を破壊しない設計に変更された。変更した基礎とおりに工事が行なわれているかどうか、再度確認のため立会調査を実施した。

若江遺跡は、現地表から浅い遺構面が広がる遺跡で、毎年連続して本発掘調査を実施している遺跡である。本報告でも第82次調査の成果を掲載している。No.8では現地表から1.8mまで調査した。1.3mで鎌倉～室町時代の遺物包含層を検出した。この事例では、基礎杭の本数が少なく、当初より大阪府の取扱い基準を満たしていたため、慎重工事となった。

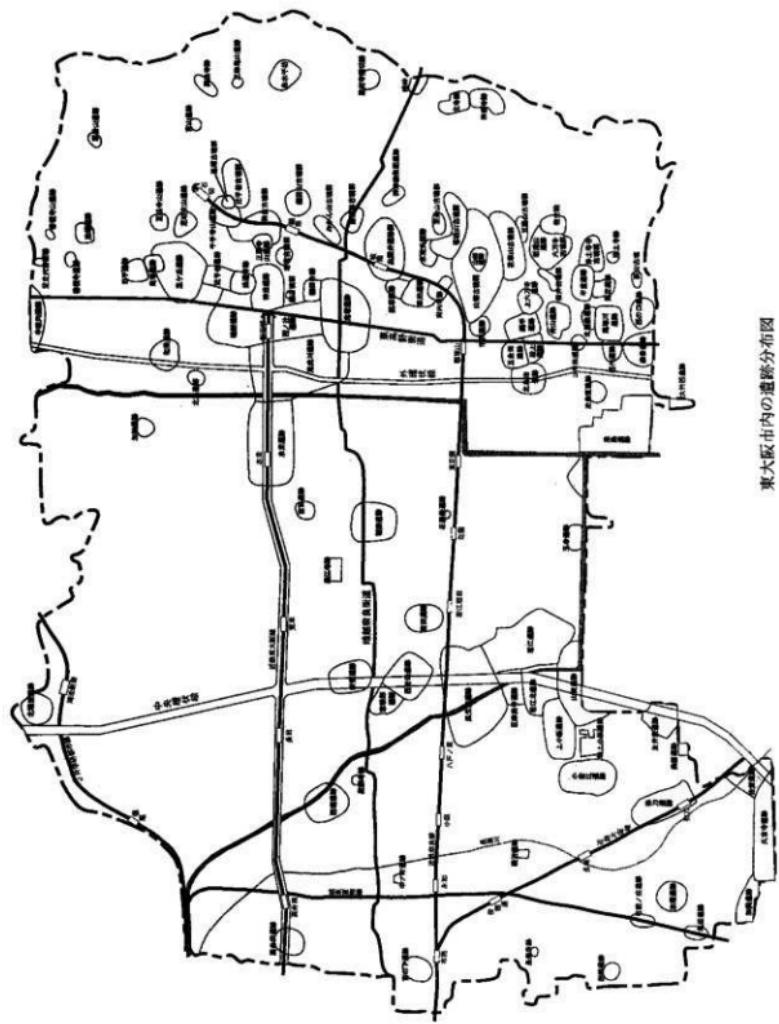
No.22河内寺跡の工事予定地は推定伽藍の外部にあたる箇所であった。現地表下0.5mまで調査した。0.4mで古墳～平安時代の遺物包含層を検出した。しかし、設定G.Lの関係から、工事実施によって遺物包含層には抵触しないことが判明した。このため慎重工事となった。No.23の植附遺跡では、從前調査事例の乏しい箇所で、現地表下1.13mで遺存状態の良好な弥生～古墳時代の遺物包含層を検出した。取扱い協議を経て、基礎形状の変更にかかる届出の再提出が行われ、立会調査を実施した。

平成17年度国庫補助緊急発掘調査事業実施状況

	調査事業名及び用途	実施場所	担当	調査期間	調査面積	備考
	河内守跡第1次発掘調査 (個人専用住宅)	河内町443番地	菅原	平成17年2月15日 ～平成17年3月2日	100m ²	本書第1章。
	山塙古墳群第25次発掘調査 (個人専用住宅)	瓢箪山町59-9番地	若松	平成16年11月4日 ～平成16年11月20日	70m ²	本書第3章。
	山塙古墳群第25次発掘調査 (個人専用住宅)	瓢箪山町56-1番地	若松	平成16年11月26日 ～平成16年12月7日	54m ²	本書第3章。
	岩江北遺跡第82次発掘調査 (賃貸共同住宅)	岩江北町3丁目873 1-2番地	菅原	平成16年12月27日 ～平成16年12月28日	16m ²	本書第4章。
1	芝ヶ丘遺跡確認調査 (個人専用住宅)	北石切町2198-6,5番地の一部	菅原	平成17年4月13日	2m ²	GL-1.0mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
2	上小坂遺跡確認調査 (個人専用住宅)	東上小坂597-38番地	菅原	平成17年4月21日	5m ²	GL-2.0mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
3	宮ノ下遺跡確認調査 (賃貸共同住宅)	長堂1丁目56番地の一部	菅原	平成17年4月25日	2m ²	GL-1.1mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
4	芝ヶ丘遺跡確認調査 (個人専用住宅)	北石切町2198-49番地	菅原	平成17年4月27日	4m ²	GL-1.1mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
5	若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)	若江南町4丁目419-1番地	菅原	平成17年4月28日	4m ²	GL-2.8mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
6	岩江北遺跡確認調査 (個人専用住宅)	岩江北町3丁目306-1番地の一部	菅原	平成17年5月30日	4m ²	GL-1.0mまで調査。0.5mで室町時代の遺物包含層検出。基盤設計変更の再開を経て、立会調査実施。
7	水走遺跡確認調査 (個人専用住宅)	島之内2丁目9-6番地	菅原	平成17年5月31日	9m ²	GL-2.8mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
8	若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)	若江本町2丁目75-9番地	菅原	平成17年6月6日	4m ²	GL-1.8mまで調査。1.3mで縄文～室町時代の遺物包含層検出。大阪府の創土基準により供里工事実施。
9	池島東遺跡確認調査 (個人専用住宅)	池島町1丁目2057-3番地の一部	菅原	平成17年6月17日	4m ²	GL-3.0mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
10	法守寺跡確認調査 (個人専用住宅)	西石切町1丁目685-8番地	菅原 青柳	平成17年7月8日	2m ²	GL-0.9mまで調査。埋蔵文化財検出せず。T.事実施。
11	皿池遺跡確認調査 (個人専用住宅)	河内町335-3番地	菅原	平成17年7月8日	4m ²	GL-1.0mまで調査。0.55mで古墳～奈良時代の遺物包含層検出。また下部でピットを検出。本調査実施(No.13)。
12	段上遺跡確認調査 (個人専用住宅)	下六万寺町3丁目1322-6番地	菅原	平成17年7月27日	2m ²	GL-1.0mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
13	皿池遺跡第7次発掘調査 (個人専用住宅)	河内町335-3番地	菅原 青柳	平成17年7月20日 ～平成17年7月25日	70m ²	本書第6章。
14	福源遺跡確認調査 (個人専用住宅)	萬葉川町36-1番地	菅原 青柳	平成17年9月2日	3m ²	GL-2.1mまで調査。1.16mで古墳時代の遺物包含層検出。大阪府の調査基準により立会調査実施。
15	岩出遺跡確認調査 (個人専用住宅)	岩出町5丁目646-12番地	菅原	平成17年9月8日	4m ²	GL-2.1mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
16	花草山古墳群確認調査 (個人専用住宅)	上四条町1152-3番地	菅原	平成17年9月12日	1m ²	GL-1.0mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。

	調査事業名及び用途	実施場所	担当	調査期間	調査面積	備考
17	江摩鹿子遺跡確認調査 (個人専用住宅)	若江西新町3丁目3-14番地	菅原	平成17年9月16日	1m ²	GL-1.0mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
18	瓜生堂遺跡確認調査 (個人専用住宅)	若江西新町1丁目14-7番地	菅原	平成17年9月16日	2m ²	GL-2.0mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
19	馬場川遺跡第17次発掘調査 (寄宿古ビル)	横小路町3丁目460番地	菅原	平成17年9月12日 ～平成17年9月22日	77m ²	木造第7章。
20	山賀池跡確認調査 (個人専用住宅)	若江南町5丁目322-11-7の一部番地	菅原 青柳	平成17年10月7日	3m ²	GL-2.0mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
21	鬼虎川遺跡確認調査 (農業用畝庭)	弥生町1384-1385番地	菅原 青柳	平成17年10月17日	3m ²	GL-0.8mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
22	河内寺跡確認調査 (個人専用住宅及び工場)	河内町414-1,3の一部番地	菅原 青柳	平成17年10月18日	2m ²	GL-0.5mまで調査。0.4mで古墳～平安時代の遺物包含層を検出したが、基礎設置深度には抵触せず。工事実施。
23	河内寺跡第13次発掘調査 (個人排水管理工事)	河内町685番地	菅原 青柳	平成17年9月3日 ～平成17年9月8日	5.5m ²	木造第2章。
24	頓附遺跡確認調査 (個人専用住宅)	中石切町3丁目30-1の一部番地	菅原 青柳	平成17年11月4日	2m ²	GL-1.4mまで調査。1.13mで弥生～古墳時代の遺物包含層を検出し、基礎設置変更の内反出を経て、立会調査実施。
25	玉串元町2丁目185-16番地	菅原 青柳	平成17年11月14日	3m ²	GL-2.35mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。	
26	小岩井遺跡確認調査 (個人専用住宅)	小岩井3丁目301-18,19,20番地	菅原	平成17年11月29日	1m ²	GL 0.9mまで調査。埋蔵文化財検出せず。T.工事実施。
27	芝ヶ丘遺跡確認調査 (個人専用住宅)	中石切町4丁目2138-6番地	菅原	平成17年12月12日	3m ²	GL-1.1mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
28	辻子谷古墳群確認調査 (個人専用住宅)	上石切町2丁目1255-22番地	菅原 青柳	平成17年12月15日	2m ²	GL-1.4mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
29	水走遺跡確認調査 (個人専用住宅)	水走2丁目1142番地	菅原	平成17年12月19日	3m ²	GL-1.9mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
30	馬場遺跡確認調査 (個人専用住宅)	北石切町1872-32番地	菅原	平成17年12月26日	2m ²	GL-0.8mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
31	鹿島遺跡確認調査 (個人専用住宅)	高里川町324-5,324-6番地	菅原 青柳	平成18年1月23日	2m ²	GL 1.2mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
32	船山遺跡確認調査 (個人専用住宅)	六万寺町3丁目1047-3番地	菅原	平成18年1月26日	1m ²	GL-1.1mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
33	符古寺遺跡確認調査 (個人専用住宅)	上石切町1丁目1220-10番地	菅原	平成18年1月31日	1.5m ²	GL-1.1mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
34	河内寺跡第14次発掘調査 (保存目的)	河内町441-436番地	菅原 青柳	平成18年1月30日 ～平成18年3月30日	45.6m ²	同様確認の発掘調査。 詳細は次年度報告予定。
35	皿池遺跡確認調査 (貸貸共同住宅)	喜里川町99,100-1番地の各一部	菅原	平成18年2月24日	2m ²	GL 1.5mまで調査。0.8mで古墳～奈良時代の遺物包含層を検出。大阪府の調査基準により立会調査実施。
36	河内寺跡確認調査 (個人専用住宅)	河内町681-2番地の一部	菅原	平成18年2月27日 ～2月28日	12.2m ²	設定CL 0.4mまで調査。河内寺跡に来する遺構等検出せず。立会調査を終えて工事実施。
37	日下遺跡確認調査 (個人専用住宅)	日下町2丁目1126番地	菅原	平成18年3月2日	2.2m ²	GL 1.3mまで調査。埋蔵文化財検出せず。T.工事実施。
38	みかん山古墳群確認調査 (個人専用住宅)	東疊滿町1138-1番地の一部	菅原	平成18年3月27日	1m ²	GL-0.9mまで調査。埋蔵文化財検出せず。工事実施。

東大阪市内の道路分布図



第2章 河内寺跡の調査

1)はじめに

河内寺跡は、東大阪市河内町に所在する古代寺院である。寺院は飛鳥時代後期に創建され、鎌倉時代後期まで存続したと考えられてきた。河内直（連）氏一族の氏寺として建立されたのち、河内国河内郡の郡寺（郡名寺院）として法燈を伝えている。寺院跡は生駒山西麓の傾斜地、扇状地扇尖部に立地する。標高は27m前後を測る。

平成16年3月から4月にかけて実施した第11次調査で、遺存状態の極めて良好な塔跡が検出された。塔跡の位置付けについては後述するが、ここでは、塔の廃絶後にも伽藍存立の伝承が残り、そのため、稀に見る遺存状態が現出されたことを指摘しておきたい。平成17年の2月には第11次調査の追加調査、6月には第12次調査、9月には第13次調査と、小規模ながら今年度も3次にわたる調査を実施した。その結果、河内寺跡に関する新しい知見を得ることができた。なお、行動論上、昨年度に刊行した『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成16年度－』(2005) の内容を再説する箇所がある。

第11次調査は、個人住宅建設に伴う調査として、平成16年3月4日から4月30日まで実施した。調査地は、河内町443番地である。調査の経過で、遺存状態の良好な塔跡であることが判明したため、文化庁および大阪府教育委員会の指導を得て、地権者と造構保存についての協議を緊急に行なう必要が生じた。協議によって、地権者の全面的な協力が得られ、平成17年2月、塔跡は公有化され、保存を図ることができた。

いっぽう、現地調査の中断に際し、十分かつ丁寧に塔の諸施設について養生を行なったが、中断期間が予定外に長期化したため、造構の損傷が懸念された。途中、5月21日と12月24日には、中断に伴う造構面の清掃作業を実施した。そこで公有化と併せて現地調査の再開が焦眉の課題となった。追加調査は平成17年2月15日から3月2日まで行なった。期間内の2月26日には塔跡の現況を市民に公開するため、現地説明会を実施した。朝より霰混じりの雪が舞う極寒の一日であったが、市民約1200名が参加され、大きな関心を得ることができた。

第12次調査は、分譲住宅建設に伴う調査として、平成17年6月9日と6月21日に実施した。調査地は河内町674-23番地の一部である。当初、現地表から0.85m掘削のベタ基礎工法であったため、同層準まで確認調査を実施したところ、古墳時代の土器が多く出土したため、取扱いについて届出者



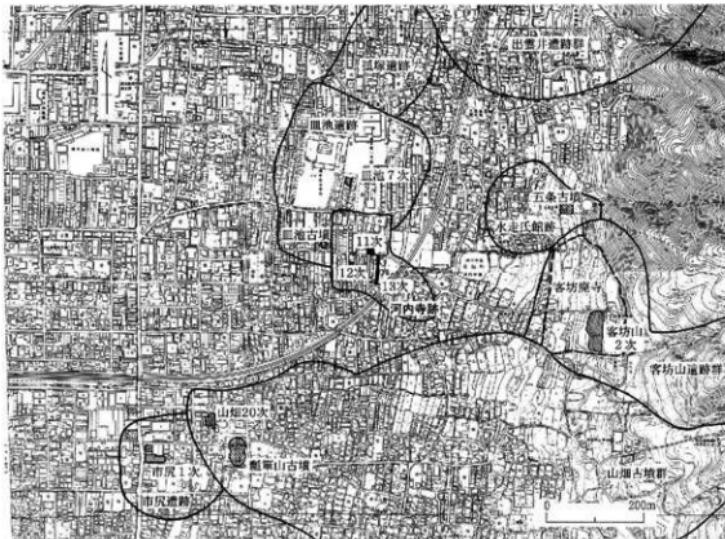
第1図 第11次・12次・13次調査の各地点

と協議を重ねた。その結果、古墳時代の遺物包含層の上面に達しない深度に届出の設計を変更された。第12次調査地は推定伽藍の範囲外であるが、從前皿池古墳が発見された地点に近いことから、寺院に先行する集落など諸データを得るため、大阪府教育委員会との協議を踏まえ、保存目的で行なう発掘調査を届出者に打診した。しかし届出者側から工事の早期着工を求められ、立会調査を行なうことでの双方合意した。

第13次調査は、個人が行なう排水設備全額助成工事に伴う調査として、平成17年8月31日から10月20日まで断続的に実施した。調査地は河内町685番地である。塔跡の発見により伽藍配置を再検討した結果、工事地で南面回廊ないしその痕跡が検出される可能性があることから、回廊推定部分を本調査とし、余白を立会調査として実施した。また、回廊や痕跡の検出により、伽藍南限の様相を把握することが期待されたところであった。本管とともに各戸への枝管部についても、立会調査を行なった。立会調査では、工事の掘削と併行して、断面精查と柱状図の作成、遺物採集などを行なった。本調査では、礎石の検出作業とともに断面図の作成、写真撮影を行なった。ただし、調査地は生活道路面であることから、1日の作業終了時には埋戻しを適宜行い、人車の通行を確保した。

現在の東大阪市東部は律令制下の河内国河内郡にある。河内寺跡の周囲は河内郡大宅郷に推定されている。ここでは河内寺塔跡の調査成果に沿って、築造の前夜となる古墳時代から、衰亡を辿る中世期にいたる時期について、周辺の遺跡様相を見ていきたい。

皿池跡は、以前から河内郡の郡衙跡に推定されてきた。これまで郡衙跡に比定される建物は検出されていないが、飛鳥時代から平安時代にかけての遺物や小規模な掘立柱建物などが発見されている。平成17年度に実施された第7次調査では総柱の掘立柱建物が1棟検出された。詳細は第6章に譲るが、総柱建物は河内寺伽藍に接することから、寺院伽藍築成前の在地豪族の動向を考える上で貴重な成



第2図 河内寺跡と周辺の遺跡

果といえよう。河内町458番地では小型低方墳の周溝の一部が発見された⁽¹⁾。「皿池古墳」と命名されている。周溝の内部から家形埴輪、朝顔形埴輪、韓式系土器とともに全形が知られる船形埴輪が出土した。船形埴輪の存在から、被葬者は外洋の水運や軍事・外交に係わる豪族の一員が推定され、河内寺の建立者である河内直（連）との結びつきを強く示唆するものと考えられる。

河内寺跡の南方に広がる山畠古墳群は、往時100基以上を数えたと推定される市域最大の古墳群である。6世紀後半から7世紀初頭にかけて築造された。古墳は主に山麓の尾根上に立地するが、山麓部を下る扇状地にも分布している。近年、この扇状地上、山畠古墳群として周知された範囲の西部（以下、「山畠古墳群西部」と仮称する）での発掘調査成果が注目されている。扇状地の最西端には、瓢箪山古墳（山畠52号墳）が所在する。南北約50mを測る双円墳と考えられている。墳丘の裾には瓢箪山稻荷神社が祀られている。瓢箪山古墳の北約50mの地点で行われた第20次調査⁽²⁾では、古墳時代後期前半の竪穴住居・掘立柱建物・現状溝が検出された。遺物は中世期の整地層から多量に出土した。この整地層には、弥生土器のほか、古墳時代の須恵器、土師器、製塙土器、韓式系土器、玉類を含んでいた。

いっぽう、第20次調査地の西に接する市尻遺跡第1次調査⁽³⁾では、古墳時代後期中葉の掘立柱建物・土坑・溝が検出された。のことから山畠古墳群西部から市尻遺跡にかけての一帯は5世紀末から6世紀前半にかけて渡来系氏族による集落が営まれたと推定され、時系列に沿って住居域の中心部が山畠から市尻へ移行したものと考えられている。いずれにしても、この集落は、古墳群の築造時期に先行するものであるから、被葬者の氏族集団の動向を押さえることが肝要となろう。なお、第3章で詳説する山畠古墳群第25次・26次調査地は成山古墳に近接し、古墳周溝の可能性がある古墳時代後期中葉の溝が検出されており、注目される。

河内寺跡の東方には、客坊庵寺が所在する。寺号は現在不詳であるが、付近を描いた山絵図には「法性寺」と字名が記されている⁽⁴⁾。客坊庵寺は標高75～110m前後に位置する山岳寺院である⁽⁵⁾。調査は局部的ではあるが、斜面を雑壇状に造成し、石垣を積んで整地した各段上で、瓦葺建物の基壇、礎石、掘立柱建物、小規模な園地、石組穴蔵などが検出されている。10世紀代の黒色土器台付壺を所用した藏骨器と火葬墓が発見されている⁽⁶⁾。時期的な検討から河内寺に関係した人物に伴うものかとする説もある。文献史料から、南山城の淨瑠璃寺と関係する天台系寺院であったことが知られている。出土した瓦には平安時代後期から鎌倉時代のものが主体を占め、室町時代のものも認められる。寿永2年（1183）、和泉国大鳥郡の瓦大工が客坊庵寺所用瓦を製作したことが記された軒丸瓦がある。河内・和泉の瓦生産を知る上で重要な資料である。河内寺の単弁十三葉蓮華文軒丸瓦（軒丸瓦II類・白鳳時代）が客坊庵寺で、客坊庵寺の均整唐草文軒平瓦（軒平瓦IX類・平安時代後期）が河内寺で、それぞれ出土しており、平安時代以降、二寺は強い紐帯にあったことが窺える。

(1) 上野利明「東大阪市河内町所在皿池古墳出土の舟型埴輪について」（『宗教と考古学』、勉誠社、1997年。）

(2) 東大阪市教育委員会「山畠古墳群第20次発掘調査」（『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成13年度－』、2002年。）

(3) (財)東大阪市文化財協会「市尻遺跡第1次発掘調査報告」（『東大阪市文化財協会概報集-1997年度-』、1998年。）

(4) 木下泰雲「古刹・古瓦之記（3）河州篇」（『古代研究』3号、（財）元興寺仏教民俗研究所、1974年。）

東大阪市教育委員会『東大阪市の寺跡』、2000年。

(5) (財)東大阪市文化財協会「客坊山遺跡群第2次発掘調査報告」、1998年。

(財)東大阪市文化財協会「客坊山遺跡群第3次発掘調査報告書」、2002年。

福永信雄「客坊庵寺」（『中世寺院の幕開け』、振河泉文庫、2001年。）

福永信雄「生駒山西麓の山岳寺院」（『佛教藝術』265号、毎日新聞社、2002年。）

(6) 才原金弘「客坊山古墳群出土の藏骨器」（『東大阪市文化財協会ニュース』4巻3号、1989年。）

2) 第11次調査

平成16年3月から着手した第11次調査では、塔の礎石、基壇ほかを検出し、コンテナ約300箱の瓦が出土した。再説になるがまず平成16年4月30日までの調査成果について概要を記しておきたい。

① 第11次調査（平成16年3月～4月）の概要

基壇は乱石積である。30～40cmの角礎を所用する基壇と、その外方に60～70cmの角礎を所用する基壇の二者を検出した。昨年度の概報作成時では、両者で大きな時期は認めがたいことから、塔礎石側を上成、外方を下成基壇と見て、二重基壇をとる塔跡と推定した。しかし、各基壇は2.4m（8尺）隔離することから、現在は塔礎石側を創建時の基壇、外方を拡張した基壇と考えている。創建時の基壇長は一辺10.7m（約36尺）、高さは1.4mを測る。

側柱では、東西列で4基、南北列で1基の礎石を確認した。塔の初重は等間の3間で柱間は1.95m（6.5尺）を測る。側柱の南北軸線は座標軸に3.5°東に振る。側柱礎石抜取穴を半掘したところ、上面と下面の2時期にわたる据付痕跡を確認した。このことから礎石の据え直しが行なわれたことが知られた。四天柱は検出した2基とも礎石は抜き取られていた。礎石抜取の時期は、後述の仏堂基壇の廢絶後と考えられ、室町時代後期ごろと想定できる。

後述の階段部の西方で小基壇を検出した。規模等は不明。基壇の軸線は塔礎石のそれとは合わないここと、小基壇の下面から塔拡張基壇の石が認められたこと、所用の瓦などから鎌倉時代に焼造された仏堂の基壇であることがわかった。小基壇の上部には焼土層が堆積し、そこから15世紀の瓦質土器羽釜が出土したため、仏堂は室町時代まで存続したことが知られた。

出土した瓦は、従前の調査で知られていた形式の軒丸瓦、軒平瓦のほかに、新種の軒平瓦が見られた。いくつかを例挙すると、まず、法隆寺式軒平瓦に相当する均整忍冬唐草文軒平瓦（軒平瓦VII類）がある。文様が簡化していることからみて、奈良時代に下る資料と考えられる。次に、平安時代後期に属する唐草文軒平瓦（軒平瓦VII類・IX類・X類）、変形山形文軒平瓦（軒平瓦V類）がある。塔の補修瓦として所用されたものである。また、これら平安時代後期の軒平瓦群が発見されたことから、塔の存続時期を具体的に推定できることになった。

第11次調査地が塔跡で確定したことにより、従前の伽藍配置を再検討する必要が生じた。従前の伽藍配置の推定には、(1)東面回廊の礎石の規模が、南北で差があること、(2)北側の水田で回廊礎石が1間分西にずれることから、礎石の据付には時期差があると判断し、第1次・第3次で検出した伽藍内建物は講堂、今回の調査地は金堂跡と推定された。回廊は当初金堂に取り付いていたのが、後に1間分西にずれて講堂に取り付くようになったと考えられた。

ところが、今回の調査成果から、従前の講堂跡は金堂跡であり、講堂跡は今まで未検出であることが判明した。また、回廊礎石のズレは、回廊外に別個の建物が所在したため現段階では推定している。この点の検証は今後の調査に委ねたい。



第3図 第11次調査トレンチ位置図

②第11次追加調査（平成17年2月～3月）の概要

第11次調査地の公有化に伴い、平成17年2月15日から現地調査を再開した。西壁断面で塔基壇を検出したため、調査については極力短期間が望まれた。調査終了後は直ちに着手前の状況に埋め戻す必要があった。このため調査の主眼を、i 南面階段の検出を通じて基壇長を確定すること、ii 心柱の痕跡を確認すること、に置いて調査を進めることにした。

層位

層位は、第11次調査で確認したものに準じて行った。以下のとおりである。

第1層 現代の盛土層。

第2層 〈上層〉 2.5Y3/2黒褐色中礫混じりシルト。〈下層〉 7.5Y3/1オリーブ黒色砂混じりシルト。拳大の礫の層間に多量の瓦片を含む層。文字通り「瓦礫層」。飛鳥～奈良時代の瓦を主体に、微量の近世期の陶器片を含む。江戸時代の盛土層。

第3層 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトで粗粒砂～細礫を含む。鎌倉時代後期以降の盛土層、焼土層。南側では広く基壇を覆い、仏堂の焼失後に堆積した層である。上面は礫石抜取穴の造構面、下面は礫石の掘形土坑の造構面を形成する。階段部付近では、第4層までに3層の間層が認められた。

第3A層 5Y5/6オリーブ色細粒砂。

第3B層 5Y4/1灰色中粒砂～細粒砂。第3A層が少量混じる。炭化物を含む。

第3C層 2.5Y4/3オリーブ褐色粘土質細粒砂。中礫を多量に含む。

以上の3層のうち、第3A層・第3B層は仏堂建築の整地層である。

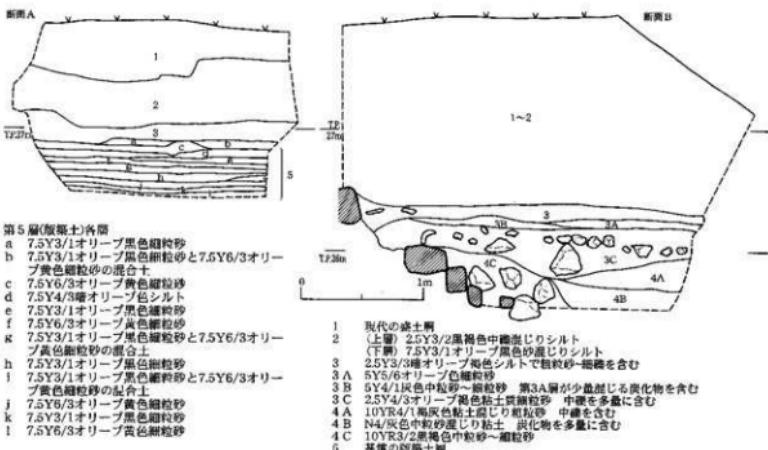
第4層 塔廃絶の直後に堆積した炭化物層。階段部では雨落ち溝と同層準で3層に区分できた。

第4A層 10YR4/1褐色灰土混じり粗粒砂。中礫を含む。

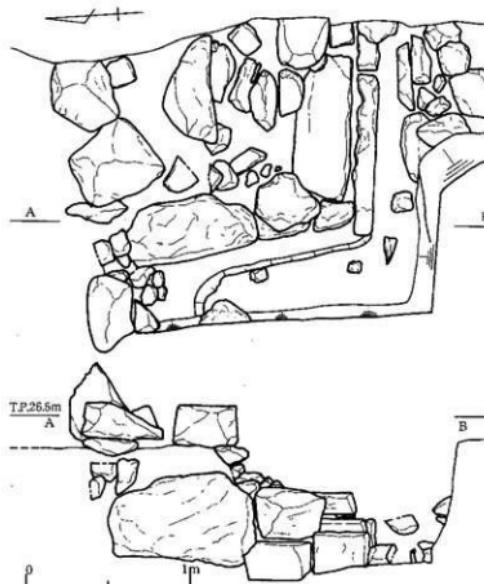
第4B層 N4/灰色中粒砂混じり粘土。炭化物を多量に含む。

第4C層 10YR3/2黒褐色中粒砂～細粒砂。創建期の階段が廃棄された後に堆積した層である。

第5層 基壇の版築土層。細粒砂層とシルト層、中礫層が交互に見られる。



第4図 第11次調査断面A・断面B実測図

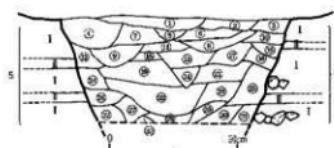


第5回 第11次調査階段審査図

0.12mを測る。凝灰岩上面から深さ0.13mまで確認した。凝灰岩外面の一辺には墨書きが施されていたが、字形は不明である。創建時階段の西列に沿って凝灰岩の抜き跡も見つかり、基壇長が確定した。また階段部西側の第3層各層から土師器や瓦が密集して出土した。

心瓣与心柱痕跡

平成16年4月までの調査で、心礎を探るべくトレンチを設定したが、昨年度の概報で記したように、其壇上面から約1.5mの深さで掘り下げを断念した。これは、調査地が付近の畠地より堆く、堆土を東



（略）

側に仮置きしていたため、排土の頂上部とトレーニング最下部の比高差が3mを超える危険を伴うからであった。中断に祭して心礎トレーニング全体を土嚢で埋め戻し、今後の調査に備えたところであった。調査再開後、トレーニングのうち、約0.5mの深さまで土嚢を取り除き、心礎直跡の検査を行った。

の跡ほどまで土を取り除き、心柱痕跡の奥に打たれたトレンチ上での心柱痕跡は径0.9mを測る。心柱痕跡の内部に堆積した土層は第6図のとおりで、外部が舗築士であるのに対し、オリーブ色細粒砂層と礫層のブロック土が見られた。心柱が空洞になってからの混入である。

その他の調査

鎌倉期の仏堂小基壇の外側に崩落した小さな瓦溜りがあり、検出後、瓦を採集した。

③ 第11次追加調査の出土遺物

飛鳥～平安時代の遺物がある。土器、瓦などが出土した。瓦の記述は「第6章 河内寺跡第11次発掘調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報』2005.3.に従う。以下、項目ごとに説明を記す。

土器（第7図1～12）

平安時代の上師器と黒色土器がある。第3層各層から出土した。

1～10は土師器である。杯と皿がある。1～7は杯である。体部から口縁部にかけて外上方へ伸び、口縁端部は丸く終わる。体部外面に指頭圧痕が残る。体部内面をナデ調整、口縁部外または内外面をヨコナデ調整する。1は底部に断面が三角形の高台を貼り付ける。1～7は胎土中に石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。

8・9は小皿である。（中世期の土師器の皿については口径10cm未満を小皿、10cm以上12cm未満を中皿、12cm以上を大皿とする。）8は底部から口縁部にかけて内湾し、口縁端部は丸く終わる。外面をナデ調整する。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁端部に煤が付着することから燈明皿として使われていたと考えられる。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。9は体部から口縁部にかけて外へ大きく開く。口縁端部は内側に肥厚し、丸く終わる。口縁部外面をヨコナデ調整、他は風化により調整は不明である。胎土中に石英、長石、雲母を含む。10は大皿である。体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。口縁部外面を2段のヨコナデ調整、他をナデ調整する。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。

11・12は黒色土器である。皿・碗がある。11は皿である。口縁部が外反し、口縁端部は丸く終わる。内面と口縁部外面を黒く焼す。体部外面をナデ調整、口縁部外面をヨコナデ調整する。内面はヘラミガキ調整する。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。

12は碗である。体部から口縁部にかけて内湾し、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁端部内面に沈線を廻らす。外面を黒く焼す。外面はヘラミガキ調整する。胎土中に石英、長石、雲母を含む。

瓦（第7図13～17）

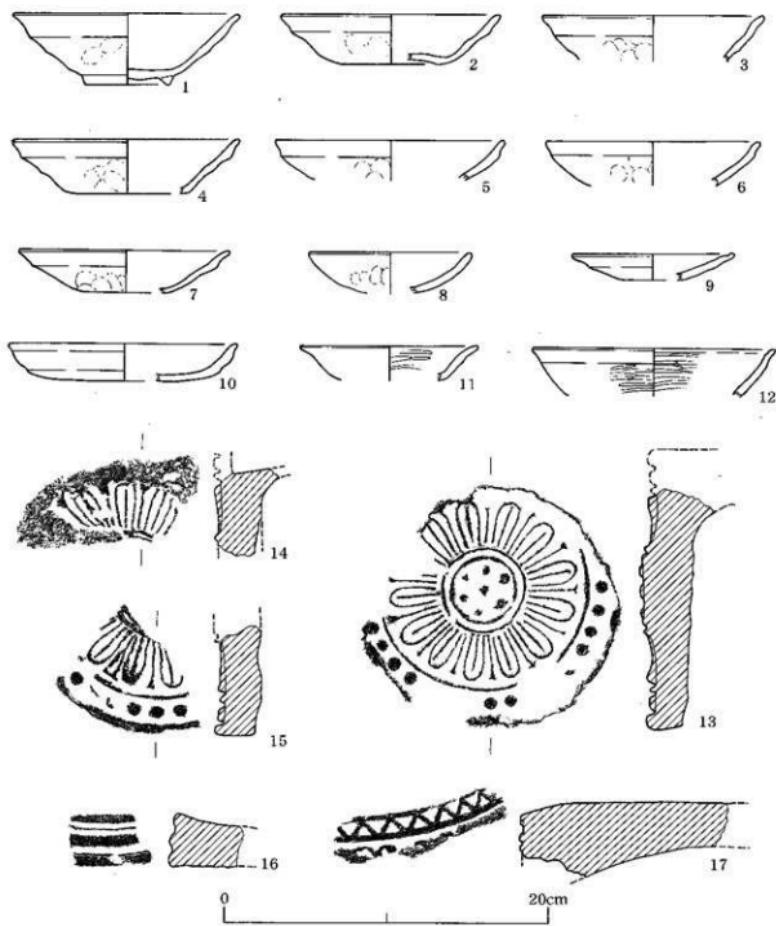
軒丸瓦

13～15は半弁十三葉蓮華文軒丸瓦である。軒丸瓦II類。瓦当部が残存する。13は中房が1+6の蓮子が廻る。内区には十三葉の単弁を持つ。弁間には間弁がある。花弁はやや凹み、先端は丸い。中輪は凸線を持つ。外区内縁に珠文を廻らす。瓦当部内面は布目をナデ調整で消す。残存長14.9cm、残存幅4.6cm、厚さ3.2cmを測る。色調は灰色を呈する。14は花弁部が残存する。弁間には間弁がある。花弁はやや凹み、先端は丸い。瓦当部内面はナデ調整する。瓦当部と丸瓦部の接合部に布目がみられる。残存長5.4cm、残存幅4.0cm、厚さ2.9cmを測る。色調は灰色を呈する。15は花弁部から外区が残存する。13と同様であると考えられる。瓦当部内面は布目をナデ調整で消す。残存長6.7cm、厚さ2.6cmを測る。色調はオリーブ灰色を呈する。胎土中に角閃石、石英、長石、雲母を含む。所謂、生駒西麓産である。13は第3層、14・15は第2層から出土した。白鳳時代。

軒平瓦

16は三重弧文軒平瓦である。軒平瓦I類。顎は曲線顎である。瓦当部に2本の溝を入れ、三重弧文とする。重弧文の断面は半円形を呈する。平瓦部凸面は格子のタタキ調整、凹面は布目がみられる。厚さ3.3cm、残存長4.7cmを測る。色調は凸面が灰色、凹面が暗灰色を呈する。胎土は生駒西麓産である。第3層出土。飛鳥時代後期。

17は偏行唐草文軒平瓦である。軒平瓦III類。瓦当部上半が残存する。顎は曲線顎である。内区は左



第7図 第11次追加調査出土遺物実測図

偏行の唐草文と考えられる。外区は線鋸歯文を廻らす。平瓦部凸面はナデ調整、凹面は布目がみられる。残存長12.9cm、残存厚4.6cmを測る。色調は灰黄色を呈する。胎土は生駒西麓産である。第3層出土。白鳳～奈良時代。

3) 第12次調査

① 調査の概要

平成17年5月、東大阪市河内町674-23番地の一部において、分譲住宅建設の計画があり、「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。ベタ基礎工法による掘削深度は0.85mであり、工事予定地が河内寺の推定伽藍のすぐ西方に位置することから、事前の確認調査が必要な旨、届出者に通知した。

確認調査は平成17年6月9日に実施した。調査トレーンチは伽藍との兼ね合いから、東端に近い箇所で設定した。調査着手前では、宅地の地表面は西側道路から約0.45m高く、現代の盛土・表土層が厚く堆積していることが予想された。ところが、掘り下げてみると、表土層は0.15mほどであり、それ以下は旧地形の層準を保っていることが判明した。確認調査の層位は、次のとおりである。なお、以下は、立会調査の層位との比較検討から得られた結果を記している。

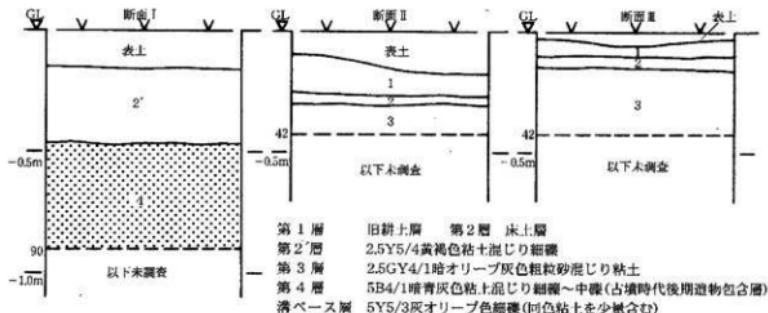
第1層 表土もしくは旧耕土層。

第2'層 2.5Y5/4黄褐色粘土混じり細礫。上面はマンガン粒を多量に含んで赤化しており、床土として利用されたことがわかる。

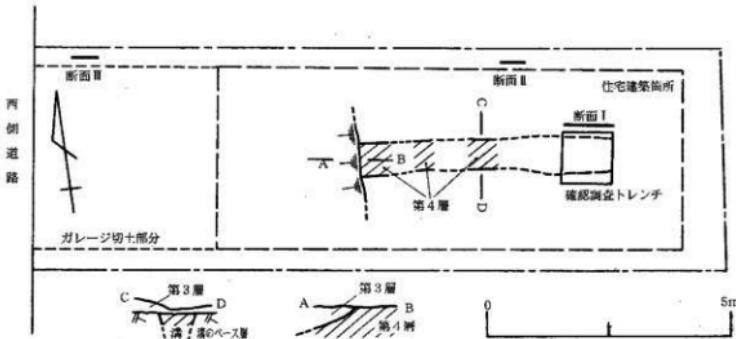
第4層 5B4/1暗青灰色粘土混じり細礫～中礫。確認調査では、間層となる第3層は認められず、すぐ第4層が露出していた。古墳時代後期の遺物包含層である。中礫と中礫の間に夾在する粘土内もしくは中礫に密着する状態で土器類・須恵器が多量に出土した。須恵器蓋坏の完形品も見られた。

第4層は還元化され、青灰色を呈する。これは流水ないし滯水によるもので、溝状の遺構の埋土と考えられる。また出土した土器の断面はローリングを受けておらず、ほぼ原位置を保っていることが推定された。これが近接する皿池古墳と関連する古墳周溝の堆積土か、あるいは寺院造営以前に存在した集落の溝堆積土なのかは不詳であったが、いずれにせよ、調査地周辺に該期の遺構が広がることが予想された。

さて、第4層上面のレベルは、地表下0.45mであったため、工事実施により遺物包含層が破壊されることとなり、直ちに届出者と協議に入った。届出者からは、埋蔵文化財の破壊を避けるため、基礎深度を浅くした設計に変更し、届出書の再提出を行なった。東大阪市教育委員会は、調査結果を大阪府教育委員会に報告するとともにその指示を仰いだ。大阪府教育委員会からは、もし遺物包含層が保全されるのであれば、保存目的の発掘調査を実施して広く河内寺跡に係わるデータを抽出するよう指



第8図 第12次調査断面柱状図



第9図 第12次調査遺構検出状況略測図

導を受けた。再度の協議でこの旨を伝えたが、届出者側から工事着手を急ぐとの返答を得たので、工事と併行して立会調査が必要と通知した。

立会調査は平成17年6月21日に実施した。立会調査では、分譲住宅建築部分37.23m²とガレージ設置による切土部分13.54m²、合計50.77m²を対象とした。敷地面積は64.48m²であったため、宅地の約80%を調査したことになる。

調査は工事掘削深度(0.42m)の底面精査、断面精査とともに、埋蔵文化財が検出されるかどうかの確認作業を行なった。工事底面の状況は第9図に掲げたとおりである。まず立会調査の層位を確認しておこう(第8図の断面II・断面III)。

第1層 旧耕土層。第2層 床土層。

第3層 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粗粒砂混じり粘土。レンガ状の焼物を含む。現代の堆積上。

第4層 5B4/1暗青灰色粘土混じり細礫～中礫。確認調査と同様で、古墳時代後期の遺物包含層。

断面図に示したように、工事箇所の底面はほぼ第3層にとどまっていたが、住宅予定地の東側で、宅地の中軸線に沿うように、第4層が露出している箇所が認められた。西側は第3層が厚く堆積していた。露出は3箇所で島状を呈する。溝状の遺構と考えられる。東側の露出箇所の延長線上に確認調査トレンチがあり、トレンチ幅いっぽいに溝状の遺構が走ることが推定できた。溝は幅約0.5～0.6mを測る。深さは確認できなかったが、溝の断面は直気味に傾斜することが観察できた。また東西方向に一直線に走るようである。

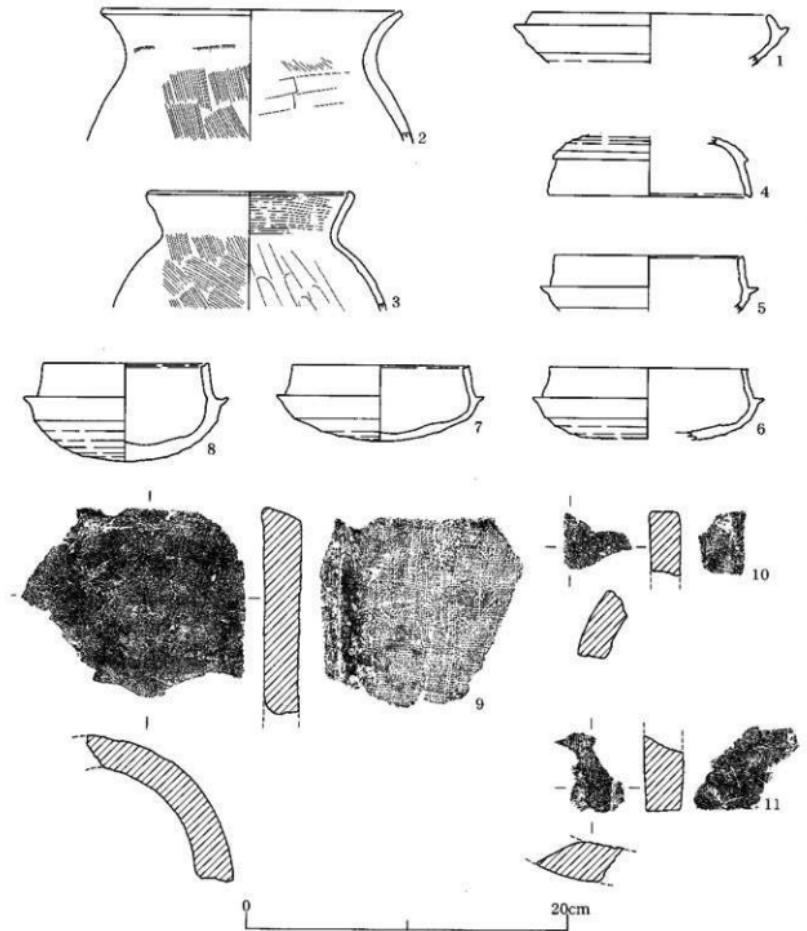
これらのことから、古墳周溝とは考えにくく、集落に伴う溝の蓋然性が高い。調査地は、河内寺の西面回廊に接する地点であり、西面回廊や築地など寺院造営に際し、周辺に広がっていた6世紀代の集落を削平、整地したことが推定できる。その折に集落に伴う遺物を廃棄したものと考えられる。なお、遺物包含層の上面には、すぐ現代の堆積層が介在することから、寺院造営時の整地面は滅失していると考えられる。遺物包含層が東側で見られることは、現代の削平面に由来する。つまり西側では旧地形の傾斜面が大きく、遺物包含層は工事掘削深度のはるか下方に存在することが考えられた。

② 第12次調査の出土遺物

古墳～奈良時代の遺物がみられる。土器、瓦などが出土した。以下、項目ごとに説明を記す。

土器(第10図1～8)

第3層川土土器



第10図 第12次調査出土遺物実測図

1は須恵器の杯である。体部は外へ開き気味に伸びる。立ち上がり部は内傾して伸び、口縁端部は丸く終わる。受部はやや外上方に短く伸びる。体部外面下半を回転ヘラケズリ調整、他を回転ナデ調整する。その後、体部外面に縦方向のナデ調整する。胎土中に白色、黒色砂粒を含む。6世紀中葉。

第4層出土土器

土師器と須恵器がある。

2・3は土師器の甕である。体部は張り、口縁部は大きく外反する。口縁端部は面を持つ。2は体



第11図 第4層出土須恵器蓋杯（8）

部外面と頸部内面を8本/cmのハケメ調整する。口縁部外面をヨコナデ調整、体部内面は板状工具によるナデ調整する。3は口縁端部が内側にやや肥厚する。体部外面と口縁部内面を5本/cmのハケメ調整する。口縁部外面をヨコナデ調整、体部内面を板状工具によるナデ調整する。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。5世紀末。

4～8は須恵器である。蓋杯と杯がある。

4は蓋杯である。天井部を欠損する。体部は内弯し、口縁部は下方へ長く伸びる。口縁端部は内側に段を持つ。体部外面と口縁部外面の境に稜がわざかに突出する。口縁部外面と内面を回転ナデ調整、他を回転ヘラケズリ調整する。5～8は杯である。底部から体部にかけて内弯気味に立ち上がる。立ち上がり部はやや内傾し、大きく伸びる。口縁端部はやや凹む。受部は水平方向に短く伸びる。体部外面下半を回転ヘラケズリ調整、他を回転ナデ調整する。8は口縁端部に沈線を廻らす。回転ナデ調整の後、見込み部をナデ調整する。内面から受部にかけて赤色顔料が付着する。4～8は胎土中に白色、黒色砂粒を含む。5世紀末。

瓦（第10図9～11）

丸瓦と平瓦がある。第3層から出土した。

9・10は丸瓦である。9は凹面に縦横7本/cm、10は縦横8本/cmの布目がみられる。凸面はナデ調整する。側面はケズリで面取りする。9は残存長12.8cm、残存幅9.1cm、厚さ2.3cmを測る。10は残存長4.0cm、残存幅3.0cm、厚さ2.0cmを測る。色調は灰白色を呈する。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。奈良時代。

11は平瓦である。凹面に縦横8本/cmの布目がみられる。凸面はナデ調整する。側面はケズリで面取りする。残存長4.7cm、残存幅5.4cm、厚さ2.4cmを測る。色調は灰色を呈する。胎土中に角閃石、石英、長石、雲母を含む。奈良時代。

4) 第13次調査

平成17年6月、東大阪市河内町685番地において、個人から排水設備全額助成工事に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。工事予定地は、第11次調査の成果から南面回廊に直交する道路にあたり、工事掘削による埋蔵文化財への影響が懸念された。東大阪市教育委員会では直ちに大阪府教育委員会に報告するとともに指導を仰いだ。その結果、推定南面回廊の北側と南側は管路掘削幅が1mに満たないため立会調査、推定南面回廊については確認調査を実施することとなり、その旨届出者に伝達した。届出者と協議を重ね、平成17年8月31日から立会調査を実施することで双方合意した。

本管の立会調査・確認調査の実施後、枝管の立会調査も行った。本管の立会調査は、平成17年8月31日・9月1日・9月2日・9月9日・9月10日・9月12日・9月13日の延べ7日間、確認調査は9月3日・9月6日・9月8日の延べ3日間、枝管の立会調査は平成17年10月14日・10月19日・10月20日の延べ3日間行った。

南面回廊が後述のように、極めて遺存の良好な状態で検出されたため、記録保存の観点から、確認調査実施地点（以下「本調査区」と仮称する）において、国家座標系による調査杭を打設し、回廊検出ポイントの表記につとめた。測量業務は平成17年度の単価契約によりオオサカクリーンサービス株式会社に委託して実施した。

① 立会調査の概要

管路は、南北道路の東側が污水管、西側が雨水管となっていた。総延長は約57mである。工事着手時の污水管管底までの掘削深度は地表面から約1.2m、雨水管管底までは同約1.0mであった。このため、東壁断面について、1日2箇所の柱状図を作成することとした。柱状図作成箇所は北からA、B、Cと表記し、上記の層準まで出土した遺物についても、その区間の地区名になぞらえた。管路には人孔設置箇所が含まれるため、1日の掘削区間は一様でない。また南面回廊の南側、推定伽藍の外に出る地区(～L地区)では後述のように南へ大きく傾斜面を持つため、柱状図作成箇所も最小限とした。

立会調査で検出した上層は第12図のとおりである。先述のとおり、J地区以南では堆積層の構成が大きく変化するため、図示は一部とした。層位は北端のA地区を基本とした。J地区まで普遍的に見られる第4層、第6層を鍵層とし、その上部・間層はAからGまで枝番号を振ることで、層位の変化を見るようにした。層位は次のとおりである。

第1層 旧耕土層。 第2層 床土層。

第3層 地区により第3 A層から第3 G層まで7層に区分される。

第3 A層 5Y4/1灰色細礫混じり粘土質シルト。

第3 B層 5Y4/1灰色細粒砂。

第3 C層 7.5Y4/3暗オリーブ色細礫混じりシルト。

第3 D層 5Y4/2灰オリーブ色粘土混じりシルト。

第3 E層 5Y5/3灰オリーブ色中礫混じり粗粒砂。

第3 F層 7.5Y5/1灰色中礫混じり粗粒砂。

第3 G層 7.5Y5/1灰色中礫～巨礫。

第4層 5Y4/1灰色細礫混じり粘土質シルト。色調は第3 A層、第3 B層と相似するが、第3層各層が砂礫層を基軸にするのに対し、第4層は粘土層に近く縮まっている。

第5層 地区により第5 A層から第5 G層まで7層に区分される。

第5 A層 N4/灰色粘土質細粒砂。

第5 B層 7.5Y4/1灰色～2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト。

第5 C層 7.5Y5/1灰色粘土質シルト。炭化物を含む。

第5 D層 5Y6/1灰色粘土質シルト。

第5 E層 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト。

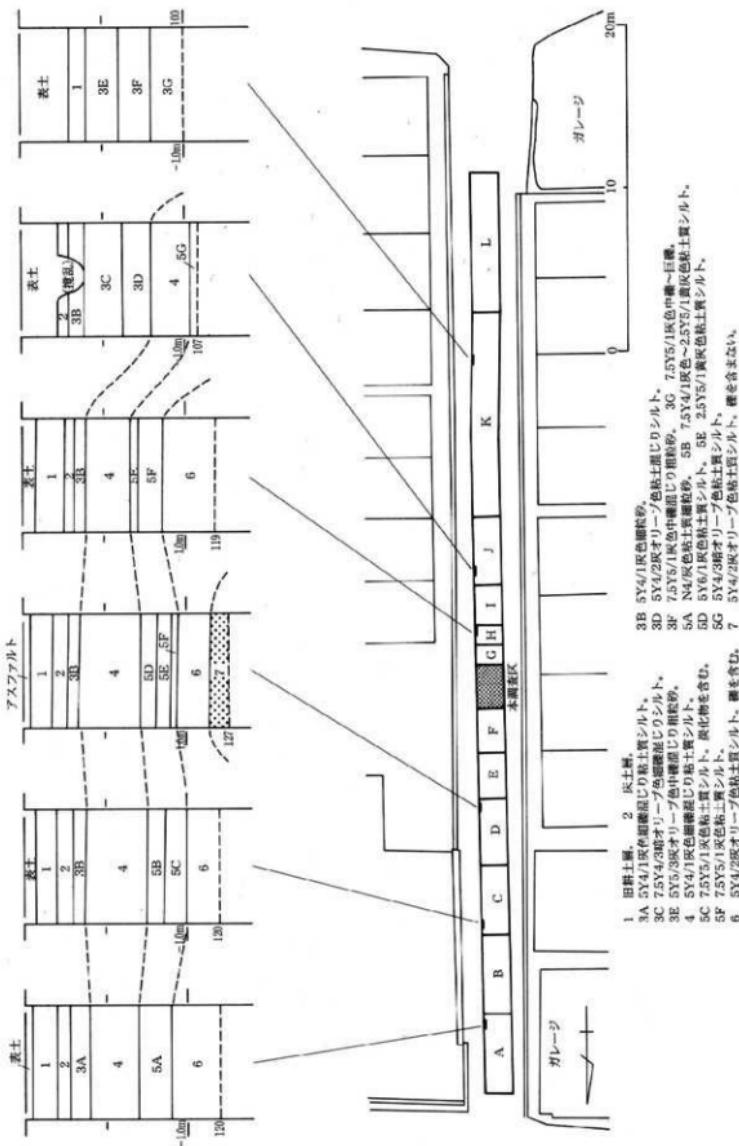
第5 F層 7.5Y5/1灰色粘土質シルト。

第5 G層 5Y4/3暗オリーブ色粘土質シルト。第5層各層は粘土質シルト層として一括できる。

第6層 5Y4/2灰オリーブ色粘土質シルト。礫を含む。

第7層 5Y4/2灰オリーブ色粘土質シルト。第6層と同質だが、礫を含まない。奈良時代の瓦片を多く包含する。

立会調査で確認した第1層から第6層までは、伽藍の造成に由来する盛土や整地土ではなく、廃絶後の堆積層である。しかし、鍵層とした第4層と第6層の層準をみると、間接的ではあるが、下部の伽藍造成に伴う上層の状態を窺うことができる。第4層上面のレベルは、A地区から順に、0.40m、0.37m、0.33m、0.38mとほぼ同水準を保っているのが、H地区では0.80mと急激に下降する。これは第6層上面のレベルでも同様の事例を指摘できる。J地区以南では第6層の所在を確認すらできない。はるか下部に堆積しているものと考えられる。J地区は南面回廊のすぐ南に当たり、この地点から伽藍外に出ることが推定されよう。



第12図 第13次調査立会調査箇所断面柱状図

本調査区および立会調査H地区で検出した南面回廊基礎の周囲で各戸に接続する排水管については、平成17年10月14日から3口間、別途立会調査を実施した。枝管の掘削深度は地表面から約0.8mで層準は第5層にとどまっていた。

② 本調査区の概要

当初、南面回廊の基礎石が原位置を保って遺存しているとは予想できず、基礎石や基壇上部の上層堆積状況に投影された何らかの痕跡を検出すべく調査を行なった。第11次調査の成果で得た伽藍配置で南面回廊と推定される箇所を本調査区とした。基礎石は本調査区とともに、立会調査H地区でも検出したが、H地区ではガスや水道の埋設管が横断していたため、調査による掘削が不能で、本調査に切り替えることができなかった。したがってH地区の立会調査は限定的とならざるを得なかったことをお断りしておく。本調査区は南北約2.9m、東西1.9mの規模である。なお、H地区立会調査の成果についても本項で触れておきたい。

本調査の層位は次のとおりである。なお層名は立会調査の層序と対応していない。

第1層 旧耕土層。 第2層 床土層。

第3層 5Y4/1灰色細粒砂。

第4層 5Y4/1灰色細繊混じり粘土質シルト。

第5層 4層に区分される。

第5A層 5Y4/1灰色シルト質細礫。

第5B層 5Y4/1灰色巨礫混じりシルト。

第5C層 5Y5/3灰オリーブ色粗粒砂混じりシルト。

第5D層 5Y4/1灰色粘土混じりシルト質細礫。

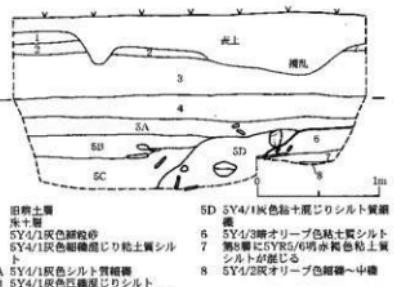
第6層 5Y4/3暗オリーブ色粘土質シルト。上面は基礎石据付穴の遺構面を形成する。

第7層 第8層に5YR5/6明赤褐色粘土質シルトが混じる。土質からみて回廊の基壇を構成する土層と考えられる。ただし版築の状況は確認できなかった。

第8層 5Y4/2灰オリーブ色細礫～中礫。礫屑で回廊基壇構築のベース層である。

調査による掘削深度は工事のそれに準拠する必要があり、回廊基壇の構築状況は不明な点が多いが、第5D層は回廊基壇の崩落に伴う堆積層と推定でき、第5D層の北への傾斜面は基壇を反映した痕跡と考えられる。

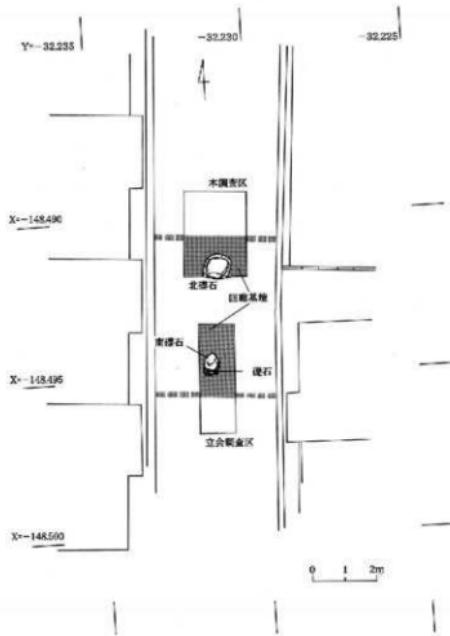
基礎石は北と南で2基検出した。仮に北基礎石、南基礎石としておく。北基礎石は東西0.70m南北0.68mを測る自然石である。上面は扁平、中央部でやや凹むが、造り出しなどの加工は認められない。北基礎石の据付穴は不定円形を呈し、一辺0.86m、検出面からの深さ0.29mを測る。据付穴の埋土は、5YR5/6明赤褐色粘土質シルトを主体に第8層が混じる層であった。北基礎石を取り上げ後、据付



第13図 第13次調査本調査区断面実測図



第14図 第13次調査本調査区
基礎石・根石検査状況平面図



第15図 第13次調査北礎石と南礎石の位置関係

の軒の出は1.03m (3.5尺) と推定される。

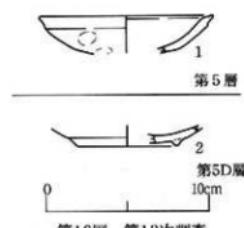
③ 第13次調査の出土遺物

古墳～平安時代の遺物がある。土器、瓦などが出土した。以下、項目ごとに説明を記す。

土器

遺物包含層出土土器（第16図）

1は土師器の皿である。体部から口縁部にかけて内湾し、口縁端部は丸く終わる。体部外間に指痕圧痕が残る。口縁端部内面に沈線を廻らす。内外面をナデ調整する。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ繊維を含む。平安時代。第5層出土。2は土師器の底部である。底部に断面が三角形の高台を貼り付ける。高台部はヨコナデ調整、他はナデ調整する。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ繊維を含む。平安時代。第5D層出土。



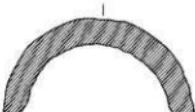
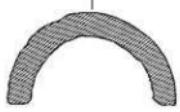
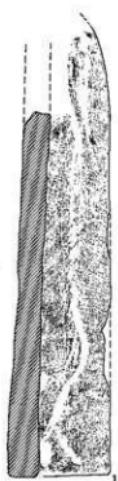
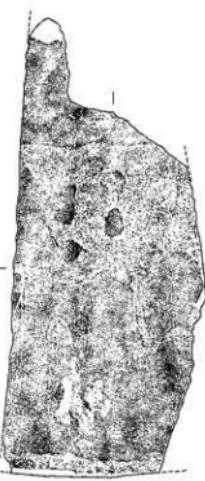
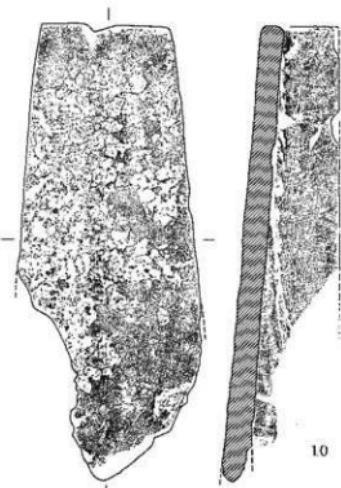
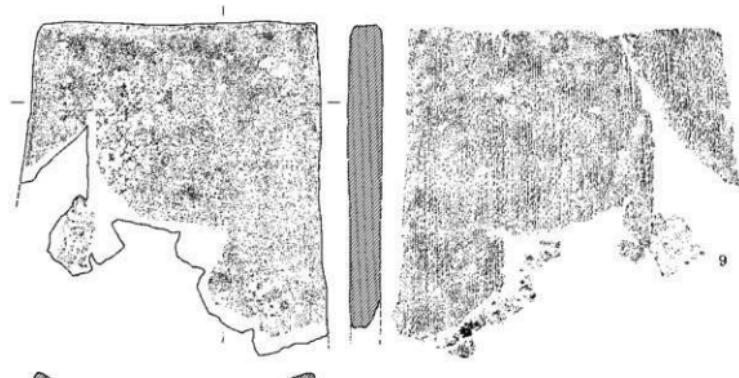
第16図 第13次調査出土土器実測図

の根石を検出した（第14図、図版8）。根石は拳大で、底面ではなく、据付穴の側面を囲繞するように張り付けられていた。据付穴の造構面には、一辺0.3～0.5mの角礎が露出していた。基壇の用礎の可能性があるが、今回の調査では基壇の石積み状況を確認していないことから、この点は不明である。むしろ、基壇構築のベース層となる礎層が一部露出した蓋然性が高い。

南礎石は、立会調査H地区で検出した。工事箇所を横断する埋設管の関係で、礎石のみの調査にとどまった。南礎石は東西0.52m南北0.59mを測る自然石である。北礎石より小振りである。また平坦面も小さい。造り出しの加工も認められなかった。南礎石の南側で拳大の根石を3個検出した。北礎石、南礎石とともに現地で取り上げ、保存している。

北礎石と南礎石の位置関係を図示したのが第15図である。礎石の心心で、2.95m (10尺) を測る。これは東面回廊の礎石間数値と一致する。また基壇痕跡を反映した第5D層の傾斜面から、回廊

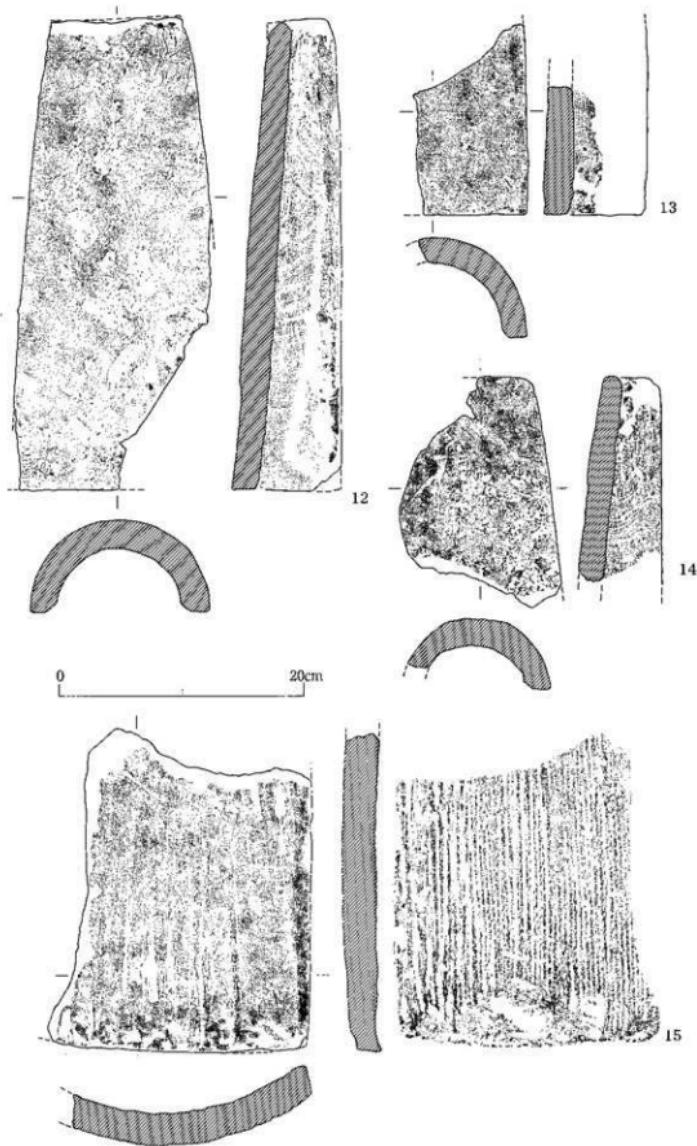
礎石据付穴内出土土器（図版11、3～8）
國化できなかつたため写真図版のみ掲載する。
3・4は須恵器である。3は杯または蓋杯の体部である。外面を回転ヘラケズリ調整、内面を回転ナデ調整する。4は蓋杯の口縁部である。口縁部にかけて内湾する。口縁端部内面がやや内傾した段



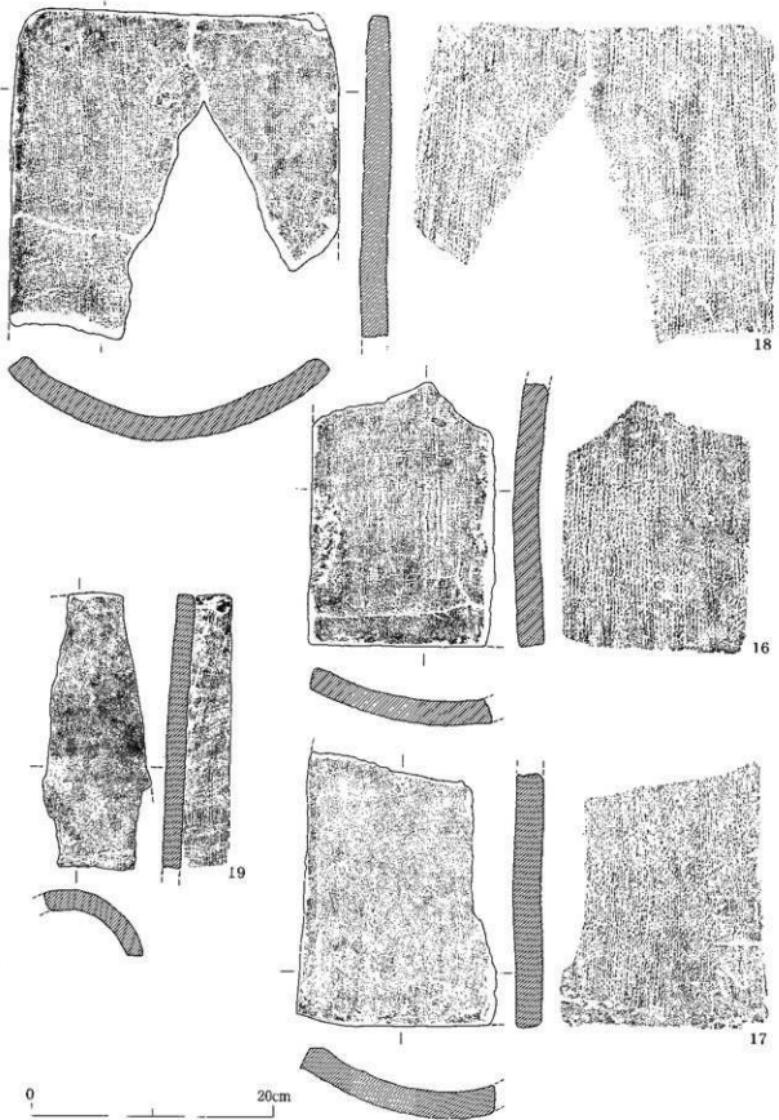
0

40cm

第17図 第13次調査出土瓦片測図 (1)



第18図 第13次調査出土瓦実測図 (2)



第19図 第13次調査出土瓦実測図 (3)

を持ち、丸く終わる。内外面を回転ナデ調整する。胎土中に白色、黒色砂粒を含む。6世紀前半。5～8は土師器である。体部の破片である。内外面をナデ調整する。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。詳細な時期は不明であるが、占墳時代後期に属するものか。

瓦

奈良時代の丸瓦と平瓦がある。すべて胎土中に角閃石、石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。生駒西麓産である。

D地点出土瓦（第17図9・10）

9は平瓦である。凹面に縦横7本/cmの布目痕が残る。凸面は縦目のタタキ調整する。側面と凹面側縁をケズりで面取りする。残存長27.3cm、残存幅24.2cm、厚さ2.7cmを測る。色調はにぶい黄橙色を呈する。10は丸瓦である。凹面に縦7本/cm、横5本/cmの布目痕と粘土のつなぎ目痕が残る。凸面は縦日のタタキをナデ調整で消す。凸面に二次焼成によるうろこ状の剥離痕がある。側面と凹面側縁をケズりで面取りする。残存長37.6cm、残存幅14.7cm、残存高9.4cm、厚さ2.2cmを測る。色調はにぶい黄橙色を呈する。

第5層（第17～19図11～17）

11～14は丸瓦である。11・12は凹面に二次焼成によるうろこ状の剥離痕がある。11は凹面に狭端部から約10cm、12は約13cmの位置に瓦が重なっていた痕がある。11～13は凹面に縦横7本/cmの布目痕と粘土のつなぎ目痕が残る。14は縦4本/cm、横7本/cmの布目痕が残る。凸面はナデ調整する。11・14は縦日のタタキをナデ調整で消す。側面と凹面側縁をケズりで面取りする。11は残存長37.6cm、残存幅15.8cm、残存高8.3cm、厚さ2.2cmを測る。12は残存長38.3cm、残存幅15.3cm、高さ9.0cm、厚さ2.4cmを測る。11・12の色調は凹面が灰褐色、凸面がにぶい黄橙色。13は残存長15.5cm、残存幅9.1cm、残存高8.5cm、厚さ2.5cmを測る。色調は凹面が灰色、凸面が浅黄橙色を呈する。14は残存長18.9cm、残存幅12.5cm、残存高6.8cm、厚さ2.3cmを測る。色調はにぶい黄橙色を呈する。

15～17は平瓦である。弯曲がゆるやかである。15は凹面に粘土のつなぎ目痕が残る。15・17は凹面に縦横8本/cm、16は縦横7本/cmの布目痕が残る。凸面は縦目のタタキ調整。側面と凹面側縁をケズりで面取りする。15は残存長26.2cm、残存幅21.1cm、厚さ2.7cmを測る。色調はにぶい黄橙色。16は残存長22.0cm、残存幅15.1cm、厚さ2.2cmを測る。色調は凹面が灰白色、凸面が灰黄色。17は

残存長22.6cm、残存幅16.2cm、厚さ2.2cmを測る。色調は灰黄色。

第5B～5C層（第19図18・19）

18は平瓦である。凹面と側面に縦横7本/cmの布目痕が残る。凸面は縦日のタタキ調整。残存長27.4cm、残存幅26.6cm、厚さ2.2cmを測る。色調は灰色。

19は丸瓦である。凹面に縦横7本/cmの布目痕が残る。凸面はナデ調整する。側面はケズりで面取りする。残存長23.0cm、残存幅8.2cm、残存高5.5cm、厚さ1.7cmを測る。色調はにぶい黄橙色。

第1表 古代の主要な塔（単位：尺、1尺=0.294～0.303m）

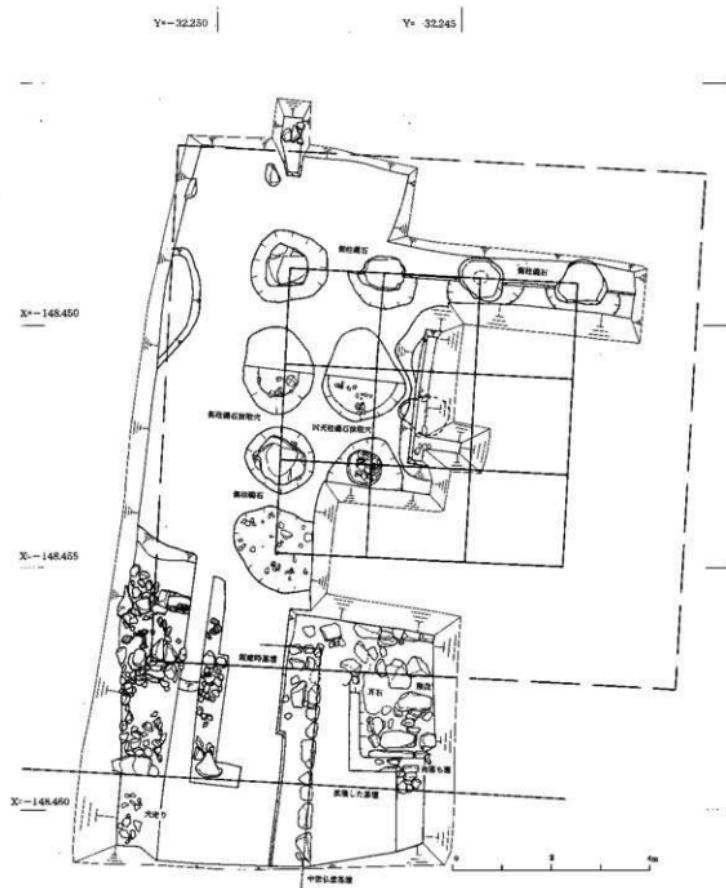
寺名	柱間寸法	基壇・辺	層数
法隆寺	21.6 (6.3 9.0 6.3)	46.5	五重
法起寺	21.6 (6.3 9.0 6.3)	39.3	三重
尼寺庵寺	24 (8×3)	45	
川原寺	20 (6.7×3)	39	
山田寺	22 (7.8 7)	43	
伊丹庵寺	21.3 (6.9 3.6)	42.5	
美濃弥勒寺	21 (7×3)	38	
河内寺	19.5 (6.5×3)	36	

※データは、猪崎和久「東大寺七重塔考」(『論集東大寺創建前』、2004年。より引用)

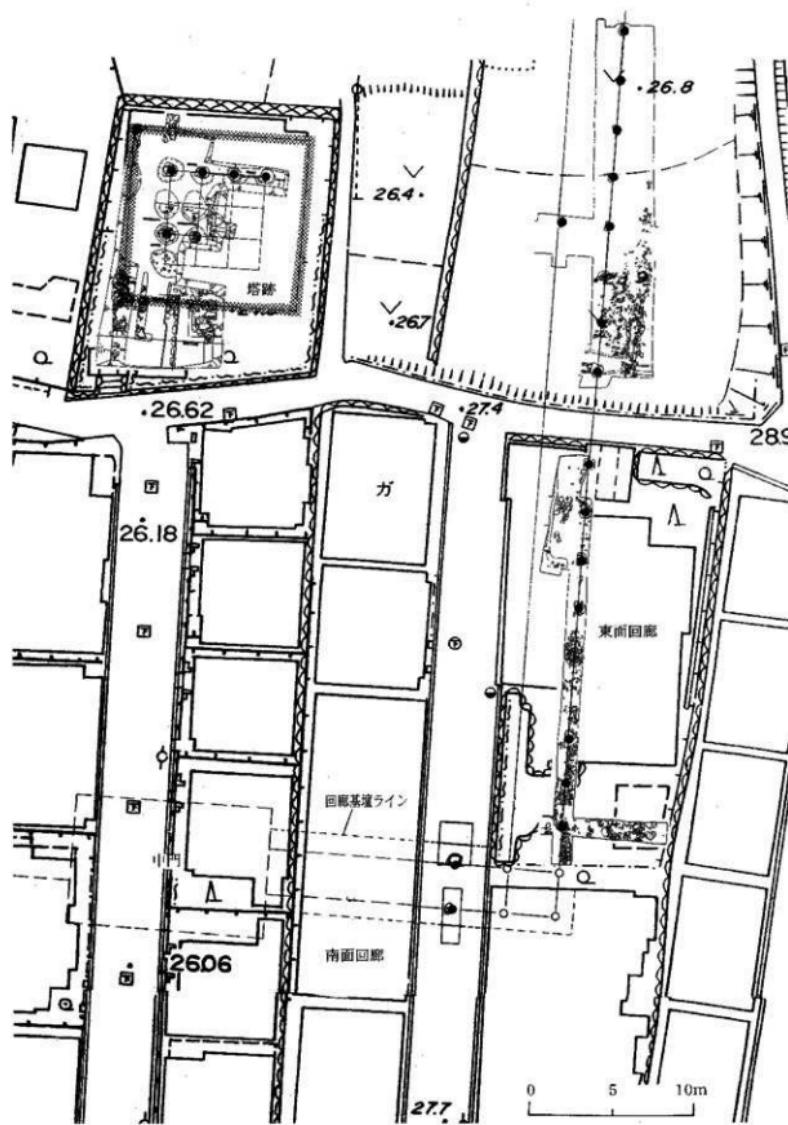
5) 調査成果

① 塔基壇の規模

第11次追加調査で、階段部を検出したことにより、基壇長が確定した。創建時の基壇は乱石積で一辺10.7m（約36尺）、高さは1.4mを測る。創建時基壇の南方には別個の基壇がある。現在これについては、詳細な時期は不明であるが、奈良時代ごろに、2.4m（8尺）南へ拡張したものと捉えている。



第20図 河内寺塔跡平面図



第21図 塔跡と回廊の位置関係図

古代の主要な塔基壇の規模は別表に掲げた。これを見ると例数は少いものの、40尺弱と40代前半の尺に二分されることがわかる。河内寺は前者に近いが、それを含めても小振りといえる。柱間寸法と絡めて考えると、別表では、川原寺塔や美濃弥勒寺塔に近似することが知られる。塔の層数は宝生寺五重塔の例もあり、基壇長や初重の柱間寸法と比例するものではない。三重ないし五重塔と考えられる。

② 南面回廊の発見とその意義

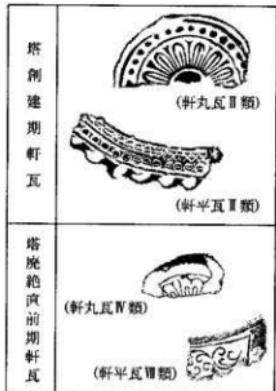
第13次調査で、南面回廊の一部を検出した。現道路下で基壇は誠失していることが予想されたが、調査の結果、原位置を保つ礎石が発見されるなど、遺存状態は頗る良好であった。

昨年度の中間報告で、伽藍配置の再検討を試み南面回廊の位置を推定した。今回の回廊基壇はほぼ推定位置で検出した。この結果、第13次調査検出の回廊の西方には中門が位置する蓋然性が高いと考えられる。その推定から、塔と中門とは大きく隔離することが想定される。従前知られている他の古代寺院の伽藍配置と比して、特異な形態を探ることが予想される。この点については中門に係わる遺構が検出された時点で再考したい。また南面回廊の調査で出土した丸瓦・平瓦は奈良時代に属するものであった。これは、白鳳期にある程度完成した回廊を補修したものか、回廊自体の造営・整備が奈良時代まで下るものか、複数の可能性があるが、調査地の制約があり、現況では保留しておきたい。

③ 瓦・土器から見た河内寺塔の変遷再考

昨年度の中間報告で、遺物の年代観をもとに塔の変遷を考えてみた。今回、新たな知見をもとに再考してみたい。

第11次追加調査では、基壇外堆積土層である第3層各層から土師器粗成坏（第7図1～8）・皿（同9・10）、黒色土器碗（同12）・皿（同11）が出土した。粗成坏は10世紀後半、「て」の字状口縁は11世紀代、黒色土器皿は9世紀中葉⁽¹⁾であり、いずれも前代の所産にかかる混入品である。内区の蓮弁上に珠点をもつ軒丸瓦IV類（第22図）は、京白河の円勝寺跡出土例と同紋で、軒平瓦VII類と組合う⁽²⁾。調査報告⁽³⁾によると同紋例は円勝寺創建所用瓦ER002に相当する。ただし、出土地点から本例は法勝寺に由来すると考えられている。法勝寺は白河天皇の御願寺で、承暦元年（1077）に落慶法要が営まれた⁽⁴⁾。のことから軒丸瓦IV類は11世紀後半の年代観が与えられる。従って、該期まで塔は存立していたことがわかる。いっぽう、第7図10の土師器皿は口縁部を2回にわたって強くヨコナデするため段をなすもので、12世紀後半の年代が与えられる。これらのことから、塔整備の最終段階と火災による塔倒壊との時期差が小さいことが判明した。



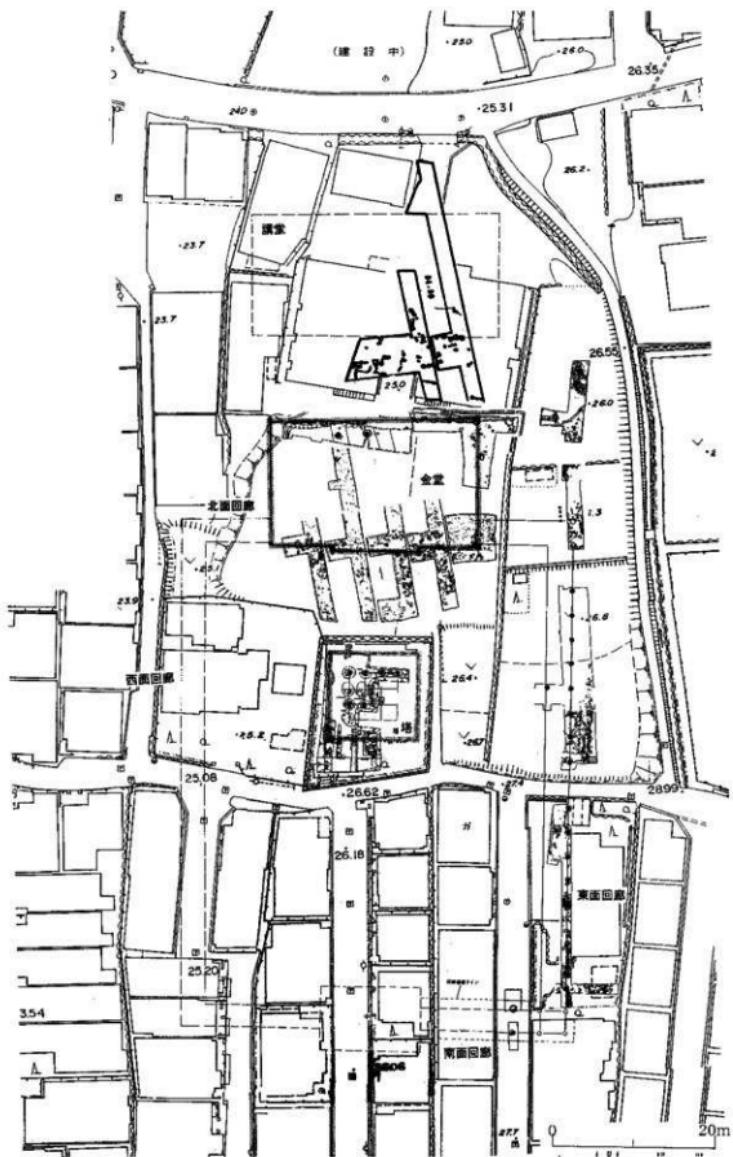
第22図 塔創建・廃絶直前の軒瓦

(1) 土師器、黒色土器の年代観は、千吉良淳「中・南河内における上器器皿の変遷」（『瓜生堂遺跡第46、47-1・2次発掘調査報告書』、東大阪市教育委員会、2002年。）、近江俊秀「古代末期における粗成坏の展開」（『擅原考古学研究所論集第12号』、古川弘文館、1994年。）、森隆「黒色土器」（『概説中世の土器・陶磁器』、真陽社、1995年。）を参照した。

(2) 軒丸瓦IV類の円勝寺跡出土例との同紋・セット関係、出土位置、年代観については上原真人氏からご教示を賜った。

(3) 円勝寺発掘調査団「円勝寺跡の発掘調査（上）（下）」（『仏教美術』82・84、毎日新聞社、1971・72年。）

(4) 福山敏男「六勝寺の位置」（『日本建築史研究』、墨雲書房、1972年改訂版。）



第23図 河内寺の伽藍配置

図版 1 河内寺跡第11次調査
遺構



塔創建時基壇（南より）



塔基壇の版築（西より）



心柱内土層堆積状況（東より）

図版
2

河内寺跡第11次調査
遺構



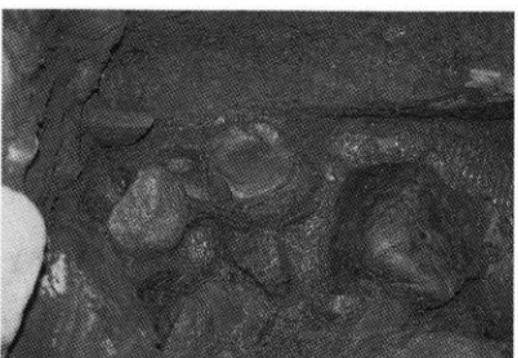
南面階段全景（南西より）



南面階段側面（西より）

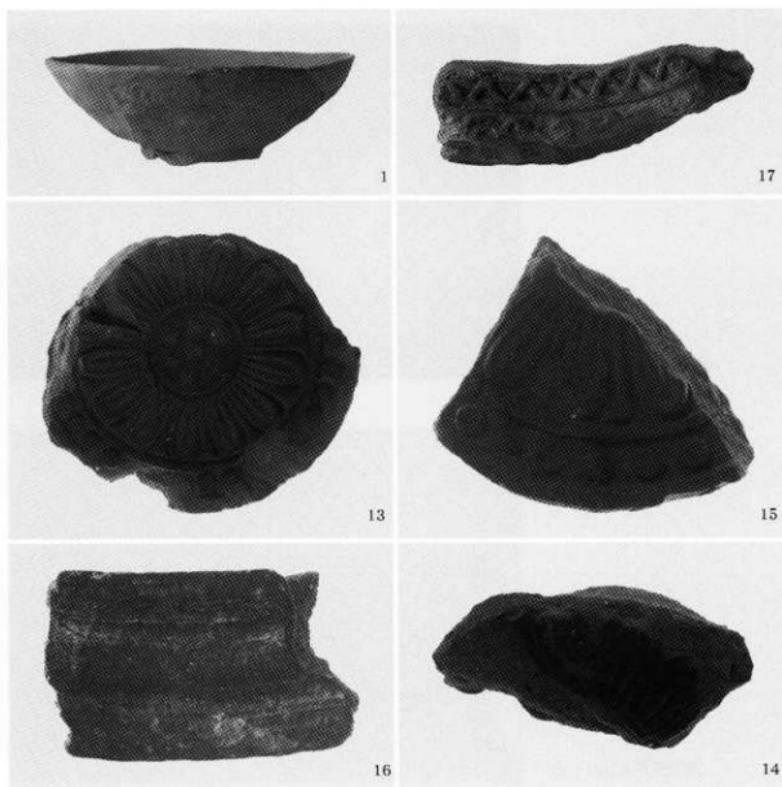


南面階段側面近景（西より）

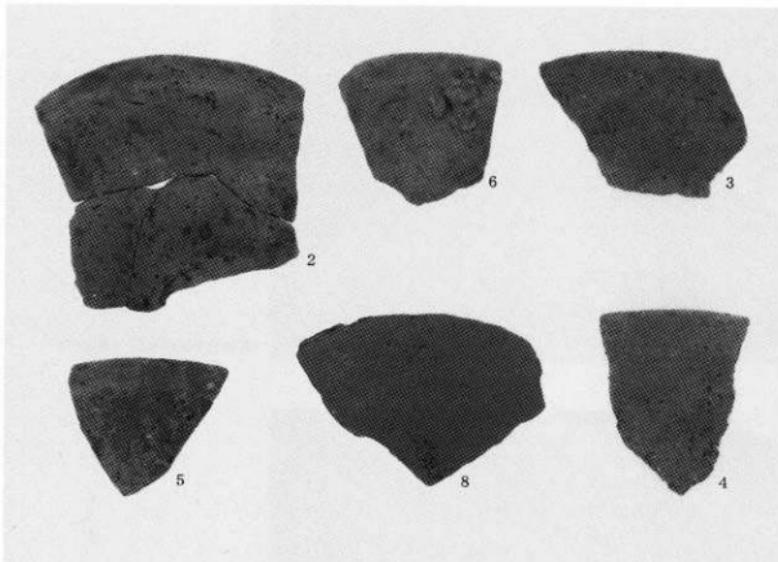




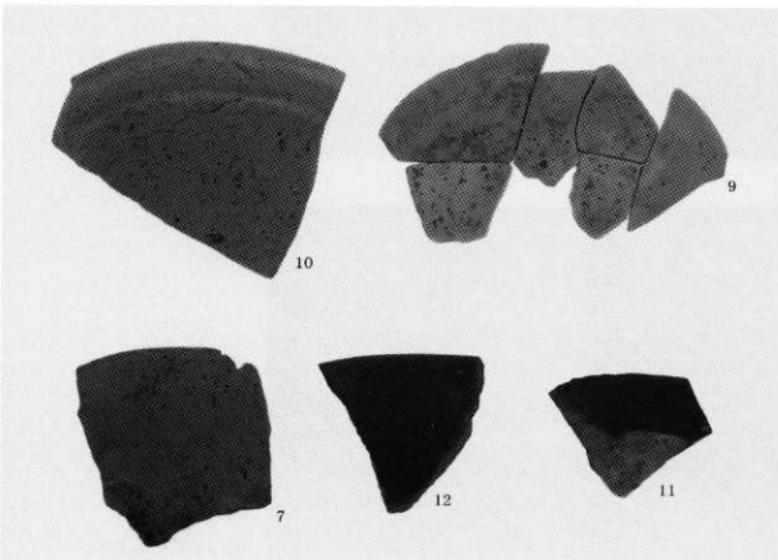
調査地南東の東壁断面



第3層出土土器塊 第2層出土軒丸瓦 第3層出土軒丸瓦・軒平瓦



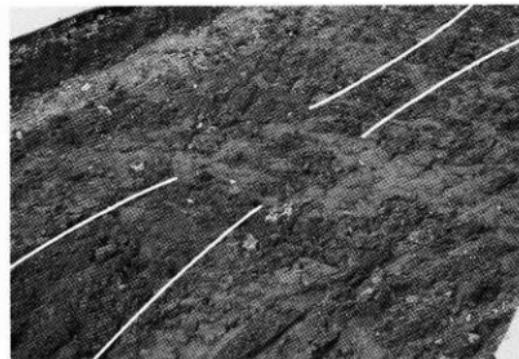
第3層出土土師器杯・小皿



第3層出土土師器杯・小皿・大皿、黑色土器皿・椀



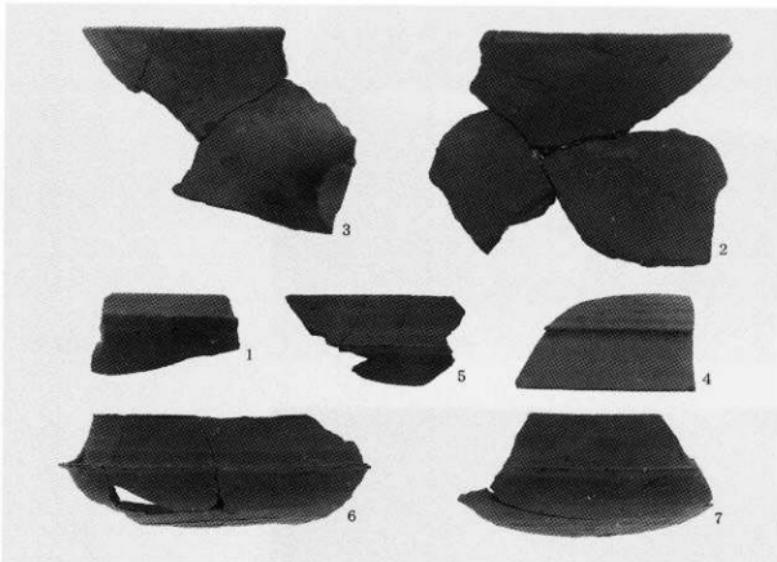
調査着手前の状況（西より）



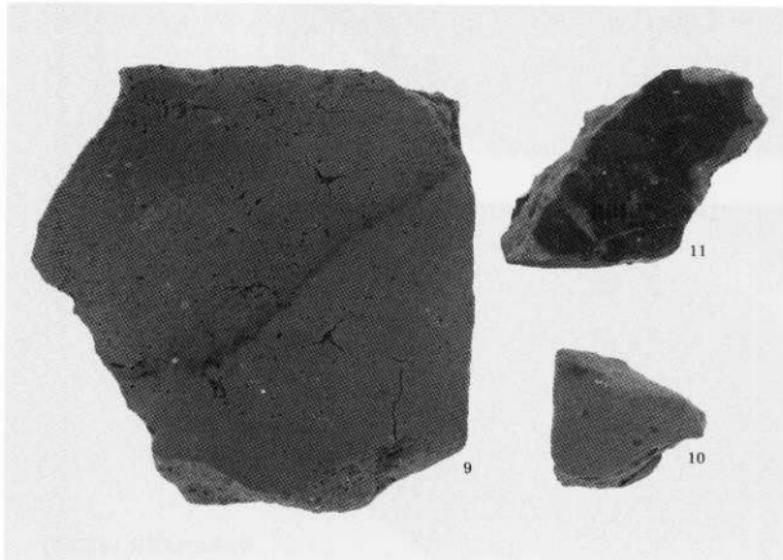
溝状遺構検出状況（南西より）



断面Ⅱの状況（南より）



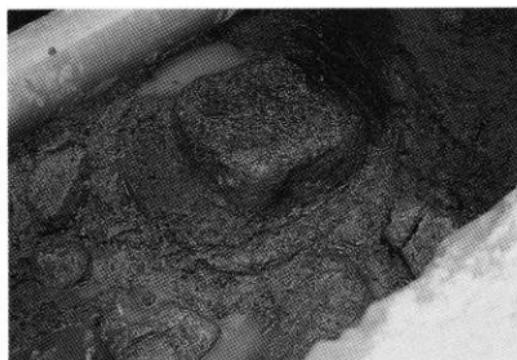
第3層出土須恵器杯 第4層出土土師器甕、須恵器蓋杯・杯



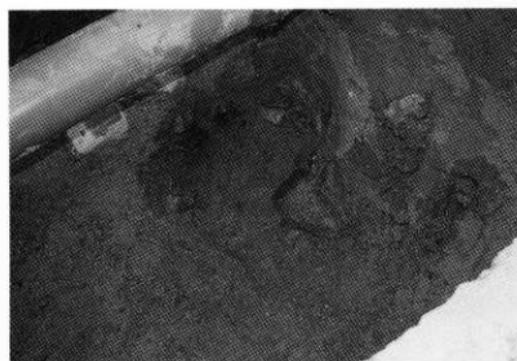
第3層出土丸瓦・平瓦



南面回廊基礎石検出状況（西より）



同上近景（北西より）



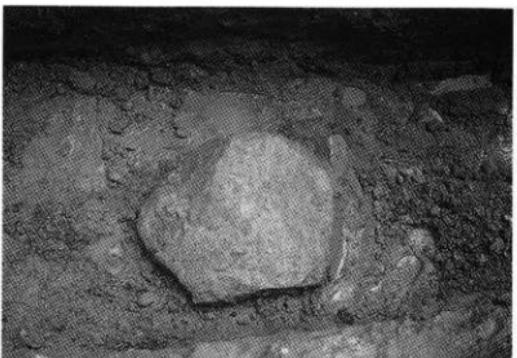
同上根石検出状況（北西より）



本調査区東縁断面



H地区全景（北より）



H地区南面回廊礎石検出状況(西より)



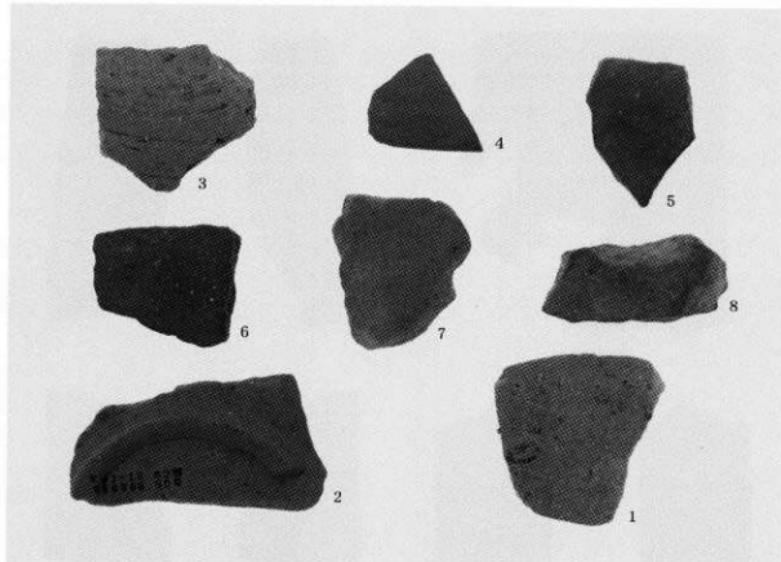
D地区工事掘削状況（北より）



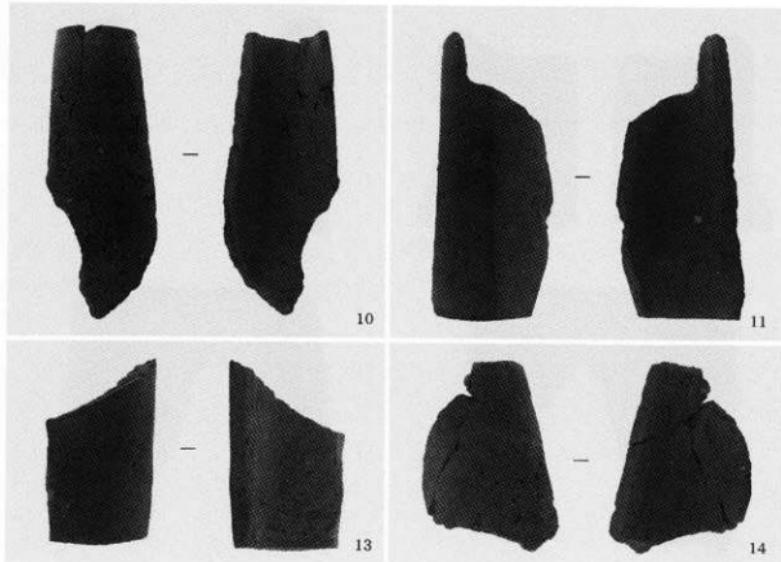
D地区丸瓦出土状況



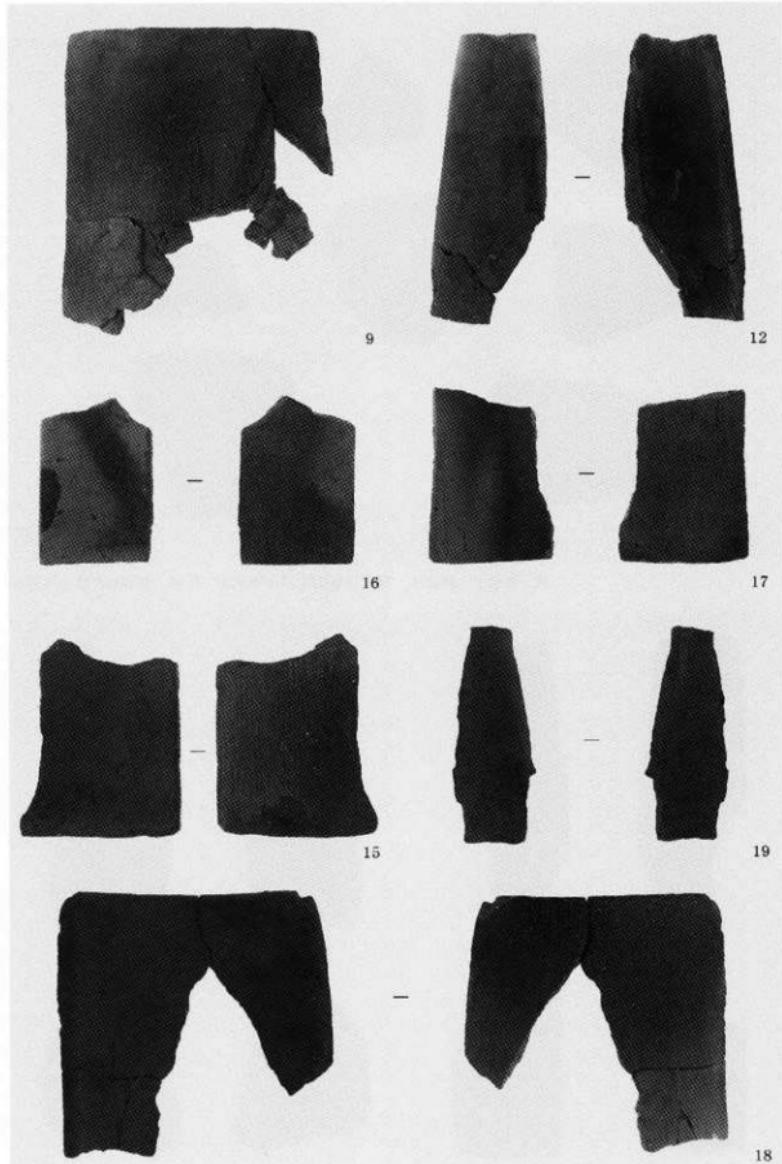
D地区平瓦出土状況



第5層出土土師器皿 第5D層出土土師器底部・体部、須恵器杯または蓋杯



D地点・第5層出土丸瓦



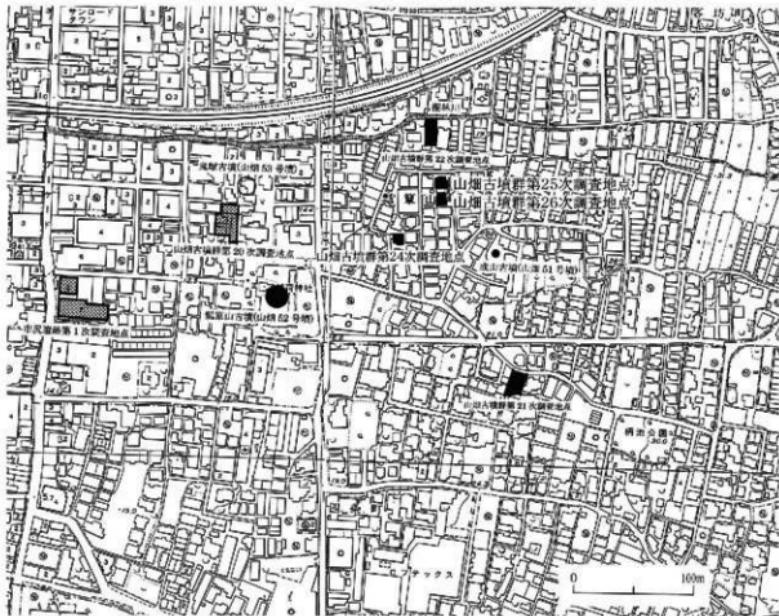
D地点・第5層・第5B～5C層出土丸瓦・平瓦

第3章 山畠古墳群第25・26次発掘調査

1)はじめに

山畠古墳群は、瓢箪山町・上四条町・客坊町に広がる6世紀前半から7世紀初頭にかけての群集墳で、その中に弥生時代後期の山畠遺跡を内在している。これまで68基の古墳が確認されているが、後世、とくに近代以降の開墾などによりその多くは破壊・欠損し、現存しているのは半数以下の約30基にすぎない。古墳の多くは径10~15mの円墳であるが、中には瓢箪山古墳などの双円墳や方墳、上円下方墳もみられる。蓋形・人物などの形象埴輪や円筒埴輪の出土しているものもあるが、それほど多くない。墳丘上などに小竪穴式石室・羽釜棺を伴うものも知られているが、主体部の大半は横穴式石室である。石室内には組合式石棺もあったが、多くは複数の木棺が納められていたようである。遺物は須恵器・土師器などの土器類をはじめ、大刀・鉄鎌・刀子・工具などの鉄製品、耳環や石製・ガラス製の玉などの装身具類があり、特に杏葉、轡など馬具類の出土割合の多いことが注目されている。郷土博物館の西方部一帯からは後期旧石器時代のナイフ型石器、縄文時代早期の押型文土器とともに弥生時代後期の竪穴住居や弥生土器・石器が検出されており、高地性集落と考えられている。

平成16年9月17日付で川田敏次氏から、瓢箪山町59-9における個人住宅建設に伴う届出があった。当該地は成山古墳に近接することなどから、9月30日に確認調査を実施し、須恵器と溝状構を検出した。この結果に基づき、代理者を通して協議を行ない、埋蔵文化財に影響を与える基礎工事部分約70m²を11月4日から11月20日までの間、第25次調査として発掘調査を実施した。



第1図 調査位置図 (1/2500)

また、隣地の瓢箪山町56-4において10月19日付けで川田義成氏から個人住宅建設の届出があり、11月1日に確認調査を実施し、須恵器片と溝などの遺構を検出した。この結果に基づき代理者を通して協議し、埋蔵文化財に影響を与える基礎工事部分の約56m²を11月26日から12月7日までの間、第26次調査として発掘調査を実施した。以下、両調査地の基本層位、第25次調査の遺構と遺物、第26次調査の遺構と遺物の順で記していく。

2) 基本層位（第3図 図版1）

表土・盛土

第1層 灰色(10Y4/1)砂混じり粘質土。

旧耕土1。

第(1)層 褐灰色(5Y5/1)砂混じり粘土上。

第1'層 灰色(7.5Y5/1)砂混じりシルト質土。旧耕土2。

第2層 灰黄褐色(10YR4/2)砂混じり上。鉄分多く含む。床土。

第3層 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂混じりシルト質土。須恵器・土師器・黒色土器、陶器片など包含。

第4層 暗褐色(10YR3/3)砂混じりシルト質土。中世の整地上。須恵器・土師器・黑色土器・瓦器片を包含。

第4層 褐灰色(10YR4/1)砂混じり土。

第5層 明黄褐色(2.5Y6/4)シルト質粘土・黄灰色(2.5Y4/1)粘土。黒褐色(5YR7/4)砂疊含む。

第5'層 明黄褐色(10YR7/4)粘土・褐灰色(10YR5/1)粘土。

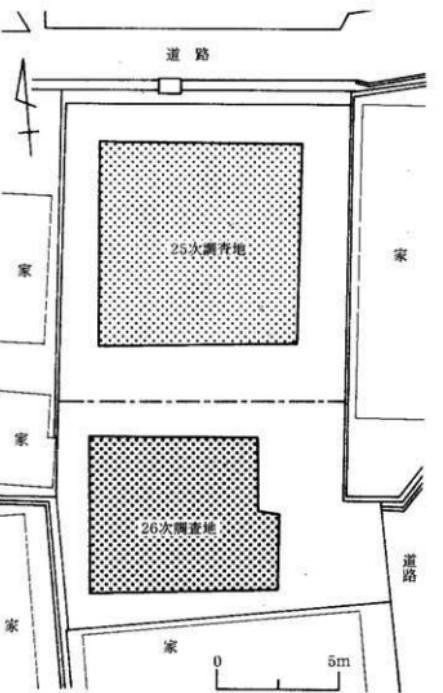
落ち込み2 暗褐色(10YR3/3)・褐灰色(10YR4/1)砂混じりシルト質粘土。須恵器・土師器・埴輪・鉄製品などを包含。

落ち込み2' 黄灰色(7.5Y4/1)砂混じり粘土。埴輪を包含。

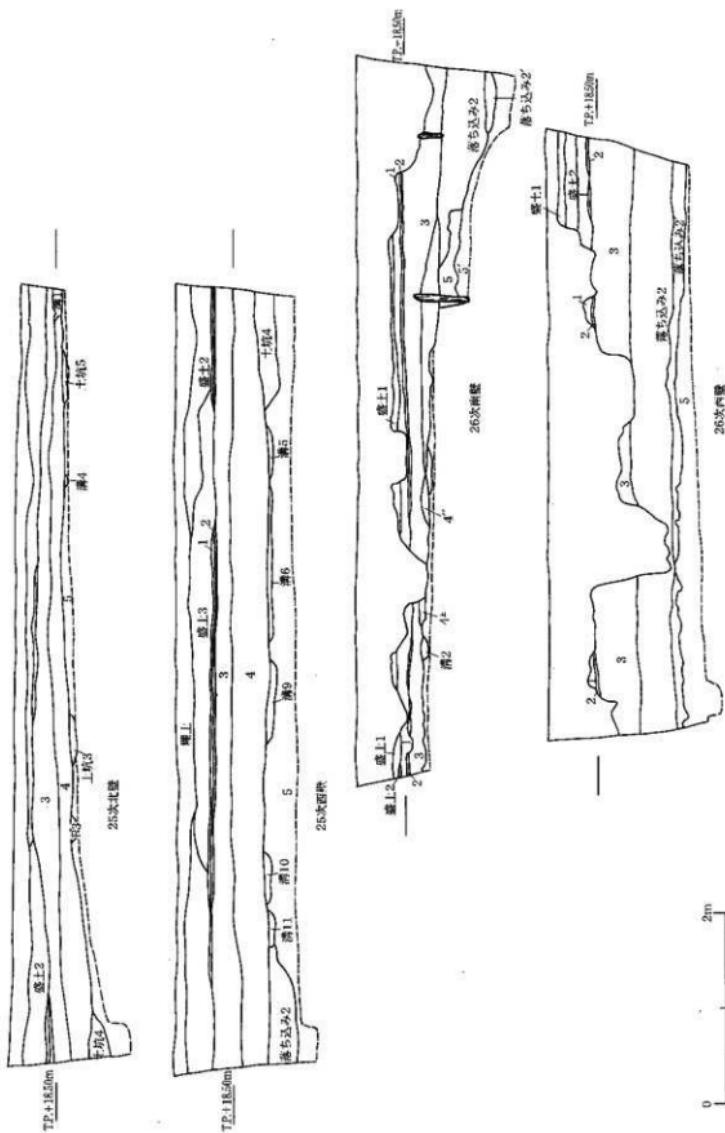
3) 第25次調査遺構と遺物

遺構

調査は、調査地全範囲の表土と旧建物に伴う盛土と第1層の耕土、第2層の床上、第3層近世以降の整地層と現代の搅乱坑、確認調査坑の大半を機械掘削によって除去し、第4層以下は人力掘削による調査を実施した。搅乱坑は北よりに3箇所あり、旧建物に伴う門柱（コンクリート製）が出土したもののがあって、いずれも旧建物破壊時に埋められたものである。



第2図 調査トレンチ位置図



第3圖 第25・26次調査断面図

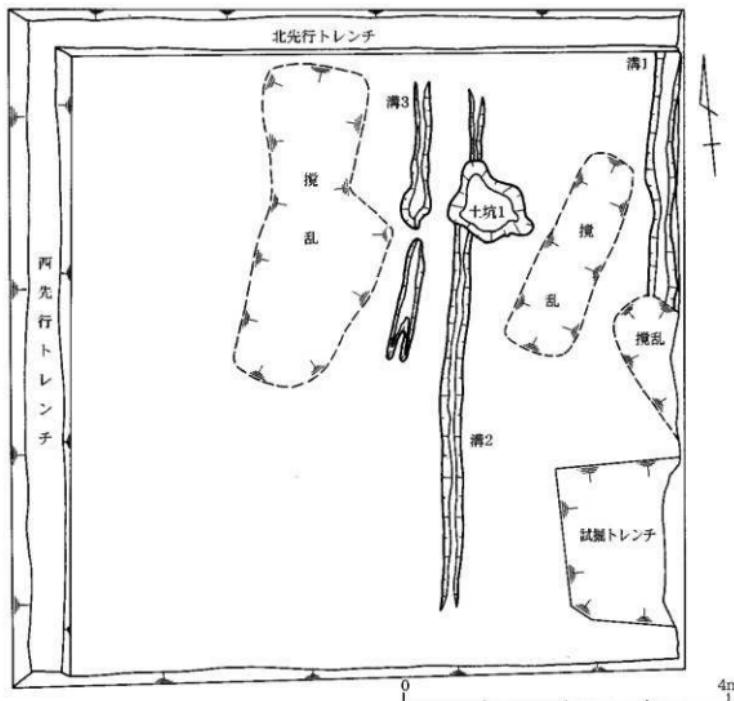
機械掘削した残土（第3各層）を人力で除去して第4層で整査したおり、第3中層の土師器杯（13）をはじめ、土師器の鍋（12）、須恵器、磁器の小・細片が少量出土した。遺構としては、第4層上面で南北方向の3条の溝と土坑1基、第5層上面で多数の溝・ピット・土坑と溝などを掘りきったのちの落ち込みを検出した。以下、第4層上面遺構と第5層上面の遺構について述べ、その後、確認調査や各遺構内および各層内出土の遺物について記す。

第4層上面遺構—第1遺構面—（第4図 図版2）

第4層は、須恵器、土師器（蓋杯-14、皿-15・16、楕-17~23・31、甕-25・26、羽釜-27、鍋-28、底部-24）、黒色土器楕（29・30）、須恵器（蓋杯-32、底部-33・34）などを包含した暗褐色砂混じりシルト質土で、鎌倉時代の整地土である。調査地の西側は近世以降に削平されて西へ傾斜していたため遺構はなく、東から中央部にかけて溝3条（溝1~3）と土坑1基（土坑1）を検出した。

土坑1は、溝2を切断する形で検出した。約1×0.8m、深さ19.5cmの不定形を呈し、埋土は灰色（5Y5/1）砂混じり土で、遺物は出土しなかった。用途は不明。近世前半以降。

溝1~3は、幅32~14cm、深さ11~5cmを測る南北方向に延びる溝で、埋土は暗灰黄色（2.5Y5/2）



第4図 第25次調査第4層上面遺構平面図

砂混じり土で、溝2から土師器小皿(4)、溝3から土師器杯(5)をはじめ土師器・韓式系上器・瓦器の小・細片が出土した。耕作に伴う溝。中世後半以降。

第5層上面造構-第2造構面-(第5図 図版2・3)

第5層は、黒褐色砂礫を含む明黄褐色シルト質粘土・黄灰色粘土で、いわゆる地山である。上面で溝10条(溝4~14)、土坑5基(土坑2~7)、ピット17個(P2~18)、落ち込み2基(落ち込み1・2)を検出した。以下、主な造構と出土遺物について記す。

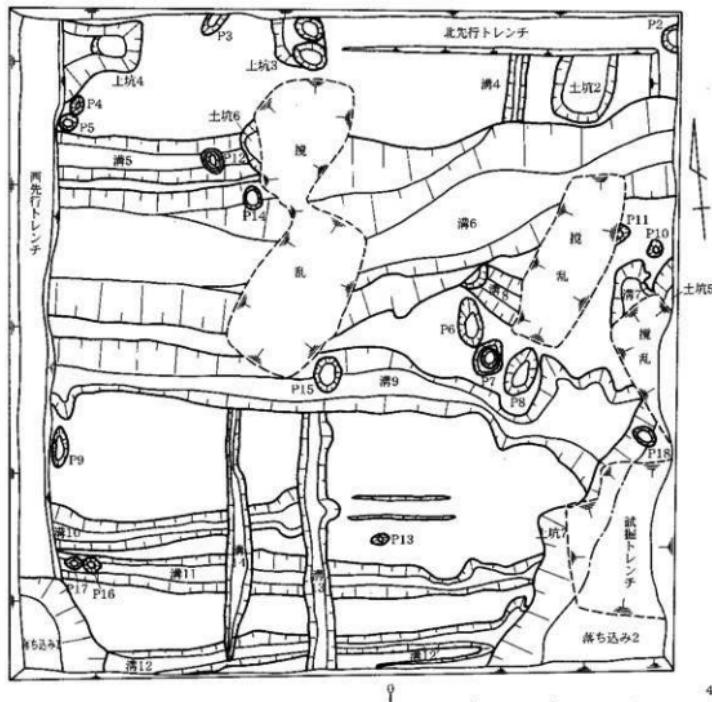
溝4

南端は溝6に切られ、北端は調査地外に延びる。断面は逆台形状を呈し、検出長0.9m、幅25cm、深さ7cmを測る。埋土は暗褐色砂混じりシルト質粘土で、土師器小皿(4)などが出土した。

溝5

北端は土坑6および搅乱により欠損しているが、溝6から派生していると考えられる。南端は調査地外に延びる。検出長2.4m、幅50cm、深さ12cmを測る。埋土は暗褐色砂混じりシルト質土で、土師器の小・細片が出土した。

溝6



第5図 第25次調査第5層上面造構平面図

北・南端は調査地外。東西方向にゆるやかな逆くの字条に延びる。幅1.2~2.2cm、深さ47cmを測る。埋土は暗褐色砂混じりシルト質土で、須恵器の蓋杯（6）、形象埴輪（7）と土師器、須恵器の小・細片が出土した。

溝 7

南側は搅乱により欠損。検出の南北長70cm、幅44cm、深さ40cmを測る。埋土は褐灰色（10YR 4/1）砂混じり土で、土師器の小・細片などが出土した。

溝 8

両端は搅乱と溝6によって切られている。検出長70cm、幅40~54cm、深さ12cmを測る。埋土は褐灰色（10YR 4/1）砂混じり土で、土師器の小・細片などが出土した。

溝 9

ほぼ東西方向に延び、一部搅乱で欠損。屈曲・広狭が見られ、幅1.2~0.3m、深さ11cmを測る。埋土は暗褐色砂混じりシルト質土で、土師器の羽釜（8）など土師器・瓦器の小・細片が出土した。

溝10~12'

東西方向に延び、溝13・14で切断されている。幅12~50cm、深さ7~13cmを測る。埋土は暗褐色砂混じりシルト質土で、須恵器・土師器の小・細片が出土した。鎌倉時代の耕作に伴うものである。

溝13・14

南北方向に延びる。溝9により切断されている。幅10~40cm、深さ4~7cmを測る。埋土は暗褐色砂混じりシルト質土で、土師器・瓦器の小・細片が出土した。鎌倉時代の耕作に伴うものである。

土坑 2

東部は調査地外になり、東西長74cm、検出南北長84cm、深さ16cmを測る。隅丸の長方形を呈し、埋土は褐灰色（10YR 4/1）砂混じり土で、土師器杯（9）などが出土した。奈良時代。

土坑 3

東部は調査地外になり、東西長60cm、検出南北長64cm、深さ7~30cmを測る。隅丸の長方形を呈し、東部に浅い円形の窪みがある。埋土は暗褐色砂混じりシルト質土で、土師器・瓦器の小・細片が出土した。

土坑 4

西部は調査地外になり、南北長54~86cm、検出東西長1m、深さ15~23cmを測る。不定形で、東端部に浅い窪みがある。土は暗褐色砂混じりシルト質土で、土師器・瓦器の小・細片が出土した。

土坑 5

調査地中央東端で、深さ25cmを測る。埋土は暗褐色・褐灰色砂混じりシルト質粘土で、土師器・須恵器小・細片が出土した。落ち込み2つつながる。

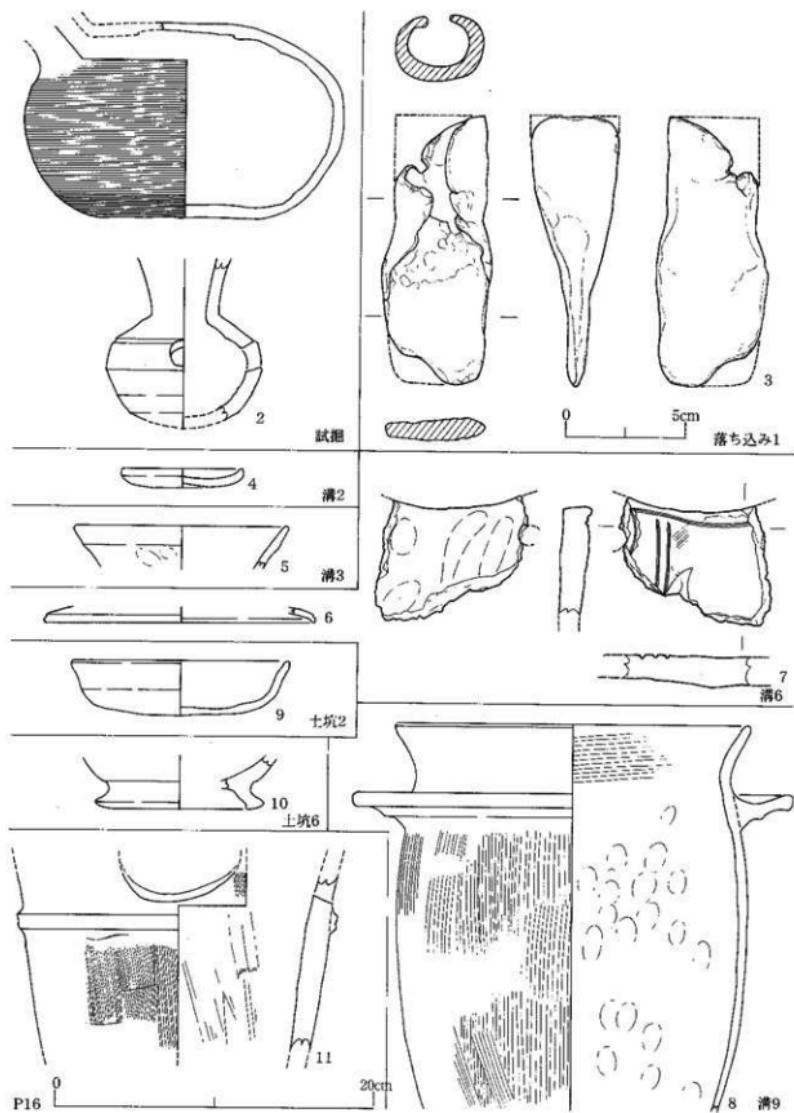
土坑 6

東側は搅乱により欠損。検出の南北長72cm、東西長22cm、深さ15cmを測る。埋土は暗褐色砂混じりシルト質土で、土師器・瓦器の小・細片が出土した。

ピットのうち、P 2~5・6・8~11の埋土は暗褐色（10YR 3/3）砂混じりシルト質土で、土師器の細片が出土した。P 12・14・15~17は溝掘削部内より検出し、埋土は褐灰色（10YR 4/1）砂混じり土で、P 16からは円筒埴輪片（11）が出土した。P 18は落ち込み2内より検出し、埋土は暗褐色・褐灰色砂混じりシルト質粘土で、土師器の細片が出土した。

落ち込み 1

調査地西南部で検出したため大半は調査地外。検出の南北長1.1m、東西幅1m、最大深1mを測る。



第6図 第25次調査出土遺物実測図

埋土は暗褐色・褐灰色砂混じりシルト質粘土で、土師器・須恵器・埴輪の小・細片と袋状鉄斧（3）が出土した。南は第26次調査の落ち込み2につながって弧状を呈し、西に存したと考えられる古墳の周濠の一部と思われる。

落ち込み2・確認トレンチ

調査地東南部で検出したため大半は調査地外。検出長3.4m、幅2.2m、最大深50cmを測る。埋土は暗褐色・褐灰色砂混じりシルト質粘土で、土師器・須恵器の小・細片が出土した。9月30日の確認調査で検出された溝は今回の落ち込み2の一部であり、溝内から出土した須恵器の平瓶と甕（1・2）は、落ち込み1内のものとなる。搅乱部および溝7によって切断されているが、北は土坑5におよび、南は第26次調査の落ち込み1につながって弧状を呈し、東に存したと考えられる古墳の周濠の一部と思われる。

遺物

第25・26次調査の出土遺物は、古墳時代～中世期の須恵器、金属製品、土師器、埴輪、黒色土器、瓦器がある。埴輪が多数出土しており、形象埴輪、朝顔形埴輪、円筒埴輪などがある。円筒埴輪の時期については川西宏幸氏の「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、1978年（のち、「古墳時代政治史研究」1988年 所収）を参考にする。川西氏の編年によるV期であり、6世紀代のものである。このことから形象埴輪も円筒埴輪と同時期と考えられる。以下、次数ごとに確認調査、遺構及び遺物包含層などに分けて説明を記す。

確認調査出土土器（第6図1・2）

1・2は須恵器である。平瓶と甕がある。1は平瓶である。口頸部が欠損する。底部から天井部にかけて楕円形を呈する。天井部に自然釉が付着する。底部と体部外面をカキメ調整する。2は甕である。底部と口縁部の一部を欠損する。底部から体部にかけて丸みを帯び、口縁部は上方にまっすぐ伸びる。体部の上半に円孔を1ヶ所穿ち、その上方に凹線を1条廻らす。体部下半を回転ヘラケズリ調整、他を回転ナデ調整する。1は6世紀末～7世紀初頭、2は6世紀前半。

遺構出土土器

落ち込み1（第6図3）

3は金属製品である。柄を装着するための袋部をもつ袋状鉄斧である。袋部は環状で、刃部にかけて平らになる。袋部は板状の斧身の両側から折り返して作ったと考えられる。折り返し部は密着しない。長さ11.3cm、幅4.6cm、厚み3.6cmを測る。色調は黒褐色を呈する。古墳時代。

溝2（第6図4）

4は土師器の小皿である。（中世期の土師器の皿については口径10cm未満を小皿とする。）底部はやや上げ底である。体部から口縁部にかけて外へ開き気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。口縁部外面をヨコナデ調整、他はナデ調整する。13世紀前半。

溝3（第6図5）

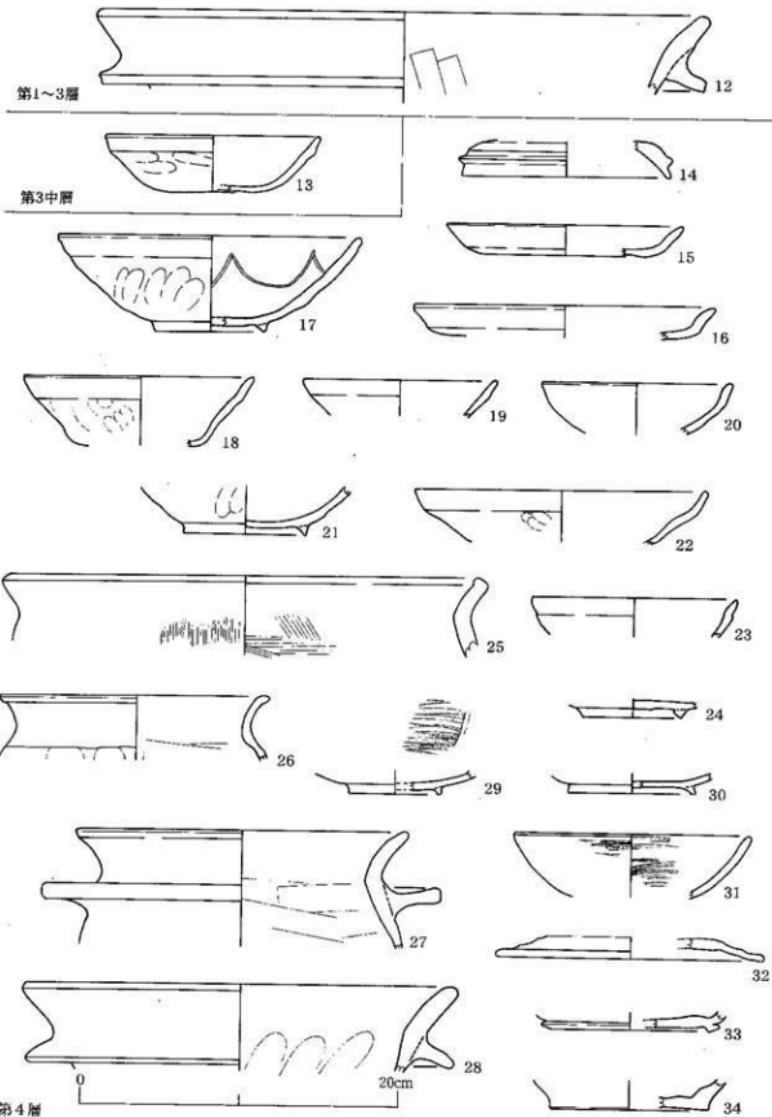
5は土師器の杯である。体部から口縁部にかけて外上方へ伸び、口縁端部は丸く終わる。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部外面をヨコナデ調整する。10世紀中頃。

溝6（第6図6・7）

須恵器と埴輪がある。

6は須恵器の蓋杯である。器高は低い。口縁部にかけて下方へ大きく開く。口縁端部は内折し、尖り気味に終わる。内外面を回転ナデ調整する。8世紀前半。

7は形象埴輪である。器種は不明である。側縁が残り、ゆるいU字形を呈する。外面は縱と横方向に



第7図 第25次調査出土遺物実測図

線刻を施す。小円形の透かし孔が確認できる。内外面をユビナデ調整する。色調は橙色を呈する。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ穂を含む。

溝9（第6図8）

8は土師器の羽釜である。体部の張りが少なく、上方に大きく伸びる。所謂、長胴の羽釜である。口縁部は長めに外反し、口縁端部は丸く終わる。鈎部はやや外上方に伸び、端部は面を持つ。体部外面と口縁部内面を4本/cmのハケメ調整、口縁部外面と鈎部をヨコナデ調整する。体部内面に指頭圧痕が残る。8世紀前半。

土坑2（第6図9）

9は土師器の杯である。体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。口縁部外面をヨコナデ調整、体部外面をナデ調整する。体部内面の調整は風化により不明である。8世紀中頃。

上坑6（第6図10）

10は須恵器の底部である。壺の底部と考えられる。底部はハの字形に短く広がり、底端部がやや肥厚した高台を削り出す。高台外側に自然釉が付着する。内外面を回転ナデ調整する。7世紀後半。

ピット16（第6図11）

11は円筒埴輪である。体部とタガ部が残る。体部はやや外傾する。タガ部は断面が台形を呈し、やや窪みを持つ。タガ部上面に円形の透かし孔が確認できる。体部外面は縦方向に10本/cmのハケメ調整、体部内面はユビナデ調整する。タガ部はヨコナデ調整する。内面に接合痕が残る。色調は橙色を呈する。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ穂を含む。

遺物包含層出土土器

第1～3層（第7図12）

12は土師器の鍋である。体部から口縁部にかけて外上方へ伸び、口縁端部は丸く終わる。鈎部は下方へ下がり、端部は丸く終わる。口縁部外面と鈎部をヨコナデ調整、内面を板状工具によるナデ調整する。9世紀後半～10世紀初頭。

第3中層（第7図13）

13は土師器の碗である。体部から口縁部にかけて外へ開き気味に伸びる。口縁端部は丸く終わる。体部外面をユビナデ調整、口縁部外面をヨコナデ調整する。内面はナデ調整する。10世紀中頃。

第4層（第7図14～34）

土師器、黒色土器、須恵器がある。

14～28・31は上師器である。蓋杯・皿・椀または杯・底部・甕・羽釜・鍋がある。14は須恵器の蓋杯を模した上師器である。口縁部にかけてゆるやかに内湾し、口縁端部は丸く終わる。短い稜がみられる。時代は不明。15・16は皿である。体部は内湾し、口縁部がわずかに外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁部外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。11世紀後半。17～23・31は椀である。杯の可能性もある。21は口縁部を欠損する。17・21は底部が三角形の高台を貼り付ける。体部から口縁部にかけてゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。体部外面をユビナデ調整、内面をナデ調整する。口縁部外面と高台部はヨコナデ調整する。17は内面に連結輪状の暗文を施す。18・19・22・23は体部から口縁部にかけて外上方へ伸び、口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビナデ調整する。体部内面をナデ調整、口縁部外面をヨコナデ調整する。20は体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。内外面をナデ調整する。31は外面をヘラケズリ調整の後、ヘラミガキ調整する。内面はヘラミガキ調整する。17は9世紀後半、18～23は10世

紀中頃。24は底部である。31は9世紀前半。底部が三角形の高台を貼り付ける。底部内外面をナデ調整、高台部をヨコナデ調整する。10世紀代。25・26は甕の口縁部である。口縁部が外反する。25は口縁端部が内側にやや肥厚し、面を持つ。体部内外面を6~7本/cmのハケメ調整、口縁部内外面をヨコナデ調整する。26は口縁端部近くで水平方向に外反し、丸く終わる。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部内外面をヨコナデ調整、体部内面を板状工具によるナデ調整する。25は8世紀前半、26は9世紀後半~10世紀初頭。27は羽釜である。口縁部は大きく外反する。鋸部はやや外上方に長めに伸び、端部は面を持つ。口縁部外面と鋸部をヨコナデ調整する。体部内面を板状工具によるナデ調整する。8世紀前半。28は鍋である。体部から口縁部にかけて外上方へ伸び、口縁端部は丸く終わる。鋸部は下方へ下がり、端部は丸く終わる。口縁部内外面と鋸部をヨコナデ調整、内面をユビナデ調整する。9世紀後半~10世紀初頭。29・30は黒色土器の椀である。体部を欠損する。底部に断面形が台形の高台を貼り付ける。内面は黒いぶす。所謂、内黒である。外面はナデ調整、内面はヘラミガキ調整する。9世紀後半~10世紀初頭。32~34は須恵器である。蓋杯と底部がある。32は蓋杯である。器高は低い。天井部は水平に伸び、口縁部は外反する。口縁端部はわずかに内折し、丸く終わる。口縁部外面と内面を回転ナデ調整する。天井部は回転ヘラケズリ調整する。8世紀後半。33・34は底部である。内外面を回転ナデ調整する。33は底部が台形の高台を削り出す。34は平底である。底面に糸切り痕がある。8世紀後半~9世紀初頭。

4) 第26次調査遺構と遺物

遺構

調査は、調査地全範囲の表土と旧建物に伴う盛土、第1層の耕上、第2層の床土と第3層近世以降の整地層と現代の排水用溝と搅乱坑、確認調査坑の大半を機械掘削によって除去し、第4層以下を人力掘削によって調査を実施した。搅乱坑は5箇所あり、いずれも現代のものである。機械掘削した残土=第3下層を人力で除去して第4層で整査したおり、第3下層から土師器杯(53)、黒色土器(54)、須恵器蓋杯(55)、形象埴輪(56・57)などが、整査時にも円筒埴輪(58~61)などが出土した。

本調査地では第4層上面では遺構は確認されなかったが、第4層からは土師器の甕(62)と高杯(63)と形象埴輪(62・63)、円筒埴輪(66~75)などが出土した。

遺構としては、第5層上面で溝10条、ピット5個、土坑1基と、溝などを掘りきったのちの落ち込み2基を検出した。第5層上面の遺構を述べた後、遺物について記す。

第5層上面遺構(第8図 図版4)

溝1・3~10

東西方向に延び、幅は15~80cm、深さ7~17cmを測る。埋土は暗褐色砂混じりシルト質土で、須恵器・土師器・瓦器の小・細片が出土した。鎌倉時代の耕作に伴うものである。

溝2

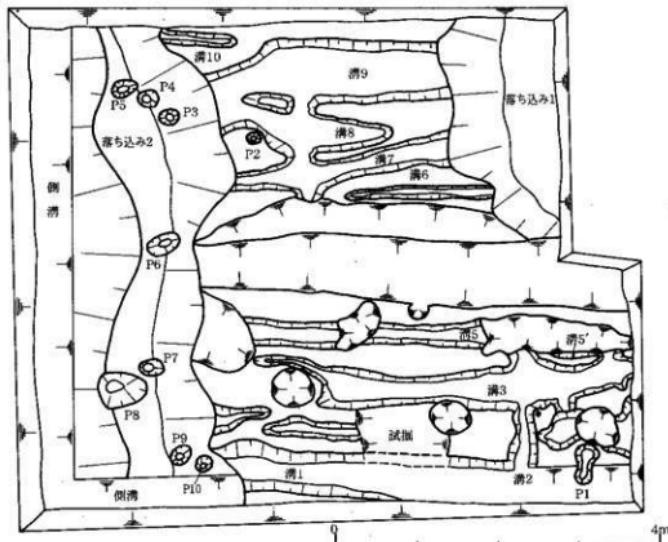
南北方向の溝で、溝3によって切断されている。幅36cm、深さ12cmを測る。埋土は暗褐色砂混じりシルト質粘土で、土師器の小・細片皿が出土した。

土坑1

東部は調査地外、中央は搅乱により切断されている。検出の東西長1.4m、南北長1~0.4m、深さ19cmを測る。埋土は暗褐色砂混じりシルト質土で、土師器・瓦器の小・細片が出土した。

ピット1

南北50cm、東西17~30cm、深さ5cmを測る。瓢箪形を呈し、埋土は暗褐色砂混じりシルト質土で、土師器の小・細片が出土した。



第8図 第26次調査第5層上面遺構平面図

ピット2

直径16cm、深さ6cmを測り、埋土は暗褐色砂混じりシルト質土で、土師器の小・細片が出土した。

ビット3～8

落ち込み2掘削底面にて検出。径15~40cm、深さ5~17cmを測り、埋土は暗褐色・褐灰色砂混じりシルト質粘土。出土遺物はなかった。

落ち込み 1

調査地東北部で検出したため大半は調査地外。検出南北長2.8m、東西幅1.6m、最大深35cmを測る。埋土は暗褐色・褐灰色砂混じりシルト質粘土で、土師器の高杯（35）、須恵器の壺（36）と上師器・須恵器、埴輪の小・細片などが出土した。北は第25次調査の落ち込み2につながって弧状を呈し、東に存したと考えられる古墳の周濠の一部と思われる。

落ち込み2

調査地西部で検出し大半は調査地外。検出の長6.9m、幅3.4m、最大深86cmを測る。埋土は暗褐色・褐灰色砂混じりシルト質粘土で、須恵器の壺(37)、朝顔形埴輪(38)、形象埴輪(39~41)、円筒埴輪(42~52)と土師器・須恵器の小・細片が出土した。北は第25次調査の落ち込み1につながって北斜を呈し、西に存したと考えられる古墳の周濠の一部と思われる。

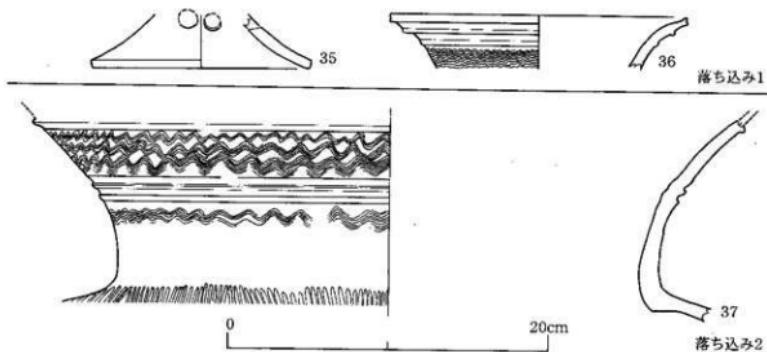
遺物

遺構出土器

落ち込み1 (第3図35・36)

十師器と須惠器がある。

35は土師器の高杯である。脚部である。脚部はハの字形に伸び、底盤部が面を持つ。円孔が1ヶ所



第9図 第26次調査出土遺物実測図

確認できる。内外面をナデ調整する。4世紀代。

36は須恵器の底である。口縁部である。口縁部は外反し、口縁端部が少し凹む。外面に突帯と櫛描波状文を施す。外面を回転ナデ調整する。5世紀後半。

落ち込み2（第3図37、第4図38～52）

須恵器と埴輪がある。

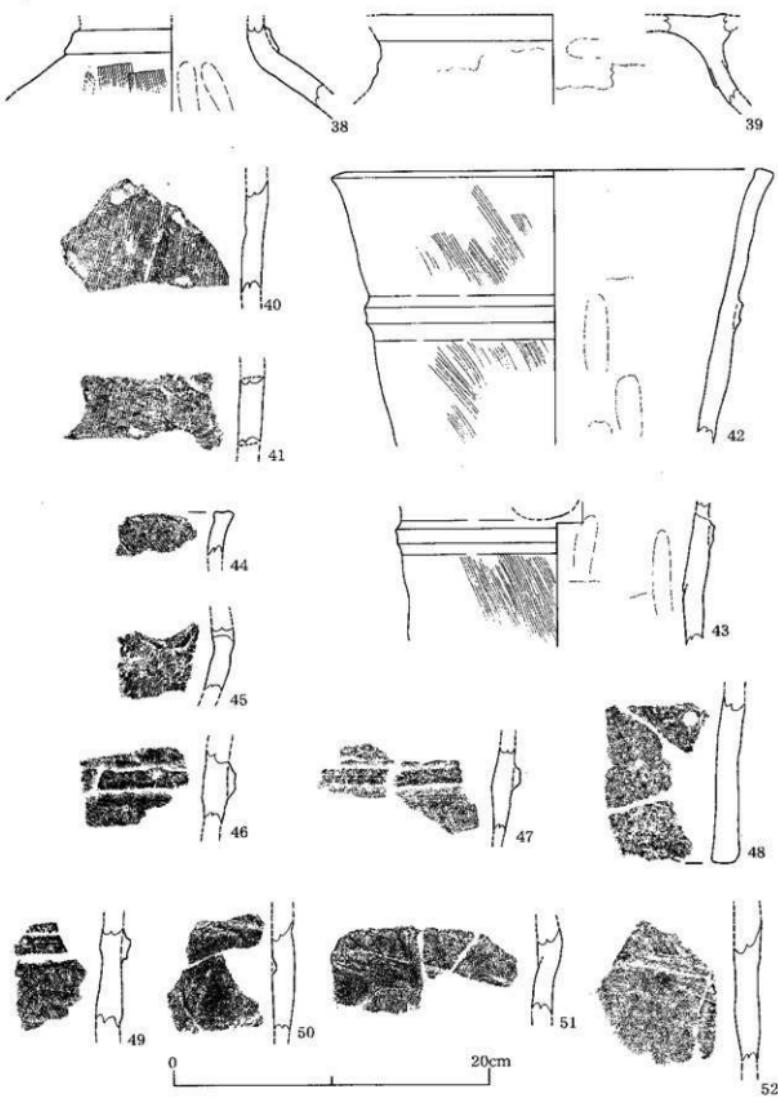
37は須恵器の底である。口縁端部と体部が欠損する。口縁部が大きく外反する。3帯の櫛描波状文と1帯の波状文の間に突帯を2条施す。口縁端部近くにも突帯を1条以上施す。外面を回転ナデ調整する。頸部より下をタタキ調整する。5世紀後半。

38～52は埴輪である。

38は朝顔形埴輪と考えられる。頸部とタガ部が残る。ハの字形に内湾しながら下方へ広がる。タガ部断面が長方形を呈し、やや窪みを持つ。タガ部をヨコナデ調整する。外面は縦方向に7木/cmのハケメ調整、内面をユビナデ調整する。色調は橙色を呈する。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。

39～41は形象埴輪である。器種は不明である。39は体部がやや外反しながらハの字形に広がる。天井部は水平に伸びる。内面をユビナデ調整する。外面は風化により調整は不明である。内面に接合痕が残る。40・41は板状を呈する破片である。復原実測はできなかった。外面を縦方向に7～8木/cmのハケメ調整、内面をユビナデ調整する。41は円形の透かし孔が確認できる。色調は橙色を呈する。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。

42～52は円筒埴輪である。42は口縁部と1段目のタガ部が残る。口縁部は外傾し、口縁端部は面を持つ。タガ部は低い。断面が台形を呈し、やや窪みを持つ。外面は斜め方向に7木/cmのハケメ調整、内面はユビナデ調整する。タガ部はヨコナデ調整する。内面に接合痕が残る。43は体部とタガ部が残る。体部はやや外傾する。タガ部は低い。断面が台形を呈し、やや窪みを持つ。タガ部上面に円形の透かし孔が確認できる。内面に接合痕が残る。体部外面は斜め方向に7木/cmのハケメ調整、体部内面はユビナデ調整する。タガ部はヨコナデ調整する。44～52は破片であり、復原実測はできなかった。44は口縁部である。口縁部はやや外傾し、口縁端部がわずかに凹む。外面は斜め方向に6木/cmのハケメ調整する。内面は風化により調整は不明である。45～47・49～52は体部である。46・47・49はタガ部が残る。タガ部の断面が台形を呈し、やや窪みを持つ。タガ部はヨコナデ調整する。45は



第10図 第26次調査出土遺物実測図

円形の透かし孔が確認できる。内面はユビナデ調整する。外面は風化により調整は不明である。46は内面をナデ調整する。47は外面を板状工具によるナデ調整する。内面は風化により調整は不明である。49～52は外面をナデ調整、内面をユビナデ調整する。同一個体と考えられる。51は内面に接合痕が残る。48は底部である。底部は平らな面を持ち、直立する。裾端部は面を持つ。内面はユビナデ調整する。外面は風化により調整は不明である。42～52は色調が橙色を呈する。42～45は胎土中に石英、長石、雲母、クサリ穂、46～52は石英、長石、雲母、クサリ穂、黒い小石を含む。

遺物包含層出土土器

第3下層（第4図53～57）

土師器、黒色土器、須恵器、埴輪がある。

53は土師器の杯である。体部から口縁部にかけて外上方へ伸び、口縁端部は丸く終わる。口縁部外面をヨコナデ調整、内面をヘラミガキ調整する。体部外面に指頭圧痕が残る。10世紀中頃。

54は黒色土器の椀である。体部から口縁部にかけて内窪し、口縁端部は丸く終わる。内面と口縁部外面は黒くいぶす。内外面をヘラミガキ調整する。9世紀後半～10世紀初頭。

55は須恵器の蓋杯である。天井部が欠損する。体部は内窪し、口縁部は下方へ長く伸びる。口縁端部は内側に段を持つ。体部外面と口縁部外面の境に稜がわずかに突出する。口縁部外面と内面を回転ナデ調整、他を回転ヘラケズリ調整する。5世紀後半～6世紀初頭。

56・57は形象埴輪である。器種は不明である。板状を呈する破片である。復原実測はできなかった。56は外面を縱方向に6本/cmのハケメ調整、内面をユビナデ調整する。57は外面を斜め方向に7本/cmのハケメ調整、内面をユビナデ調整する。56は色調が橙色、57は淡橙色を呈する。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ穂を含む。

第3～4層（第4図58～61）

58～61は円筒埴輪である。破片であり、復原実測はできなかった。58・59は体部である。58は円形の透かし孔が確認できる。外面はナデ調整、内面はユビナデ調整する。59はタガ部が残る。断面が台形を呈し、やや窪みを持つ。タガ部はヨコナデ調整、外面は斜め方向に10本/cmのハケメ調整する。内面はユビナデ調整する。60・61は底部である。やや外傾する。60は底面がやや凹む。外面をナデ調整、内面をユビナデ調整する。61は底面が平らである。底部が外折する。外面を板状工具によるナデ調整、内面をユビナデ調整する。58・60・61は色調が橙色、59は浅黄橙色を呈する。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ穂を含む。

第4層（第4図62～75）

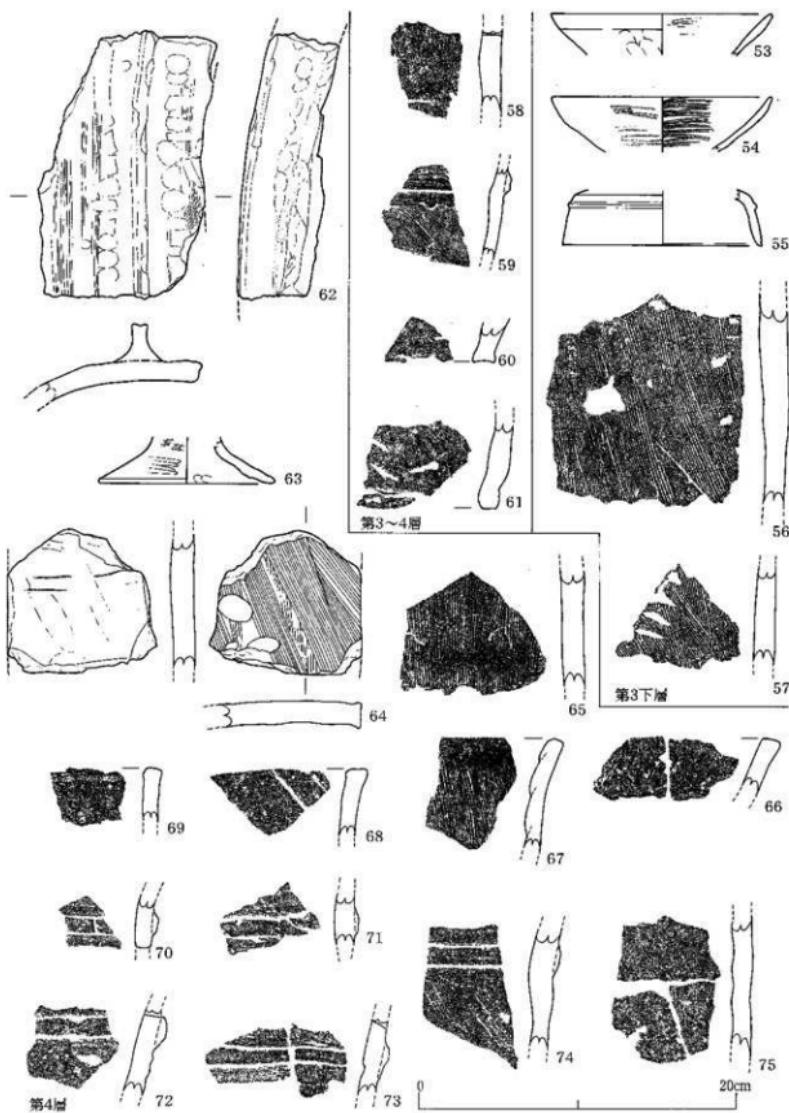
土師器と埴輪がある。

62・63は上師器である。62は竈の炊口部である。炊口部側面端部と底部端部は面を持つ。底部はナデ調整、体部内外面は10本/cmのハケメ調整する。底部外面の接合部分に指頭圧痕が見られる。63は高杯の脚部である。裾部はハの字形に伸び、裾端部が丸く終わる。外面は12本/cmのハケメ調整の後、ヘラミガキ調整する。内面はユビナデ調整する。62は8世紀代、63は6～7世紀代。

64～75は埴輪である。破片であり、復原実測はできなかった。

64・65は形象埴輪である。器種は不明である。板状を呈する破片である。体部である。64は側面端部が直線的に伸び、面を持つ。外面を斜め方向に6本/cmのハケメ調整、内面をユビナデ調整する。色調は橙色を呈する。65は外面を縦方向に8本/cmのハケメ調整、内面をユビナデ調整する。色調は淡橙色を呈する。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ穂を含む。

66～75は円筒埴輪である。66～69は口縁部である。口縁部はやや外傾し、口縁端部が面を持つ。



第11図 第26次調査出土遺物実測図

66は朝顔形埴輪の可能性もある。外面を縦方向に7本/cmのハケメ調整、内面をユビナデ調整する。67は内面に接合痕が残る。口縁部内外面をヨコナデ調整、外面を縦方向に6本/cmのハケメ調整する。内面はナデ調整する。68は外面をナデ調整する。69は内面をユビナデ調整する。外面は風化により調整は不明である。70~75は体部である。70~74はタガ部が残る。断面が台形を呈し、やや窪みを持つ。70・73・74はタガ部をヨコナデ調整する。71・72はタガ部を指で押し当てて成形する。70はタガ部の下面に、72・73は上面に円形の透かし孔が確認できる。内面はユビナデ調整する。72は外面を斜め方向に7本/cmのハケメ調整する。73は内面に接合痕が残る。外面を斜め方向に6本/cmのハケメ調整する。74は外面を斜め方向に7本/cmのハケメ調整する。75は外面をナデ調整する。67は色調が浅黄褐色、66・68~75は橙色を呈する。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。

5)まとめ

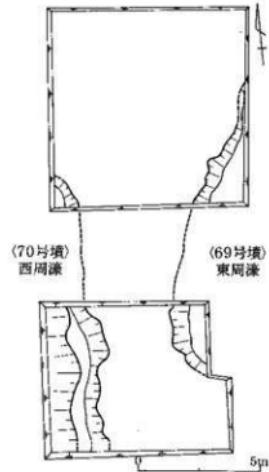
今回の調査では古墳時代後期から室町時代の遺構と、古墳時代から室町時代に亘る遺物を検出した。この中でも古墳時代後期の遺構、遺物がその大半を占め、古墳時代後期前半のピット・溝・土坑・落ち込みと須恵器・土師器・埴輪・鉄製品などの遺物を多く検出した。

第25次調査でのみ検出した第4層上面の室町時代期の耕作に伴うほぼ直線の溝、第25・26次調査第5層上面の耕作に伴うほぼ直線の溝があり、鎌倉時代以降は生産域であった。第5層上面では第25次調査の溝6を境にして、北側は住居域など別の使用がなされていたものと考えられる。奈良・平安時代の遺構としては溝や土坑を検出したが、状況は不明である。

両調査で検出した各2箇所の落ち込み（各落ち込み1・2）は古墳に伴う周濠の一部と考えられる＝東周濠・西周濠（第12図）。東周濠からは須恵器・土師器・円筒埴輪片が出土し、西周濠からは鉄鉄斧・土師器・須恵器と形象埴輪・円筒埴輪片などが出土した。ともに周濠外縁の一部で、各古墳の規模は不明であるが、東周濠の69号墳の周濠外周は12.4m以上、西周濠の70号古墳の周濠外周は11.5m以上を測り、本古墳群の古墳に周濠を伴うものあることをも確認することができた。

近年、山畠古墳群において発掘および確認・立会調査が実施されている。これまでの調査では新たな古墳はみつかってはいなかったが、いくつかの調査地で形象埴輪を含む埴輪片が出土し、埴輪を伴った古墳のあったことを窺わせる資料が増えている。本古墳群は埴輪の伴う古墳は極めて少ないと言われてきた。それは埋葬施設の石室形状や出土遺物から6世紀中葉ごろの古墳が多く、近畿地方における埴輪を伴う古墳の盛行時期から離れていると考えられていたからである（墳丘全面を発掘調査した古墳が少ない）。しかし、近年の諸調査からとくに平野部の埋没または消滅した古墳に埴輪を伴ったものがあったことがわかつてきた。

段上・山賀・巨摩廃寺遺跡などからは形象埴輪（家・椅子など）を伴う小型低丘墳が発見され、瓜生堂遺跡でも多くの埴輪が出土しているなど、扇状地・平野部に埴輪を伴う古墳が存していたことも明らかとなっている。また、古墳の確認されていなかった岩滝山・船山・孤塚・水走氏館跡の諸遺跡から形象埴輪などの埴輪片が出土し、古墳状況は不明だがその近辺に埴輪



第12図 古墳周濠状況平面図

を伴う古墳の存在を示唆している。これまで東大阪市内には埴輪を伴う古墳は少ないといわれてきたが、消滅したものを見はじめ、埴輪を伴う古墳の存在を再検討する必要があろう。以下、東大阪市内における主な埴輪の出土地・調査を一覧しておく。

『わが街再発見 東大阪市の古墳』 東大阪市教育委員会 平成13年改定版

	古墳・遺跡名	埴輪の種類（）は器種	主な共伴遺物	備考
1	戎山古墳	形象埴輪（盾）・円筒埴輪	須恵器、武器	
2	坊主山古墳	形象埴輪（盾・蓋）・円筒埴輪	須恵器、土師器	
3	塚山古墳	形象埴輪（盾・蓋）・朝顔形埴輪・円筒埴輪		
4	植附4号墳	円筒埴輪		
5	袖古墳	朝顔形埴輪・円筒埴輪	須恵器、土師器、製塩土器	
6	みかん山5号墳	形象埴輪（家・蓋）・朝顔形埴輪・円筒埴輪	須恵器、土師器、耳環、鉄釘	
7	皿池古墳	形象埴輪（家・蓋）・朝顔形埴輪	韓式系土器	
8	寄坊山3号墳	ヒレ付円筒埴輪		
9	山畠36号墳	人物埴輪（巫女？）・円筒埴輪		
10	山畠51号墳(成山)	形象埴輪（蓋？）・朝顔形埴輪・円筒埴輪		
11	えの木塚古墳	ヒレ付円筒埴輪	手持勾玉	
12	段上1号墳	形象埴輪・朝顔形埴輪・円筒埴輪	須恵器、韓式系土器、馬齒	
13	段上2号墳	朝顔形埴輪・円筒埴輪	須恵器、韓式系土器	
14	大賀世2号墳	形象埴輪（盾・蓋・大刀）・人物埴輪・動物埴輪（イノシシ・シカ）・円筒埴輪	須恵器	
15	大賀世3号墳	形象埴輪（盾・短甲・琴）・人物埴輪・動物埴輪（ウマ・足）・円筒埴輪	須恵器	
16	巨摩1号墳	形象埴輪（椅子）・円筒埴輪	須恵器	
17	山賀古墳	形象埴輪（衝角付胄）・円筒埴輪	須恵器	
18	西ノ辻遺跡	盾持人物埴輪		
19	段上遺跡	形象埴輪（家）		

『わが街再発見 東大阪市の古墳』以外または以降のもの

	遺跡名と調査次数等	埴輪の種類	共伴遺物	備考	文献
20	添根寺遺跡	人物埴輪			『調査会ニュース』No15
21	春日神社南～坊主山古墳	円筒埴輪		2・3ヵ所	『枚岡市史』史料編一
22	瓜生堂遺跡第24次調査	形象埴輪(家・盾・鞍・短甲)・動物埴輪・朝顔形埴輪・円筒埴輪・不明埴輪片	須恵器、土師器、石製品、黑色土器、瓦器、土馬、貨銭		『瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡』
23	山賀遺跡（第4次調査）	円筒埴輪	弥生上器、土師器	17近接	『小若江遺跡（第5次調査）山賀遺跡（第4次調査）』
24	瓜生堂遺跡第45次調査	円筒埴輪	土師器・須恵器	井戸枠	『瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告書』
25	瓜生堂遺跡第46・47次調査	形象埴輪(蓋?)・朝顔形埴輪・円筒埴輪	須恵器	小型低方墳も	『瓜生堂遺跡第46・47-1・2次発掘調査概要報告書』

26	段上遺跡第13次調査 (上面遺構・包含層)	形象埴輪(家)・朝顔形埴輪・円筒埴輪	須恵器・土師器・弥生土器	『段上遺跡第13次発掘調査報告書』
27	段上3号墳	朝顔形埴輪・円筒埴輪	弥生土器	同上
28	段上4号墳	円筒埴輪	弥生土器	同上

『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告』1994年度 財団法人東大阪市文化財協会 1996年

遺跡名と調査次数等	埴輪の種類	共伴遺物	備考	年度
29 瓜生堂遺跡第39次調査	形象埴輪(盾)・円筒埴輪	土師器・須恵器・瓦器・貨銭		

『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告』平成12~16年度 東大阪市教育委員会 2001~2005年

遺跡名と調査次数等	埴輪の種類	共伴遺物	備考	年度
30 半堂遺跡第2次調査	埴輪	弥生上器・土師器・須恵器・瓦器・陶器・石製品		12
31 孤塚遺跡1999年度立会	形象埴輪・円筒埴輪	土師器・ガラス玉(3次調査地)	第3次報告に付	13
32 山畠古墳群(13年度第3区分)	埴輪	弥生後期土器		14
33 段上遺跡第14次調査	円筒埴輪	弥生土器・土師器・須恵器		14
34 岩滝山遺跡第9次調査	形象埴輪(盾)・人物埴輪・朝顔形埴輪・円筒埴輪	弥生土器・土師器・須恵器		15
35 半堂遺跡第3次調査	形象埴輪・円筒埴輪	土師器・須恵器・瓦器		15
36 鶴山遺跡第7次調査 B8・13~16・20地区	形象埴輪(軒・家)・動物埴輪・舞踊飾り・基部・円筒埴輪・不明埴輪片	須恵器・土師器		16
37 稲附遺跡第16次調査 -B12・13地区-	形象埴輪(甲冑・盾・蓋)・人物埴輪・円筒埴輪・朝顔形埴輪・不明埴輪片	須恵器		16
38 山畠古墳群第27次調査 D地区	円筒埴輪	弥生上器・土師器・須恵器・瓦器		16

『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報』 平成13~17年度 東大阪市教育委員会 2002~2006年

遺跡名と調査次数等	埴輪の種類	共伴遺物	備考	年度
39 水走氏館跡第2次調査	形象埴輪・円筒埴輪	土師器・瓦質土器・貨銭・陶磁器・石製品		13
40 山畠古墳群第20次調査	円筒埴輪	須恵器・土師器・韓式系土器・弥生土器・玉		13
41 水走氏館跡第3次調査	朝顔形埴輪・円筒埴輪	須恵器・土師器・瓦器		14
42 山畠古墳群第23次調査	円筒埴輪	須恵器・土師器	9近接	15
43 山畠古墳群第24次調査	円筒埴輪			15
44 山畠古墳群第25次調査	形象埴輪・朝顔形埴輪・円筒埴輪	須恵器・土師器・鉄斧・瓦器		17
45 山畠古墳群第26次調査	形象埴輪・朝顔形埴輪・円筒埴輪	須恵器・土師器・瓦器		17

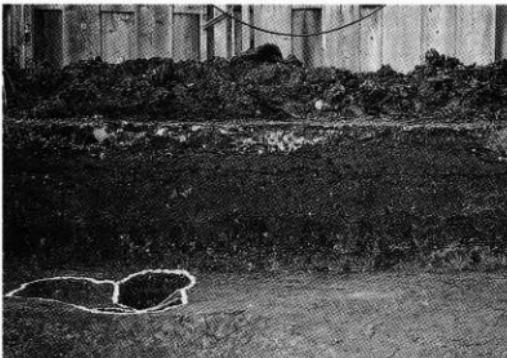
[平成17年度立会・確認調査]

46みかん山古墳群-朝顔形埴輪片

47半堂遺跡-円筒埴輪小片

48皿池遺跡-朝顔形埴輪・円筒埴輪片

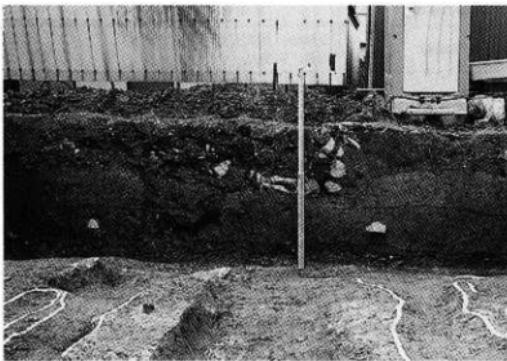
図版 1
山烟古墳群第
25・26次調査



第25次北壁断面
(南より)



第25次西壁断面
(東より)



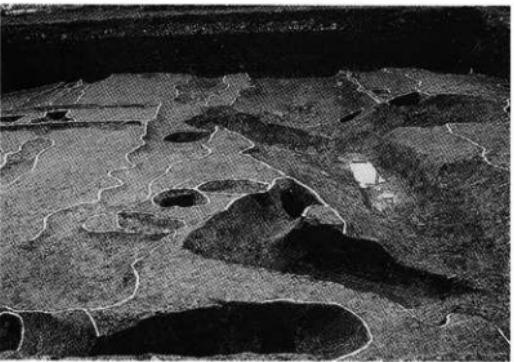
第26次西壁断面
(東より)



第4層上面遺構完掘状況
(南より)



第5層上面遺構完掘状況
(南より)



第5層上面遺構完掘状況
(北より)



清6 断面（西より）



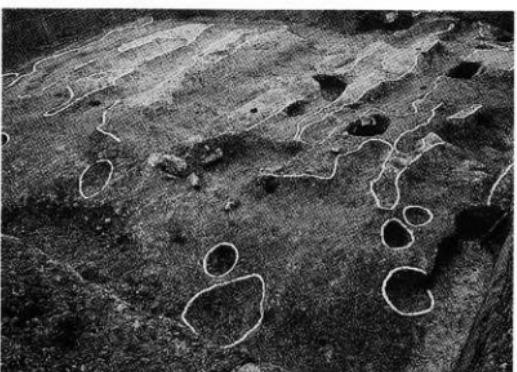
清9 内土師器・羽釜出土状況



土坑2 内土師器・坏出土状況



第5層上面遺構完掘状況
(東より)



第5層上面遺構完掘状況
(南西より)

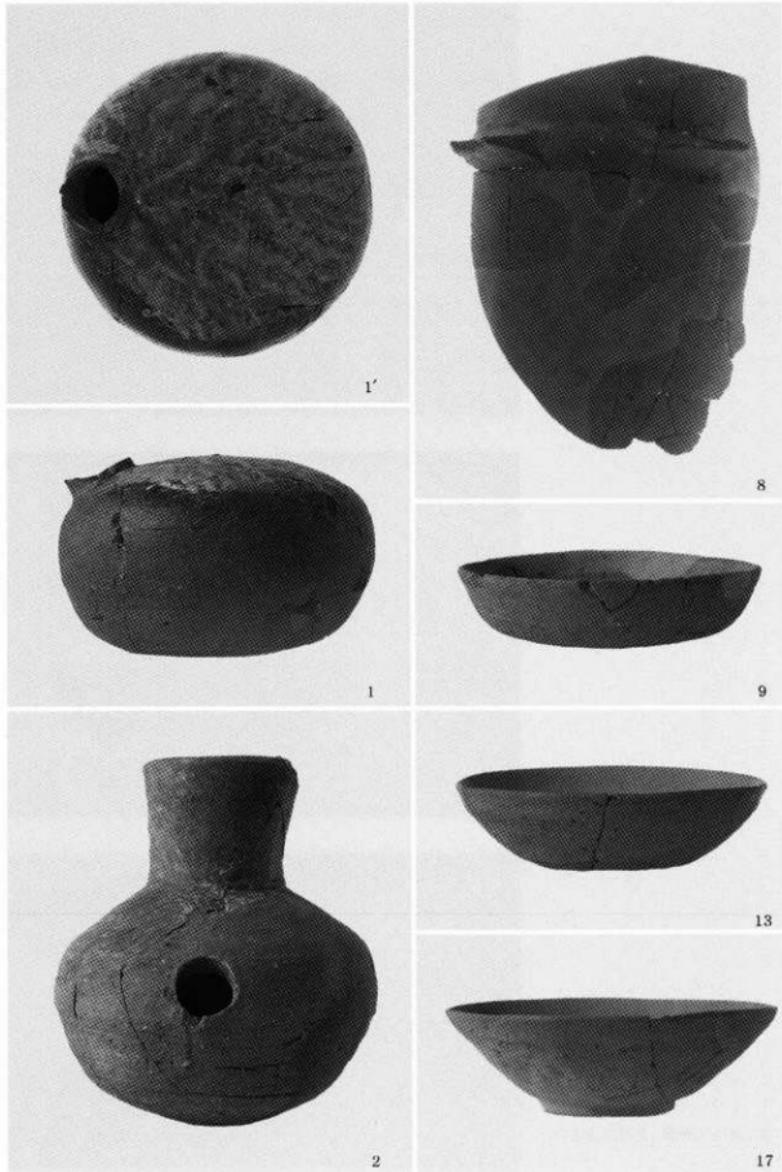


落ち込み2断面-西壁断面部分-
(東より)

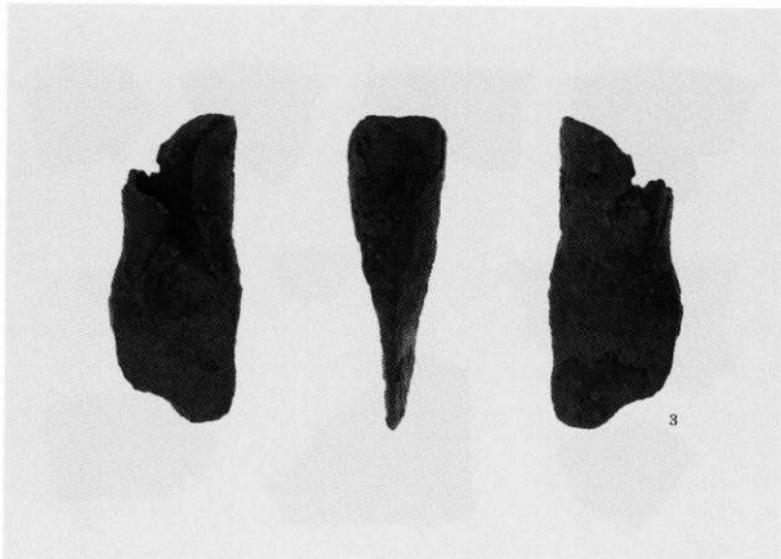
圖版 5

山畠古墳群第25次調査

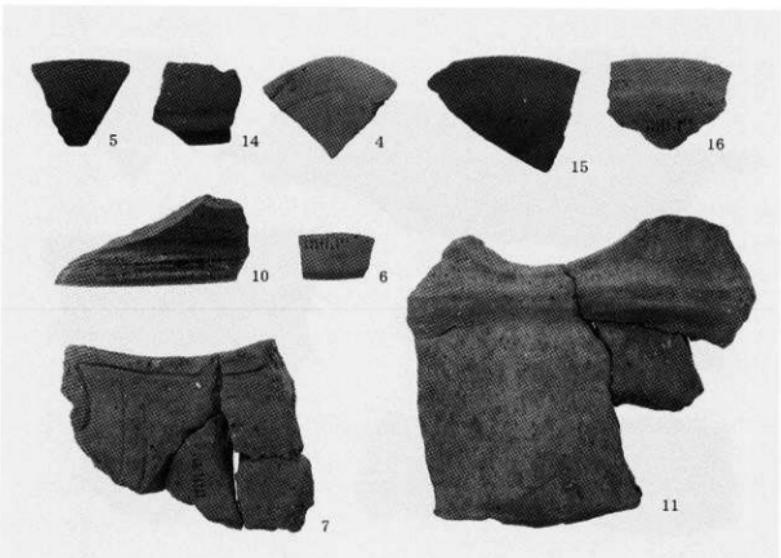
遺物



試掘出土須恵器平瓶・罐 溝9出土土師器羽釜 土坑2出土土師器杯 第3中層出土土師器杯
第4層出土土師器碗



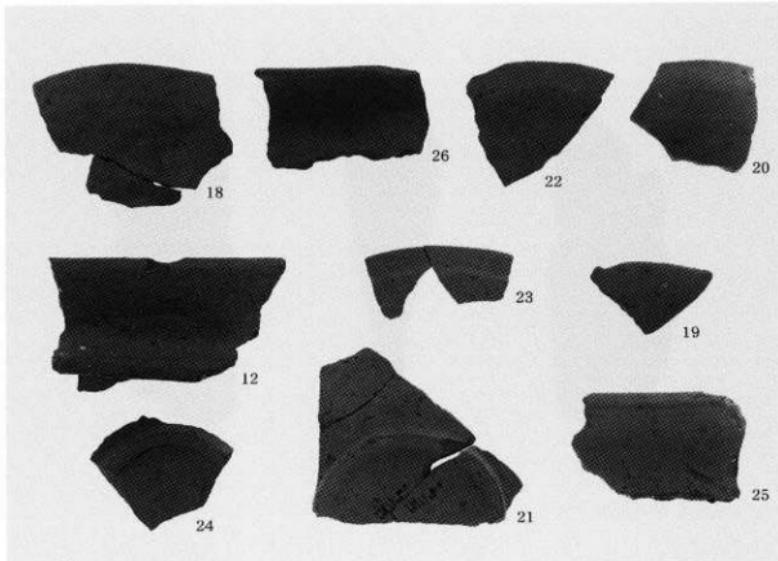
落ち込み 1 出土袋状鉄斧



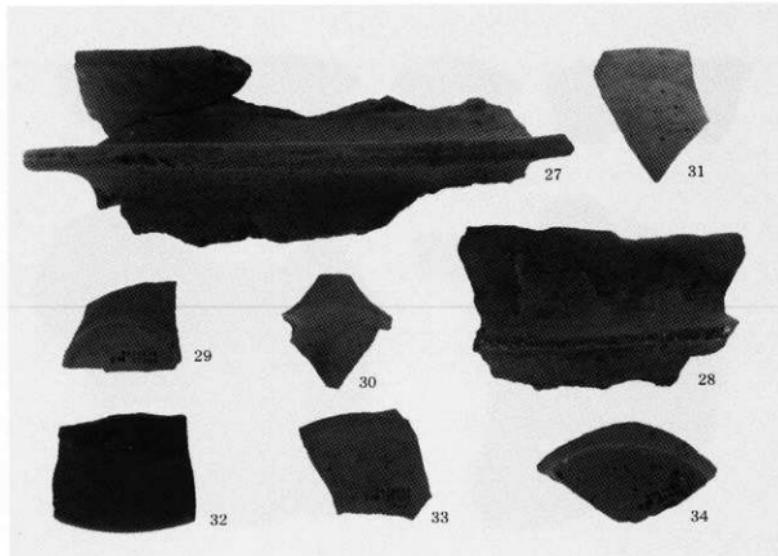
溝2出土土師器小皿 溝3出土土師器杯 溝6出土須恵器蓋杯、形象埴輪、土坑6出土須恵器底部
P16出土円筒埴輪 第4層出土土師器蓋杯・皿

圖版 7

山畑古墳群第25次調査
遺物



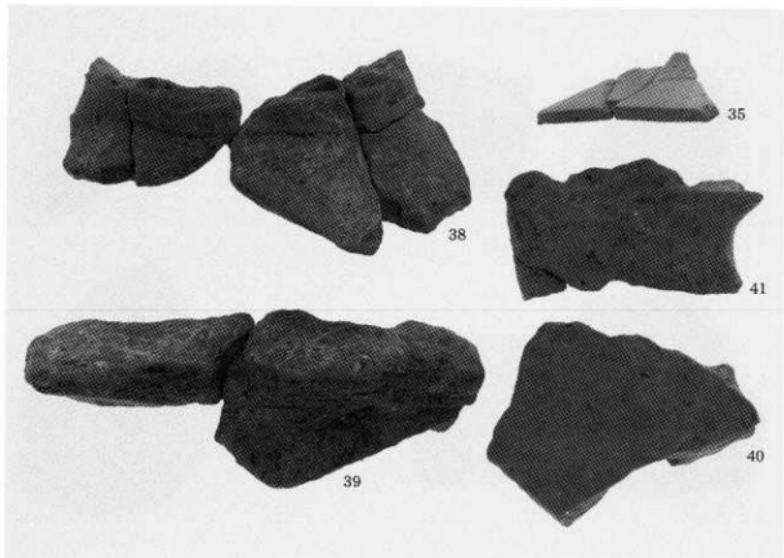
第1～3層出土鍋 第4層出土土師器碗・底部・甕



第4層出土土師器羽釜・鍋・甕、黑色土器碗、須志器蓋杯・底部



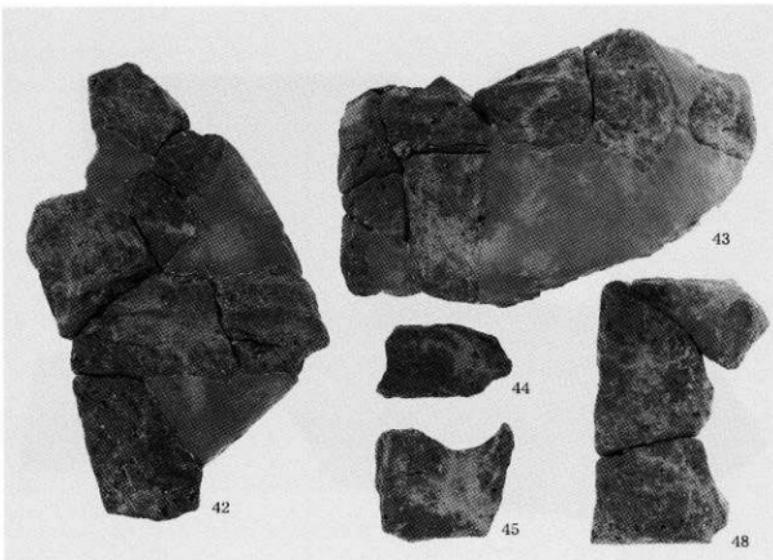
落ち込み 1 出土須恵器甕 落ち込み 2 出土須恵器甕



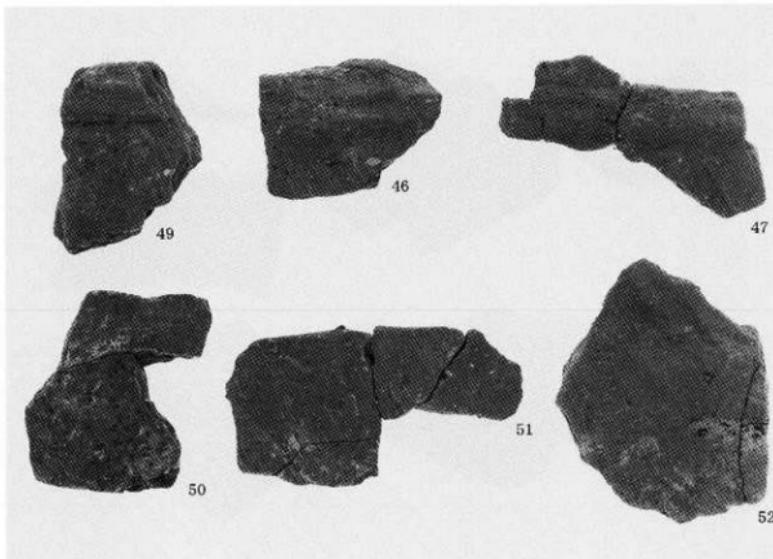
落ち込み 1 出土土師器高杯、落ち込み 2 出土朝顔形埴輪・形象埴輪

図版 9

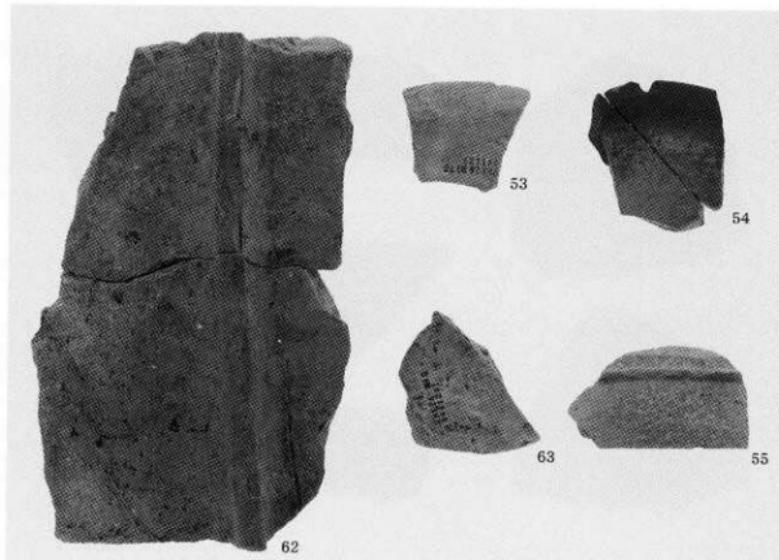
山畠古墳群第26次調査
遺物



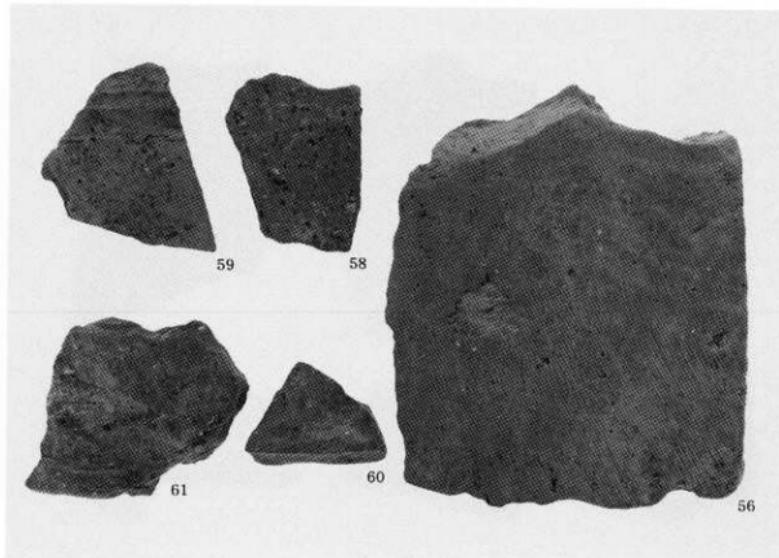
落ち込み 2 出土円筒埴輪



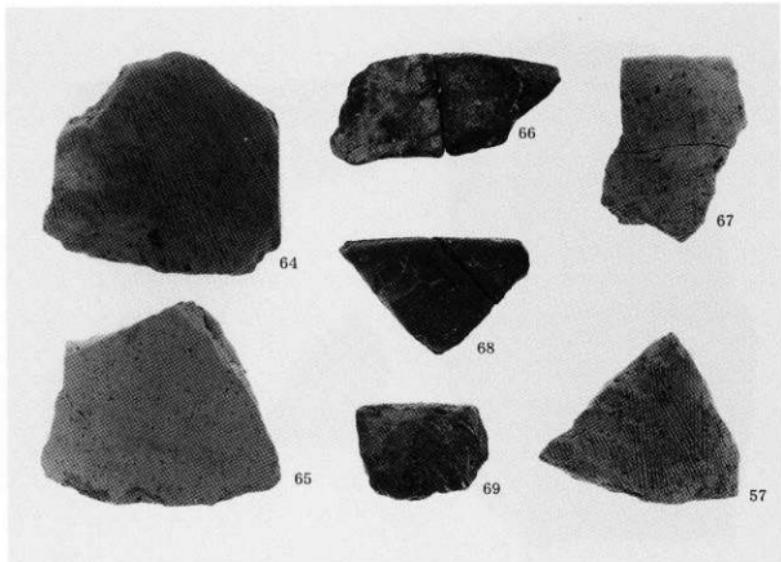
落ち込み 2 出土円筒埴輪



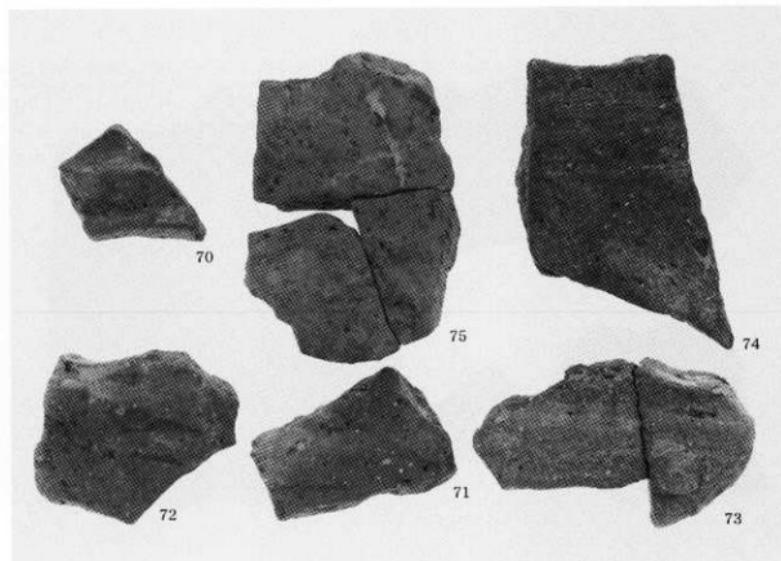
第3下層出土土師器杯、黑色土器椀、須恵器蓋杯、第4層出土土師器甕・高杯



第3下層出土形象埴輪 第3～4層出土円筒埴輪



第3下層出土形象埴輪 第4層出土形象埴輪・円筒埴輪



第4層出土円筒埴輪

第4章 若江遺跡第82次発掘調査

1) はじめに

若江遺跡は、東大阪市若江本町・若江北町・若江南町一帯に広がる弥生時代から安土桃山時代にいたる複合遺跡である。昭和9年(1934)旧楠根川改修工事の際に、弥生土器・上師器・須恵器などの遺物が採集され、遺跡の認識が始まった。昭和47年(1972)、市立若江小学校校舎増築工事に伴う第1次調査が開始されて以降、今回の調査で82次を数える。現在東西約750m、南北約1000mの範囲に推定されている。本遺跡が現今の玉串川・楠根川ないしその前身河川が形成する自然堤防や微高地に立地し、先史以来改変・累重されてきた経緯から、東大阪市の中部域にあって、各時期の造構面が現地表面から浅いレベルで検出されることになり、多くの調査例が蓄積してきたものである。

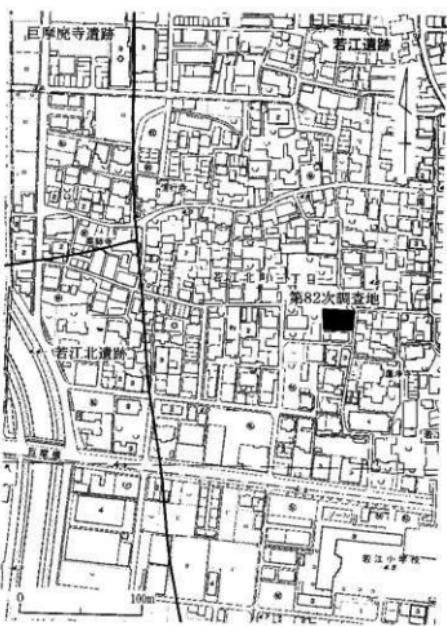
既往の調査成果のうち、中世期の若江遺跡を摘記してみたい。室町時代に若江城が築造される。これまでの研究により、若江城は第1期若江城・

第2期若江城に区分されることが判明している。

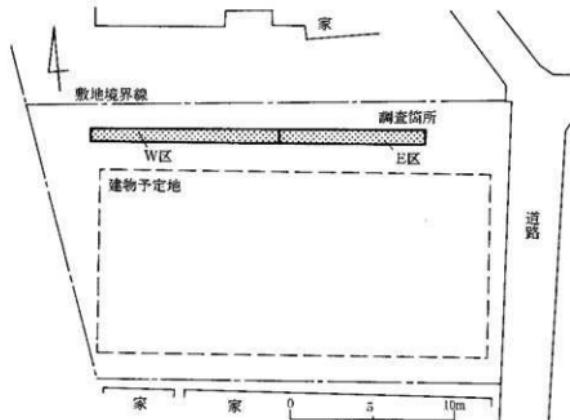
第1期若江城は、室町時代中期、島山氏が河内国支配の拠点とした守護所が設置された城館である。

第2期若江城は、三好長慶の義嗣子義継によって築かれ、その後義継を滅ぼした織田信長が石山本願寺攻めの中心地として使用された城郭である。

織田信長が石山本願寺と和睦したのち、ほどなく若江城は廃絶したようだ、



第1図 調査位置図



第2図 調査トレンチ位置図

城の建物・施設は破却された。さらに若江庄の存在も見逃しがたい。国史上には、醍醐寺領、石清水八幡宮領、興福寺領若江莊と見える。醍醐寺領は10世紀末から12世紀にかけて国役雜事賦課の免除申請を行なう。石清水八幡宮領は11世紀後半に若江北条に田地を有している。興福寺領は12世紀後半から維摩会料所としてしばしば現れ、とくに永正から大永の16世紀初頭には、興福寺權僧正経尋が荘園の回復を企て、河内守護代遊佐順盛・三条西実隆に依頼したことが知られる。三つの若江莊は郡内に領有した散在した在田を郡名で呼称したとされ、その範囲は推定であるが、遊佐氏は若江城に詰めることがあり、興福寺領若江莊は若江遺跡周辺に位置した可能性が考えられる。

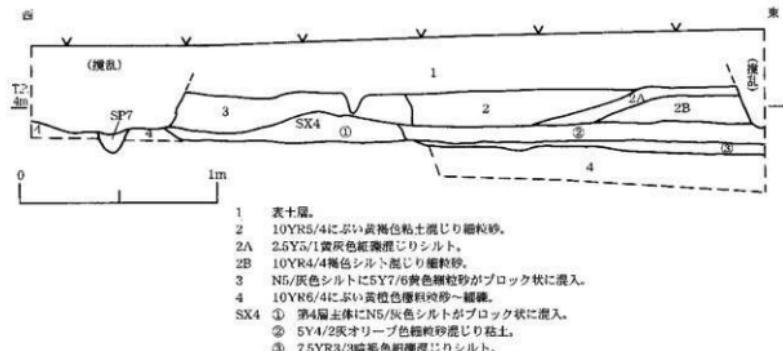
平成16年8月、東大阪市若江北町3丁目873-1,873-2番地の各一部において、個人事業主による賃貸共同住宅建設の計画があり、「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。布基礎で掘削深度は浅かったが、申請地周辺では遺構面が高いと予想されたため、事前の確認調査が必要な旨通知した。確認調査は国庫補助事業として11月に行なった。調査の結果、現地表面0.3mで室町～戦国時代の遺物包含層を検出した。設定GLが現況地表面より+0.15m高かったため、工事と併行して立会調査が必要な旨通知した。立会調査の日程調整でもGLの設定により、遺構面をクリアしたとの返答があり、これを了承していた。

ところが、12月13日に立会調査を行うべく現地に赴いたところ、建築工事箇所に無数の柱状改良杭が打設されていることを現認した。立ち会った施工業者の工事監督によると、立会日の3日前に柱状改良工事を終了したこと、協議の代理者である設計事務所との調整で、柱状改良を行った後立会調査を行なうと据えて伝達されたこと、とのことであった。

東大阪市教育委員会ではすぐに事実関係を把握するとともに、今回の工事実施により未確認の埋蔵文化財が破壊された可能性があるため、柱状改良工事の深度までの調査が必要であることを説明した。届出者側ではこれに了承し、遺構面有無の確認調査を実施することで双方合意した。確認調査に必要な重機、作業員は届出者側で用意負担した。調査は平成16年12月27日・28日の2日間実施した。

2) 調査の概要

前記したように、建築工事箇所はすでに柱状改良工事が終了していたため、敷地北側の工事通路でトレンチを設定した。ただし通路も幅3mほどしかなく、堆土の置場の関係からおのずからトレンチの幅は1m弱にせざるを得なかった。また同様に東西に長いトレンチを同時に調査することが困難で



第3図 調査地北壁断面図

あり、通路奥側の西端から掘り進めた。便宜的にトレンチ西側をW区、東側をE区と仮称した。調査の目的が、遺構面が当該地に存在するかどうかの確認であったので、近世期の遺物が混在する土層などは極力重機で除去し、遺構の検出につとめた。

確認した土層は以下のとおりである。

第1層 表土層。下部は旧耕土層状の青黒色粘質土を呈する。

第2層 10YR5/4にぶい黄褐色粘土混じり細粒砂。E区東端付近では、下部に嵌入する層を確認した。これらを第2A層、第2B層とした。第2層、第2A層、第2B層ともに中世期の遺物に混在して近世期の遺物が含まれていた。

第2A層 2.5Y5/1黄灰色細礫混じりシルト。

第2B層 10YR4/4褐色シルト混じり細粒砂。

第3層 N5/灰色シルトに5Y7/6黄色細粒砂がブロック状に混入する層。中世期の遺物包含層。

第4層 10YR6/4にぶい黄橙色極粗粒砂～細礫。遺構面のベース層。

検出した遺構には、以下のものがある。

落ち込み

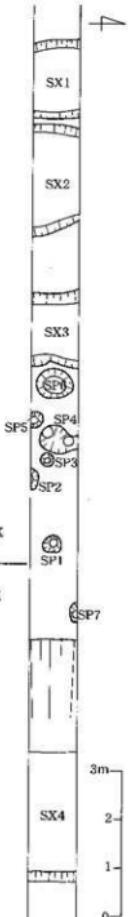
4箇所確認した。SX1～3はW区で検出。トレンチ幅が狭いため、いずれも落ち込みとしたが、断面皿状の溝状を呈するものである。SX1は幅1.55～1.6m、深さ11cmを測る。埋土はN4/灰色砂混じりシルト、炭化物含む。SX2は幅1.9～2.3m、深さ22cmを測る。埋土はN4/灰色砂混じりシルト、炭化物含む。SX3は幅1.4～1.5m、深さ12cmを測る。埋土はN4/灰色砂混じりシルト、炭化物含む。SX1～3にはいずれも中世期の遺物を主体に近世期の陶器片を含んでいた。SX4はE区東端で確認。濠の一部と考えられる。幅5.9m以上、深さ47cmを測る。埋土は3層に区分される。①層は第4層主体にN5/灰色シルトがブロック状に混入する層。②層は5Y4/2灰オリーブ色細粒砂混じり粘土。③層は7.5YR3/3暗褐色細礫混じりシルト。中世期の遺物が出土。

ピット

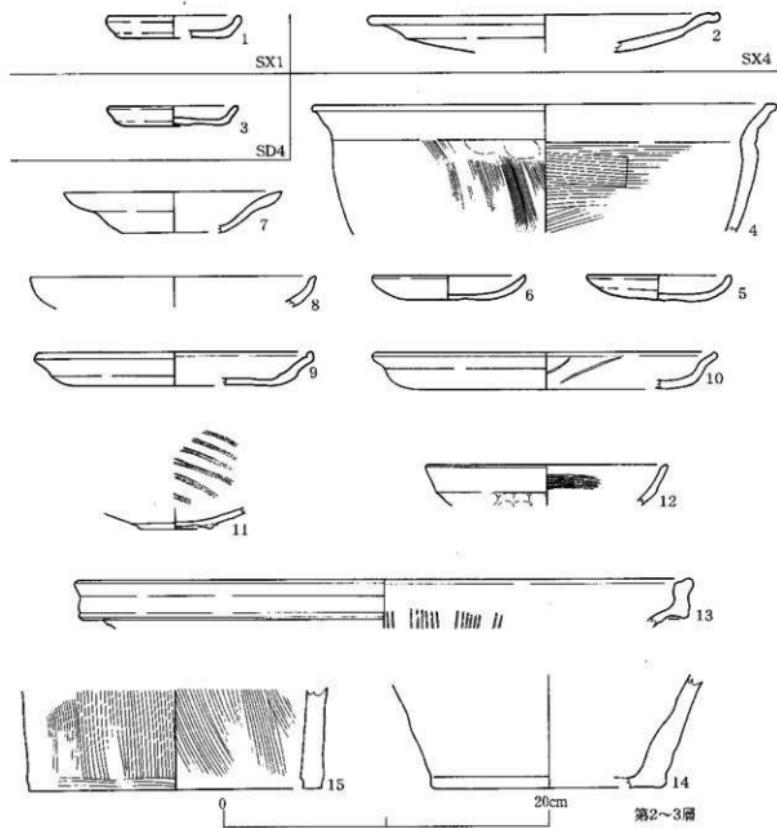
7個確認した。規模・形状は下表のとおり。

遺構名	平面形態	長軸	短軸	深さ	埋土
SX1	円形	40	40	14	A
SX2	円形	40	18+	6	A
SX3	円形	28	26	13	B
SX4	不定形	76	52	16	B
SP1	円形	30	26+	5	A
SP2	円形	74	70	11	A
SP3	円形	42	16+	22	A

【埋土欄凡例】
A:N4/灰色砂混じりシルト、炭化物含む。
B:5Y4/2灰オリーブ色細粒砂混じりシルト。



第4図
検出遺構平面図



第5図 出土遺物実測図

3) 出土遺物

古墳時代～近世の遺物がある。上師器、瓦器、陶器、埴輪などが出土した。以下、遺構及び遺物包含層に分けて記す。

遺構出土土器

S X 1 (第5図1)

1は上師器の小皿である。(中世期の土師器の皿については口径10cm未満を小皿、10cm以上12cm未満を中皿、12cm以上を大皿とする。) 体部から口縁部にかけて内窓気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。口縁部外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ穂を含む。13世紀後半。

S X 4 (第5図2)

2は土師器の高杯である。杯部である。体部から口縁部にかけて外へ大きく開き、口縁部が外反する。口縁端部が内側に肥厚し、丸く終わる。口縁部外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。胎土中に石英、長石、雲母を含む。奈良時代。

S P 4 (第5図3)

3は土師器の小皿である。体部から口縁部にかけて外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。13世紀後半。

遺物包含層出土土器

第2～3層 (第5・6図4～15)

土師器、瓦器、陶器、埴輪がある。

4～10は土師器である。鍋・皿がある。4は鍋である。鍋部は欠損する。体部から口縁部にかけてやや内湾しながら上方へ立ち上がる。口縁部は外折し、口縁端部が水平方向にやや面を持つ。体部外面を12本/cm、体部内面を6本/cmのハケメ調整する。口縁部内外面をヨコナデ調整する。



第6図 土師器皿 (第5図5)

調整する。頸部外面に指頭圧痕が残る。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。9～10世紀前半。

5・6は小皿である。体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。5は口縁部内外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。6は内外面をナデ調整する。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。12世紀後半。

7～10は大皿である。7は口縁部が外へ開きながら外反し、口縁端部が尖り気味に終わる。口縁部内外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。8～10は体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。8は口縁端部が丸く終わる。口縁部外面をヨコナデ調整する。9・10は口縁部がやや外反する。口縁端部は内側に肥厚し、丸く終わる。口縁部外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。10は内面に放射線状の暗文を施す。7～9は胎土中に石英、長石、雲母、クサリ礫を含み、10は石英、長石、雲母を含む。7は15世紀中葉、8は平安時代後期、9・10は奈良時代。

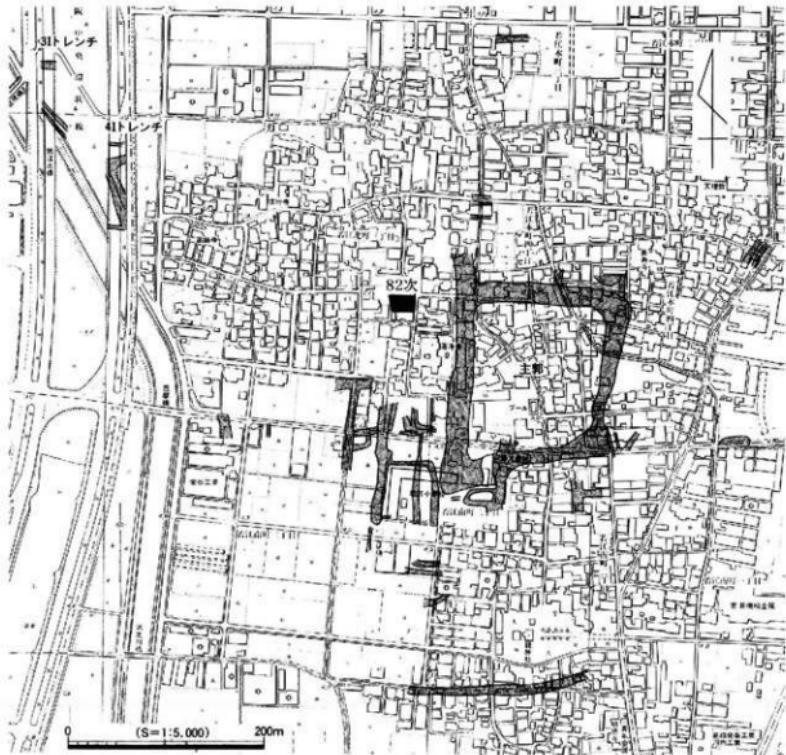
11・12は瓦器の椀である。いぶしは悪い。11は底部である。底部に台形の高台を貼り付ける。内外面をナデ調整する。見込み部に平行線状の暗文を施す。12は体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。いわゆる、和泉型である。口縁部外面をヨコナデ調整、内面をヘラミガキ調整する。体部外面に指頭圧痕が残る。胎土中に石英、長石、雲母を含む。13世紀前半。

13・14は陶器である。13は備前焼の擂鉢である。口縁部を上方に拡張し、口縁端部はやや面を持つ。内面に6本/1.6cmを原帶とする摺目を施す。内外面を回転ナデ調整する。色調はにぶい褐色を呈する。14は平底の底部である。体部が外上方へ大きく伸びる。内外面を回転ナデ調整する。その後、内面をナデ調整する。色調は灰色を呈する。胎土中に白色と黒色の砂粒を含む。13は近世、14は12世紀代。

15は円筒埴輪である。基底部が残る。底部は平らな面を持ち、直立する。基部外面は縦方向に5本/cmのハケメ調整、底部外面は横方向のハケメ調整する。底部内面に指頭圧痕が残る。色調は浅黄橙色を呈する。胎土中に石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。6世紀。

4)まとめ

今回の調査では、漆・溝の一部を形成する落ち込みとピットを検出した。トレーナーの形状の関係で、



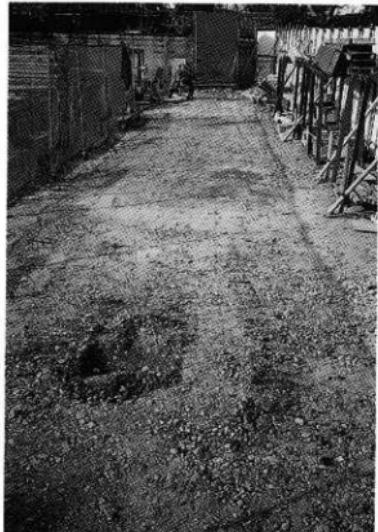
第7図 若江城関係縗検出位置図（大阪府文化財調査研究センター 1996に加筆）

溝・濠の全掘には至らなかったが、若江城の北方にあたる調査地で遺構を確認したのは大きな成果であった。

溝・濠はいずれも南北に流下するものと見られる。大まかな推定であるが第7図に示したように、若江城主郭の西方には、南北方向の濠が巡っている。今回の溝・濠はその延長を確認した可能性が指摘できる。またピットはほぼ円形を呈し、柱穴を構成するものと考えられる。あるいはSX1～3とSX4の中間に位置する柵状造構の一部とも推定できる。いずれにせよ、周辺での調査の伸展が望まれるところである。

なお、今回の調査で遺構を検出したことで、工事実施により遺構が破壊された可能性が高いと考えられた。このことは極めて遺憾である。届出者には今後このようなことのないよう指導した。

図版1 若江遺跡第82次調査
遺構



調査前の状況（東より）



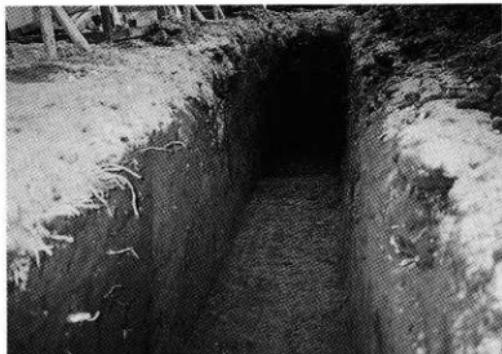
W区遺構掘削後状況（西より）



W区遺構掘削後状況（東より）



E区遺構掘削後状況（東より）



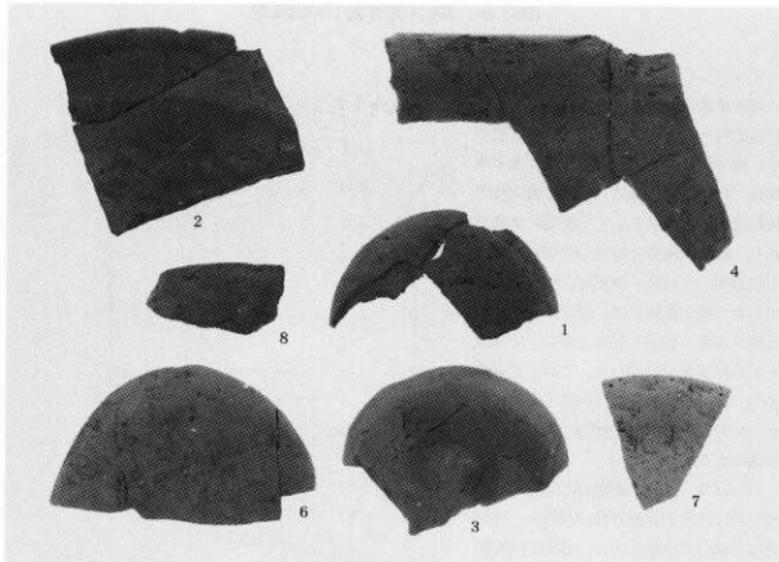
E区SX4の傾斜面（西より）



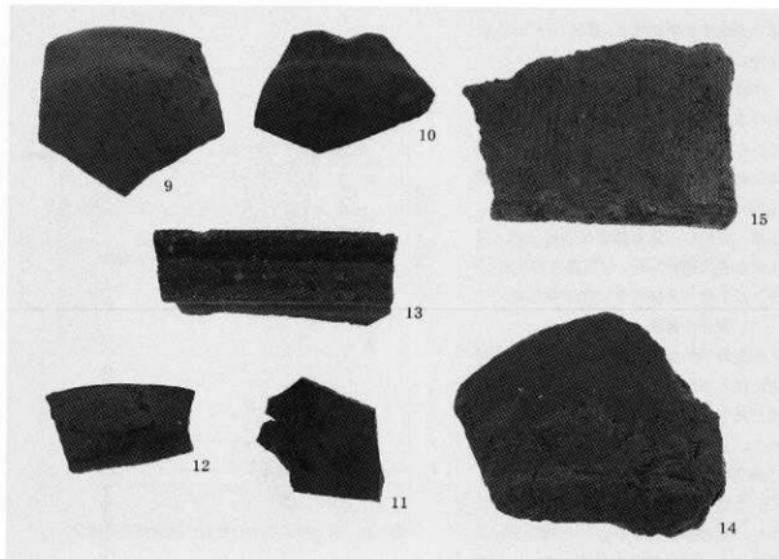
E区北壁断面



作業風景



SX1出土土師器小皿 SX4出土土師器高杯 SP4出土土師器小皿 第2～3層出土土師器鍋・小皿・大皿



第2～3層出土土師器大皿、瓦器柄、陶器擂鉢・底部、円筒埴輪

第5章 縄手遺跡第18次調査

1) はじめに

縄手遺跡は、東大阪市南四条町を中心とした未広町・六万寺町3丁目にかけて広がる、縄文時代中期から江戸時代に及ぶ集落跡である。本遺跡は、とくに縄文時代後期前半の大集落として学史的に著名であり、過去の調査で該期の住居址・炉址・石組造構・土坑墓・埋葬などが検出されている。出土遺物には、縄文土器のほか、石鏃・石匙・石斧・石錘・磨石・石皿などの石器が多く見られる。これらの遺物から、縄文時代後期に河内潟を前面に控え、活発な生業活動を展開していたことが窺われる。

いっぽう、遺跡の範囲内には径30mを測る円墳のえの木塚古墳が所在し、主体部は未確認であるものの、該期の土器師・須恵器のほかヒレ付円筒埴輪や子持勾玉が見つかっている。遺跡は生駒山地西麓部で発達する扇状地上、標高15~22mに立地している。

平成17年2月、東大阪市南四条町788他の市立縄手小学校において、東大阪市長から北面外柵の改修工事に伴う「埋蔵文化財発掘の通知」が提出された。外柵工事の掘削幅は0.9mであったことから、工事と併行して立会調査が必要な旨、東大阪市長に通知した。立会調査は平成17年3月7日・8日の2日間実施した。

2) 調査の概要

調査着手前まで、外柵改修工事箇所付近には人家が建て込んでおり、遺物包含層が遺存している可能性は低いと考えていた。ところが、後記のように掘削直後に縄文時代の遺物包含層が良好に遺存していたため工事主体者と現地で協議を行ない、遺物採集を中心とした調査を行うこととし、2日間実施することにした。



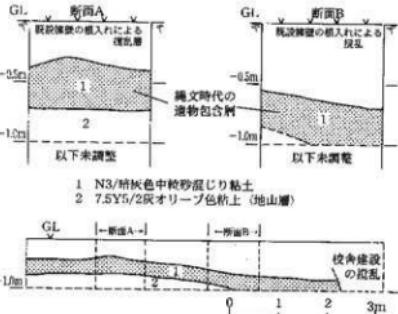
第1図 調査位置図



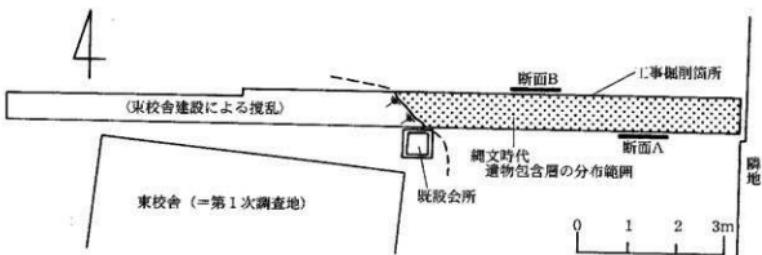
第2図 市立縄手小学校敷地内調査箇所位置図

調査の結果、工事前まで所在した既設擁壁による擾乱層が現地表面0.3~0.7mの範囲でみられ、その直下には縄文時代の遺物包含層(N3/暗灰色中粒砂混じり粘土)が露出していた。遺物包含層は約0.3mの層厚を保ち、東から西へ緩やかに傾斜したことことが観察できた。

遺物包含層の下部には地山層である灰オリーブ色(7.5Y5/2)粘土層が堆積していた。掘削工事箇所の中央付近に既設の会所があり、会所より西側では縄手小学校の東校舎が迫る形で、校舎建設による搅乱を受けており、遺物包含層は滅失していた。



第3図 調査箇所断面柱状図・模式図



第4図 調査箇所と遺物包含層の分布範囲

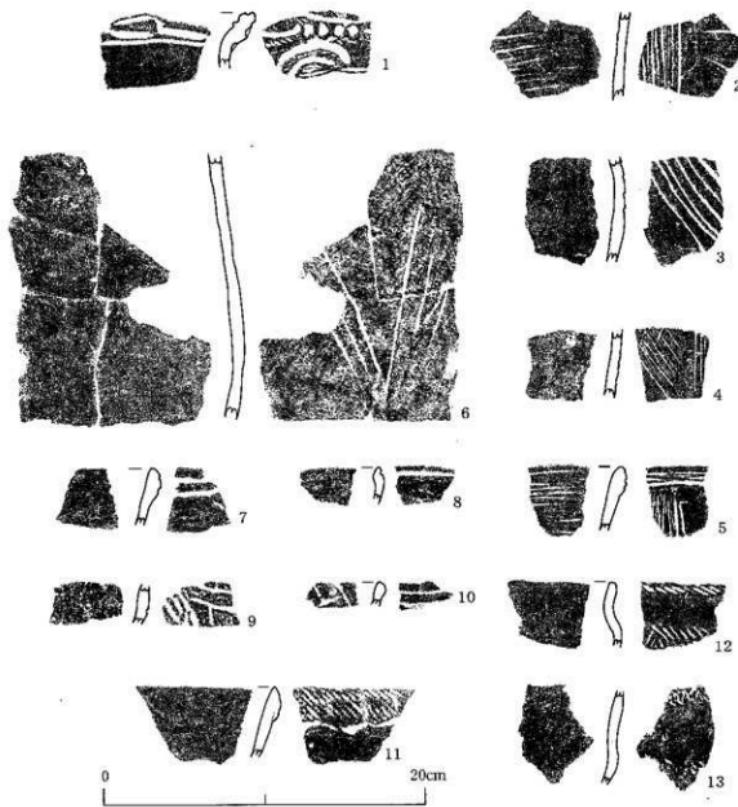
3) 出土遺物 (第5・6図1~23)

縄文時代の土器がある。第1層の遺物包含層から出土した。胎土中に角閃石・石英・長石・雲母を含むものを生駒西麓産とする。それ以外は非河内産とする。以下、説明を記す。

深鉢(1~7・10・11・15~19)と浅鉢(8・9・12~14)がある。1・5・7・11は肥厚した口縁端部外面に文様を施した、いわゆる縁帶文土器である。

1は口縁部が外反し、口縁端部が外側へ肥厚する。口縁部は波状を呈する。波頂部は口唇部から続く段状の沈線文を内外面に施し、外面はその下に円形の刺突文を施す。刺突文の下に2重の半円形の沈線文を施す。沈線文の間に磨消絆文を施す。非河内産。立命館大学の矢野健一氏と大阪府教育委員会の大野薰氏のご教示によると西瀬戸内の平城II式上器に相当する。近畿における後期前葉の北白川上層1式の終わり頃~II式に併行すると考えられる。

2~6は胴部外面に垂下沈線あるいは斜行沈線を施す土器である。2は多数の垂下沈線を施す。内外面を一枚貝条痕で調整する。3は6条以上の斜行沈線を施す。内外面は風化により調整は不明である。4は垂下沈線と斜行沈線を施す。内外面は風化により調整は不明である。5は口縁部が外上方へ伸び、口縁端部が外側へ肥厚する。口縁端部外面に横方向の沈線を4~5条施す。胴部に方向の異なる垂下沈線を施す。内外面を一枚貝条痕で調整する。6は異なった方向に3条1單位の斜行沈線を施す。内外面をケズリ調整する。3・6は非河内産、他は生駒西麓産。後期中葉。縄手遺跡(「縄手遺跡2」「東大阪市文化財調査報告書第5冊」東大阪市教育委員会1976年)の後期VI群土器に相当する。



第5図 純文土器実測図(1)

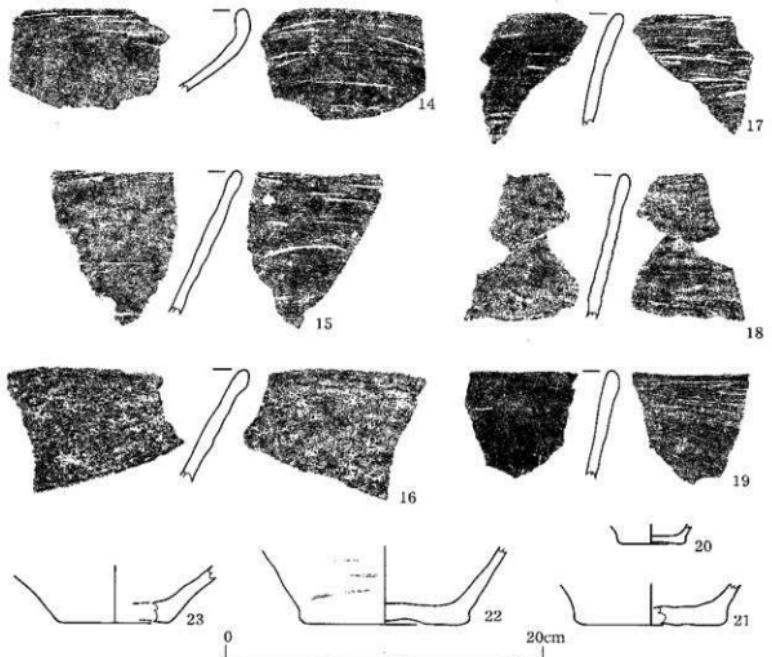
7は口縁部が外上方へ伸び、口縁端部が外側へ肥厚する。肥厚した口縁部外面に弧状の沈線文を施す。内外面を二枚貝条痕で調整する。生駒西麓産。後期中葉。縄手遺跡の後期VI群土器に相当する。

8は口縁部が内湾する。口縁端部は丸く終わる。口縁端部外面近くに口縁部と平行に沈線を施す。風化により内外面の調整は不明である。生駒西麓産。後期中葉。

9は3条1単位の沈線を横方向と斜め方向に施す。風化により不明であるが磨消縄文を施している可能性がある。色調が橙色を呈する。非河内産。後期前葉。縄手遺跡の後期II群土器に相当すると考えられる。

10は口縁部が外上方へ伸び、口縁端部が外側へ肥厚する。風化により内外面の調整は不明である。生駒西麓産。後期～晩期。

11～13は外面上に縄文を施す土器である。11は口縁部が外上方へ伸び、口縁端部が外側へ肥厚する。



第6図 繩文土器実測図(2)

肥厚した口縁端部外面に原体がR Lの斜行繩文を2段施す。内外面はナデ調整する。12・13は口縁部外面と胴部外面に斜行繩文を施す。口頭部が外反し、上方へ伸びる。12は口縁端部が面を持つ。原体がR Lの繩文を施す。内外面をナデ調整する。13は風化により調整は不明である。11・12は生駒西麓産、13は非河内産。後期中葉。繩手遺跡の後期VII群土器に相当する。

14～19は無文の土器である。口縁端部は丸く終わる。14は体部から口縁部にかけて内弯する。15～19は口縁部が外上方へ伸びる。外面向を二枚貝条痕で調整する。14は内面をナデ調整する。15～19は内面も二枚貝条痕で調整する。生駒西麓産。後期末～晩期前半。

20～23は底部である。平底である。21は内面をナデ調整する。22は外面向を二枚貝条痕で調整する。他は風化により調整は不明である。生駒西麓産。後期～晩期。

4) まとめ

今回の調査は極めて限られた範囲であったが、縄文時代の遺物包含層を検出できたことは大きな成果であった。遺物包含層には後世の遺物が全く混入しておらず、プライマリーな状況を呈していた。また工事地周辺には現地表面からみて浅いところに遺物包含層や造構が存在することが推定できる。今回の遺物包含層は、東校舎の調査(第1次調査)との関連で捉えられる。四国の平城式土器の発見は彼地との交流が窺われるものといえ、周辺での調査伸展が強く望まれる。



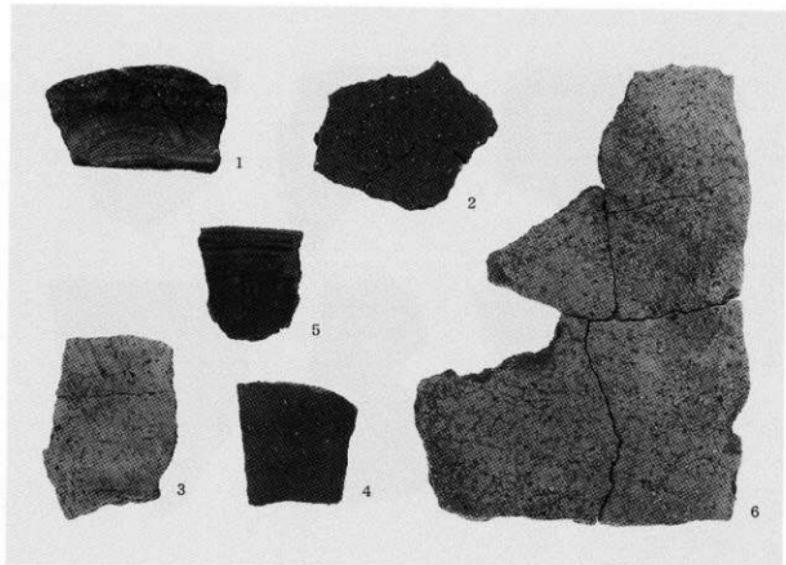
調査箇所と遺物検出作業（西より）



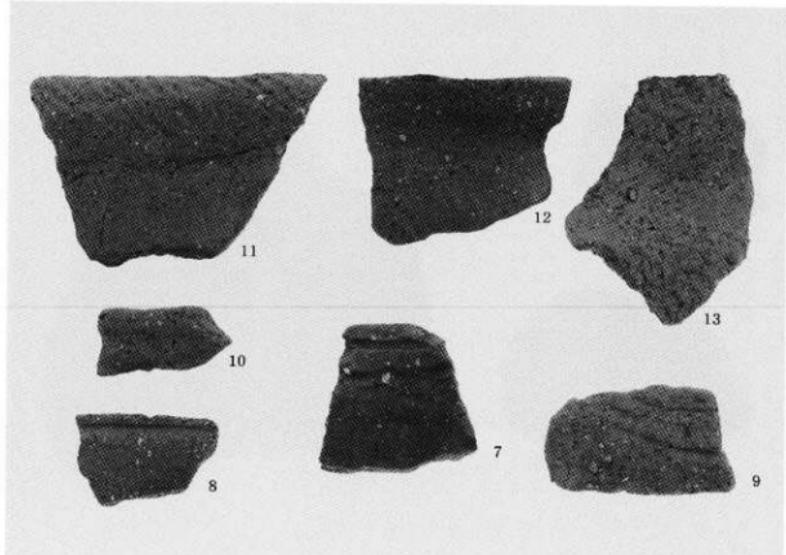
調査地西側校舎近接部の擾乱状況
(北より)



調査地東側断面Aの遺物包含層
(北より)



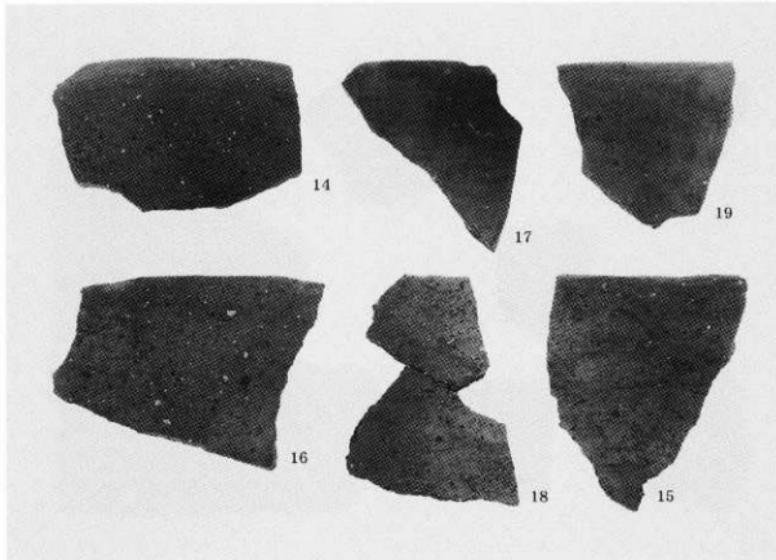
縄文土器深鉢



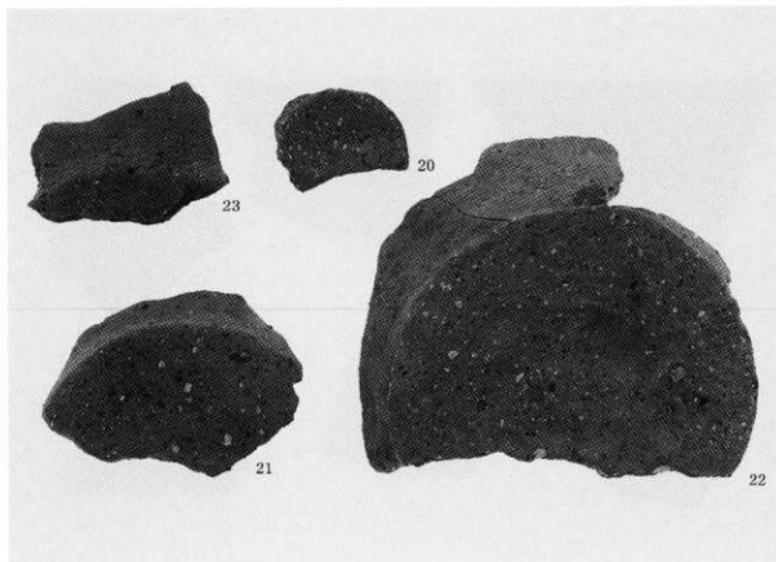
縄文土器浅鉢・深鉢

圖版 3

繩手遺跡第18次調查
遺物



縄文土器浅鉢・深鉢



縄文土器底部

第6章 皿池遺跡第7次発掘調査

1) はじめに

皿池遺跡は、東大阪市河内町を中心に、喜里川町、本町の一部に広がる、弥生時代から鎌倉時代に至る集落・官衙遺跡である。範囲は東西約320m、南北約380mである。遺跡は生駒山西麓を流下する小河川が形成する扇状地上に立地する。標高は15~31mである。

遺跡の北側には弥生～古墳時代の集落と推定される孤塚遺跡、南側には河内寺跡が接している。河内寺は飛鳥時代後期（630年代～640年代）に創建された河内直（通）氏一族の氏寺であり、河内郡の郡名寺院である。また最近の調査で遺存状態の良好な塔跡が見つかり、從来講堂跡と考えられていた建物が金堂であることが判明した。寺の下層には古墳時代中期後半の遺物包含層が広く分布しており、集落が存在していたと考えられている。東側には、水走氏館跡がある。水走氏は、式内社枚岡神社の祠官を務めた中世豪族で、現在の東大阪・大東・八尾一帯を支配していた。遺跡の南東側では、市内最大の群集墳である山畠古墳群や寄坊山古墳群が広がっている。

2) 既往の調査成果

現在、鍬手北中学校が所在するところはかつて五条皿池という溜池であった。池の底浚えの際に弥生時代後期の土器が採取されたことにより、遺跡が周知された。

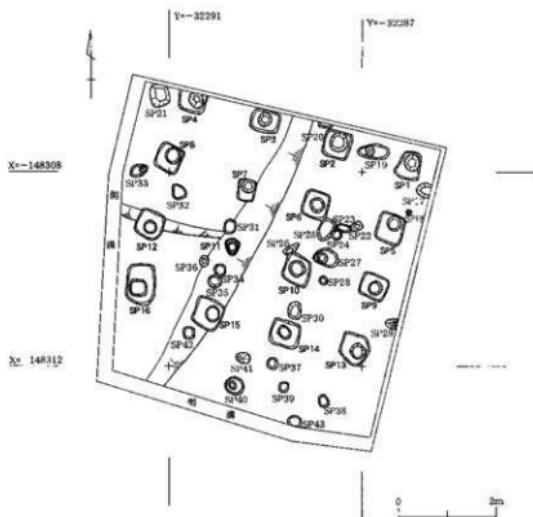
縄手手ノ中学校の建設に伴い2次にわたる試掘が行なわれた。昭和47年の調査では和同開珎(708年)と奈良時代の土器が出土した。つづいて48年の沖床の調査では慶雲2年ににより、匂今岡や造跡



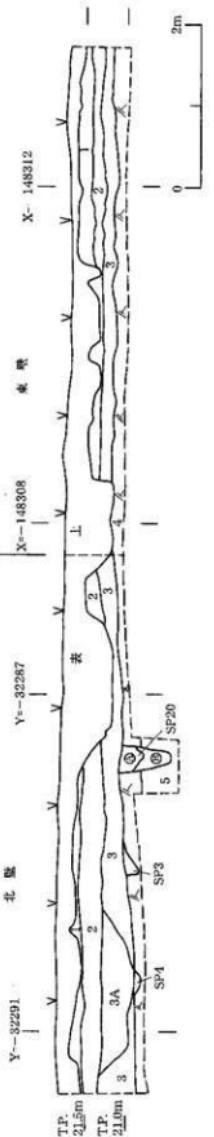
第1図 調査地位置図



第2図 調査トレンチ位置図



第4図 造構平面図



第3図 北壁東壁断面図

面が削平されていることが判明した（第1・2次調査¹⁷⁾）。

昭和51年には五条皿池の北東において現在の縄手東小学校新設工事に伴う調査が行われた（第3次調査¹⁸⁾）。この調査では、弥生時代の竪穴住居跡や古墳時代後期から奈良時代の掘立柱建物、喪棺などが検出された。これらの結果から古墳時代後期にはすでに河内寺の造営氏族の集落が周辺に存在した事が明らかになった。集落の範囲については旧地形の復原から河内寺の北方と西方に想定された。藤井直正氏は皿池遺跡の所在地が河内郡の大字郷にあたることから、本遺跡を河内部衛に推定されている¹⁹⁾。のことから、調査で見つかった建物は郡衛に相当する施設を含んだ集落の一部に相当すると考えられた。集落は弥生時代から鎌倉時代に営まれ、以降は生産城へと変化している。

平成6年、共同住宅浄化槽埋設に伴う発掘調査が行なわれた（第4次調査²⁰⁾）。この調査では、谷もしくは河川を検出し、そこからの出土遺物により周囲に弥生時代の集落の存在があることが想定された。また河川は弥生時代後期に埋没し、堆積作用により微高地が形成され、この微高地上に古墳時代前期の集落が営まれていたことが判明した。

平成15年と16年、下水道工事に伴う立会調査（第5次調査²¹⁾、第6次調査²²⁾）が行なわれ、弥生時代～中世の遺物包含層を検出した。

〔註〕

- (1) 東大阪市遺跡保護調査会1976『皿池の調査報告』（東大阪の歴史1）
- (2) 東大阪市教育委員会1979『瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡発掘調査報告』（東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報20）
　　半本隆裕1976「縄手北（仮称）小学校新設工事に伴う皿池遺跡の調査」『調査会ニュースNo.4』東大阪市遺跡保護調査会
- 半本隆裕1976「縄手北（仮称）小学校新設工事に伴う皿池遺跡の試掘調査－その2－」『調査会ニュースNo.5』東大阪市遺跡保護調査会
- 半本隆裕1976「縄手北小学校分校新設工事に伴う皿池遺跡の発掘調査」『調査会ニュースNo.6』東大阪市遺跡保護調査会
- (3) 藤井直正1967「律令制下の枚岡」『枚岡市史』第1巻 本編 枚岡市役所
- (4) 財団法人東大阪市文化財協会2002『皿池遺跡第4次発掘調査報告』
- (5) 東大阪市教育委員会2005『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告』－平成16年度－
- (6) (5) と同じ

平成17年7月、東大阪市河内町335-3番地において、個人住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。申請地は周知の皿池遺跡に該当し、柱状改良工事を予定されたため、埋蔵文化財への影響が懸念された。東大阪市教育委員会は事前の確認調査が必要な旨、届出者に通知した。

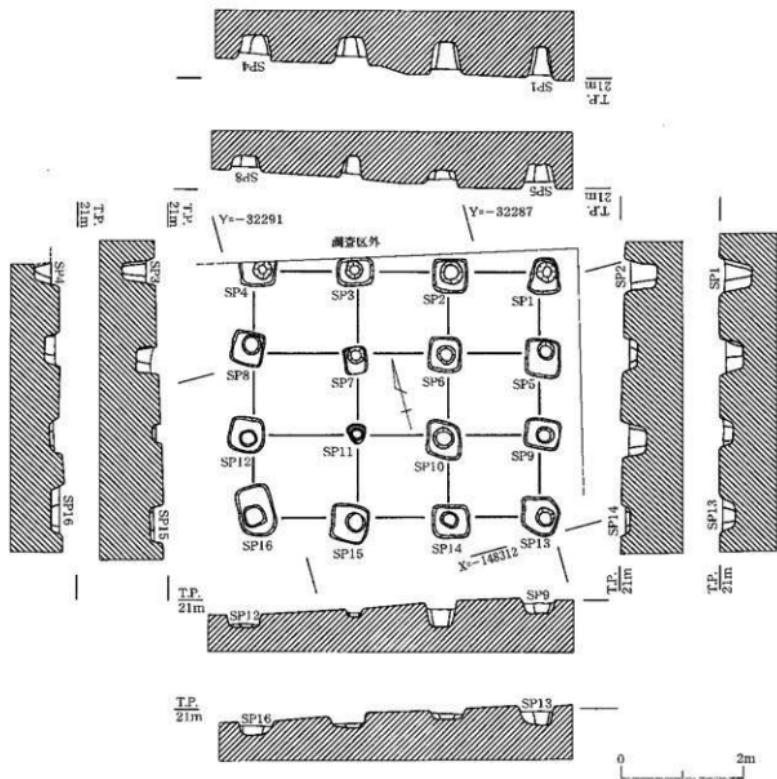
確認調査は平成17年7月13日に実施した。地表面下0.55mで古墳～奈良時代の遺物包含層を検出した。その取扱いについて、届出者と協議を重ねた。協議の結果、事前の発掘調査を行うことで双方実施した。発掘調査は平成17年7月20日から7月25日まで5日間実施した。

調査トレントの設定にあたっては、申請地の東側と南側には既設の住宅が所在し、北側は小学校の崖面が迫っていた関係で、各々距離をとり安全対策を講じながら調査した。また、遺構の実測図作成のため、基準杭測量を行った。測量業務は、平成17年度の単価契約に伴い、オオサカクリーンサービス株式会社に委託して実施した。

2) 調査の概要

まず今回の調査で検出した層位は、以下のとおりである。

第1層 7.5GY3/1暗緑灰色粘土混じりシルト。



第5図 挖立柱建物1実測図

第2層 10GY5/1緑灰色中粒砂混じりシルト。第1層、第2層とも旧耕土層に属する。

第3層 2.5Y3/2黒褐色細礫混じりシルト質粘土。弥生時代後期・古墳時代後期の遺物包含層。調査地北東ではこの層上面から切り込む層が堆積していた。これを第3A層とした。

第3A層 N4/灰色砂質粘土。極めて脆弱な粘土層である。

第4層 2.5Y6/6明黄褐色シルト質粘土。地山層である。上面は古墳時代後期の遺構面を形成する。北東から南西にかけて、上面のレベルは約0.5mの比高差をもって傾斜する。

第5層 5Y3/2オリーブ黒色粘土。下部は細繊を含む。

地山直上でピット群を検出した。またこの面では調査区中央で南北方向に走る段を検出した。段は旧地形から考えて、これは中世頃の耕作に伴って形成されたものと考えられる。

掘立柱建物1（第5図） SP1～16で構成される。3間×3間の純柱建物で調査区の北側に偏って検出した。東西の柱間が1.50m(5.0尺)、南北の柱間が1.35m(4.5尺)である。床面積は94.16 m²で

建物の軸は座標北から東に16°振れる。柱掘形はほぼ隅丸方形を呈し、掘形の規模は一辺0.6m前後で深さは0.3mである。柱痕跡の埋土は明黄褐色シルト質粘土をベースとして暗灰色シルト質粘土をブロック状に含む。北側の柱筋の掘形が他に比べ深く掘られている。柱痕跡は径0.3mである。検出規模は3間×3間であるが、柱列が北東西の方向に延びる可能性がある。S P 11については、他のビットに比べ掘形の規模、形状が違い、深さも浅い。深さについては、削平を受けた傾斜部での検出のため浅いことも考えられるが、同じ条件で検出した他のビットと比較しても極めて浅い。このため、他のビットとは違う性格である床束柱の機能を果たしていた可能性を考えられる。

また、S P 21・32・31・26が同質同色であり、同時期の遺構と考えられる（第1表）。S P 26がS P 10に切られていることから掘立柱建物1よりも古い時期のものである。ビットの並びが円弧を描くことから、弥生時代の堅穴住居址の可能性がある。調査区北西から東に柱列は並んでいるがS P 26から東では検出できなかった。おそらく旧地形が東に高いことから後世の削平を受けたものと考えられる。

3) 出土遺物

弥生～古墳時代の遺物がある。製塙土器、土師器、須恵器、韓式系土器、弥生上器などが出上した。以下、各項目ごとに遺構及び、遺物包含層などに分けて説明を記す。

① 古墳時代以降の土器（第6図）

ビット内出土土器

1は製塙土器である。器壁は薄い、口縁部にかけてやや内傾しながら上方へ立ち上がり、口縁端部は尖り気味に終わる。外面はタタキ調整、内面はユビナデ調整する。5世紀末～6世紀初頭。S P 3出上。2は土師器の壺である。口縁部である。口縁部は外上方へまっすぐ伸び、口縁端部が内側にやや肥厚する。内外面をヨコナデ調整する。布留式期。3は須恵器の杯である。体部から受部にかけて内湾気味に立ち上がる。立ち上がり部はやや内傾し、上方へ長く伸びる。口縁端部はやや凹む。受部は水平方向に短く伸びる。口縁部内外面を回転ナデ調整する。5世紀末～6世紀初頭。

第1表 検出遺構一覧表

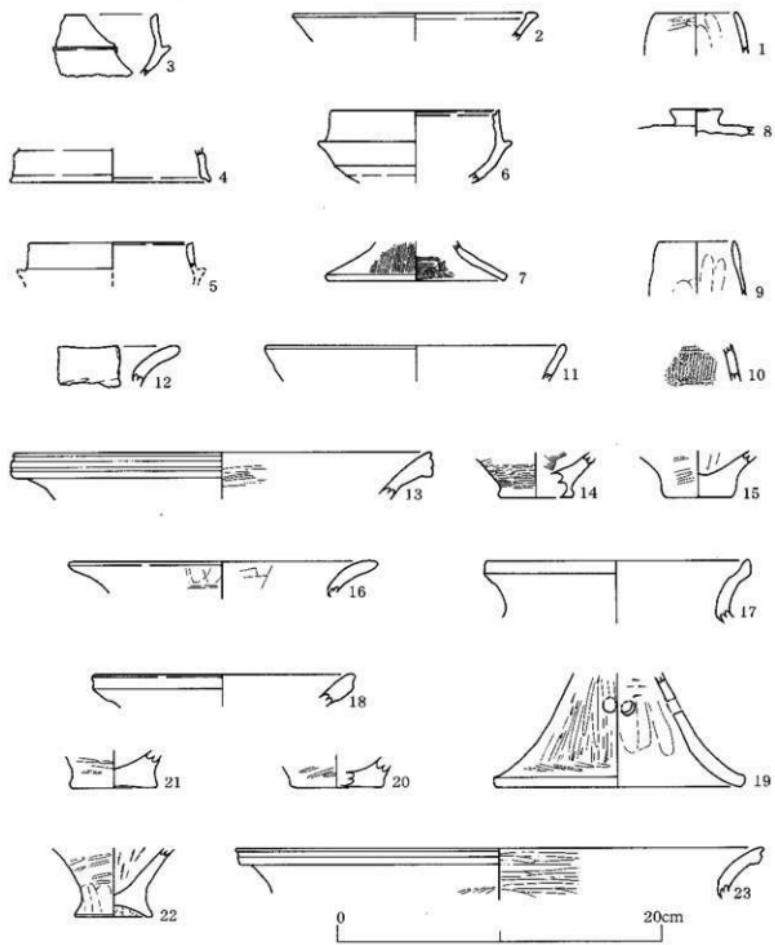
遺構名	平面形態	規模 (m)			埋土
		長軸(徑)	短軸(徑)	深さ	
S P 1	不定形	0.59	0.44	0.52	A
S P 2	隅丸方形	0.57	0.56	0.53	A
S P 3	隅丸方形	0.60	0.46	0.55	A
S P 4	隅丸方形	0.61	0.40+	0.43	A
S P 5	隅丸方形	0.61	0.55	0.38	A
S P 6	隅丸方形	0.57	0.53	0.25	A
S P 7	隅丸方形	0.45	0.35	0.36	A
S P 8	隅丸方形	0.54	0.52	0.24	A
S P 9	隅丸方形	0.56	0.48	0.22	A
S P 10	隅丸方形	0.60	0.56	0.43	A
S P 11	楕円形	0.33	0.30	0.12	A
S P 12	隅丸方形	0.58	0.58	0.22	A
S P 13	隅丸方形	0.64	0.60	0.30	A
S P 14	隅丸方形	0.61	0.54	0.16	A
S P 15	隅丸方形	0.59	0.61	0.23	A
S P 16	隅丸方形	0.84	0.57	0.20	A
S P 17	楕円形	0.29+	0.30	0.07	C
S P 18	円形	0.11	0.11	0.12	C
S P 19	楕円形	0.64	0.30	0.39	C
S P 20	隅丸方形	0.30+	0.08+	0.16	C
S P 21	隅丸方形	0.47	0.39	0.32	D
S P 22	楕円形	0.25	0.17	0.17	C
S P 23	楕円形	0.30	0.16	0.07	C
S P 24	円形	0.22	0.22	0.08	C
S P 25	不定形	0.47	0.30	0.13	C
S P 26	不定形	0.37	0.14+	0.13	D
S P 27	楕円形	0.52	0.35	0.17	B
S P 28	円形	0.17	0.17	0.22	C
S P 29	楕円形	0.26+	0.22	0.22	C
S P 30	隅丸方形	0.34	0.26	0.27	C
S P 31	楕円形	0.30	0.26	0.05	D
S P 32	不定形	0.33	0.30	0.04	D
S P 33	楕円形	0.38	0.24	0.13	C
S P 34	円形	0.24	0.24	0.08	C
S P 35	円形	0.28	0.26	0.09	C
S P 36	円形	0.22	0.19	0.23	C
S P 37	円形	0.24	0.21	0.09	C
S P 38	楕円形	0.26	0.19	0.05	C
S P 39	円形	0.21	0.19	0.06	C
S P 40	楕円形	0.39	0.34	0.18	B
S P 41	楕円形	0.29	0.22	0.20	C
S P 42	隅丸方形	0.24	0.23	0.09	C
S P 43	楕円形	0.28	0.24	0.08	C

埋土A 掘形 2.5Y6/6明黄褐色シルト質粘土
柱痕 N3/暗灰色シルト質粘土

埋土B N3/暗灰色シルト質粘土

埋土C 2.5Y6/6明黄褐色シルト質粘土

埋土D 5Y3/2オリーブ黒色シルト



第6図 出土遺物実測図

2・3はSP4出土。4は須恵器の蓋杯である。口縁部のみ残存する。わずかに外反しながら下方へ下がる。口縁端部は段を持つ。内外面を回転ナデ調整する。5世紀末～6世紀初頭。SP6出土。5は須恵器の杯である。立ち上がり部のみ残存する。立ち上がり部はやや内傾し、上方へ伸びる。口縁端部はやや凹む。内外面を回転ナデ調整する。5世紀末～6世紀初頭。SP7出土。6は須恵器の杯である。体部から受部にかけて内弯気味に立ち上がる。立ち上がり部はやや内傾し、上方へ長く伸びる。

る。口縁端部に沈線を廻らす。受部は水平方向に短く伸びる。体部外面下半を回転ヘラケズリ調整、他を回転ナデ調整する。5世紀末～6世紀初頭。7は土師器の高杯である。脚部である。裾部にかけてゆるやかにハの字形に伸びる。裾端部が面を持つ。外面を12本/cmのハケメ調整する。5世紀末～6世紀初頭。6・7はS P 9出土。8は須恵器の蓋杯である。つまみ部のみ残存する。つまみ部はわずかに中央が凹む。外面を回転ナデ調整する。6世紀中葉。S P 10出土。9は製壺上器である。器壁は薄い。口縁部にかけてやや内傾しながら上方へ立ち上がり、口縁端部は尖り気味に終わる。外面に指頭圧痕が残る。内面はユビナデ調整する。5世紀末～6世紀初頭。10は韓式系土器である。体部である。外面に繩文を施し、その上から沈線を廻らす。内面はナデ調整する。5世紀末～6世紀初頭。S P 15川土。11は土師器の甕である。口縁部である。口縁部は外上方へまっすぐ伸び、口縁端部は丸く終わる。外面をヨコナデ調整する。5世紀末～6世紀初頭。S P 19出土。

遺物包含層(第3層)出土土器

12は土師器の甕である。口縁部である。口縁部は外反し、口縁端部は丸く終わる。外面をヨコナデ調整する。頸部に工具痕がみられる。5世紀末～6世紀初頭。

②弥生時代後期の土器(第6図)

弥生時代後期の土器は混入品で、すべて胎土中に角閃石、石英、長石、雲母を含む。生駒西麓窯。ピット内出土上器

13は甕の口縁部である。口縁部がやや外反し、口縁端部をやや下方に拡張する。口縁端部外面に2条の凹線を廻らす。口縁部外面をヨコナデ調整、口縁部内面をヘラミガキ調整する。S P 1出土。14は底部である。平底である。外面をタタキ調整、内面を板状工具によるナデ調整する。S P 3出土。15は底部である。平底である。外面をタタキ調整、内面を板状工具によるナデ調整する。S P 7出土。16は甕の口縁部である。口縁部がやや外反し、口縁端部が丸く終わる。外面はナデ調整、内面は板状工具によるナデ調整する。S P 8出土。17は甕の口縁部である。口縁部は外反し、口縁端部は上方へ揃み上げ気味に拡張する。外面をヨコナデ調整する。S P 13出土。18は甕の口縁部である。口縁部が外上方へ開き気味に伸びる。口縁端部は面を持つ。外面をヨコナデ調整する。S P 19出土。19は器台である。裾部がゆるやかに立ち上がり、柱状部が中空である。裾端部は面を持つ。小円孔が一ヶ所確認できる。体部外面をヘラケズリ調整の後、ヘラミガキ調整する。裾部内外面をヨコナデ調整する。S P 20出土。20は底部である。平底である。外面をタタキ調整、内面を板状工具によるナデ調整する。S P 22出土。21は底部である。平底である。外面をタタキ調整、内面を板状工具によるナデ調整する。S P 40出土。

遺物包含層(第3層)出土土器

22は底部である。底面が上げ底である。底部外面に指頭圧痕が残る。外面をタタキ調整、内面を板状工具によるナデ調整する。23は甕の口縁部である。口縁部が外反し、口縁端部はやや下方へ拡張する。口縁端部外面に1条の凹線を廻らす。口縁部外面をヨコナデ調整、口縁部内面と頸部外面をヘラミガキ調整する。

4)まとめ

今回の調査では古墳時代の建物跡を検出した。建物跡の規模や性格から、調査地周辺は古墳時代の集落が稠密に存在したと思われる。過去の調査では弥生時代の集落を検出していたが、古墳時代の掘立柱建物が初めて明確に検出された。奈良時代以降は郡衙が置かれる中で、從前古墳時代の遺跡様相が不詳であったが、該地に古墳時代に集落が存在し、郡衙の先行集落である可能性が考えられた。



調査風景（北より）
※黒い箇所がピット



古墳時代遺構検出状況（南より）



古墳時代遺構掘削後状況（西より）

図版2
皿池遺跡第7次調査
遺構



掘立柱建物1完成状況（西より）



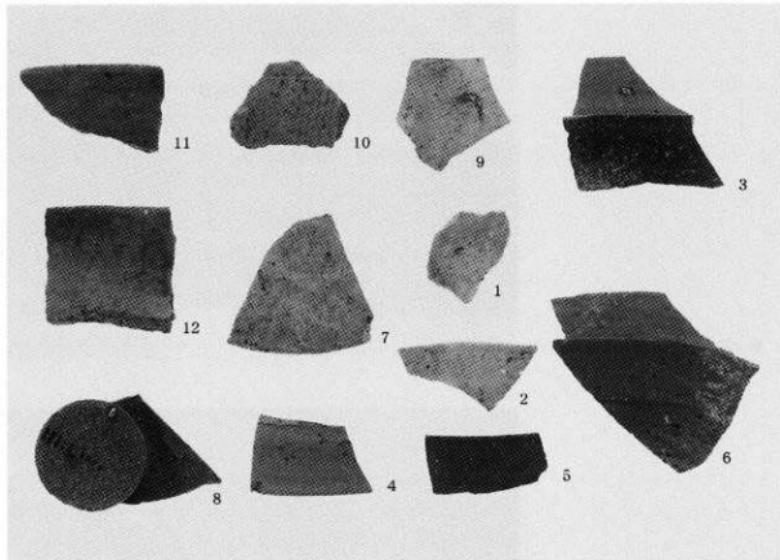
北壁断面内SP20検出状況
(南より)



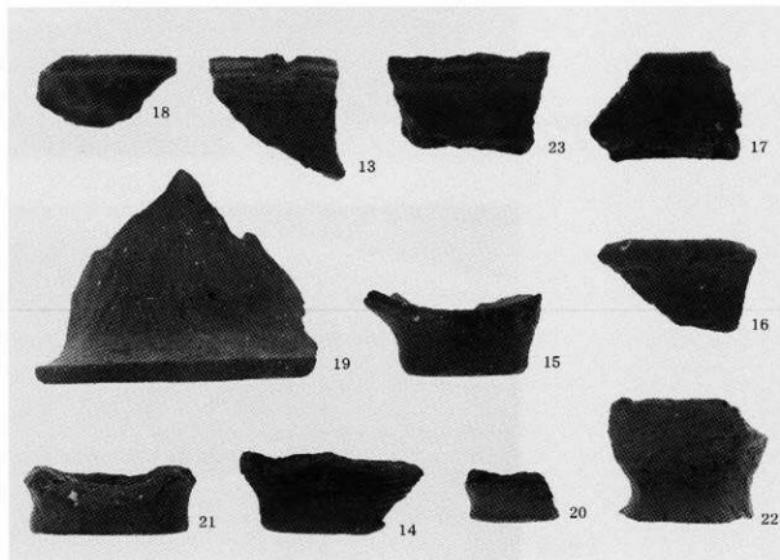
北壁断面

図版3

皿池遺跡第7次調査
遺物



古墳時代以降の土器



弥生時代後期の土器

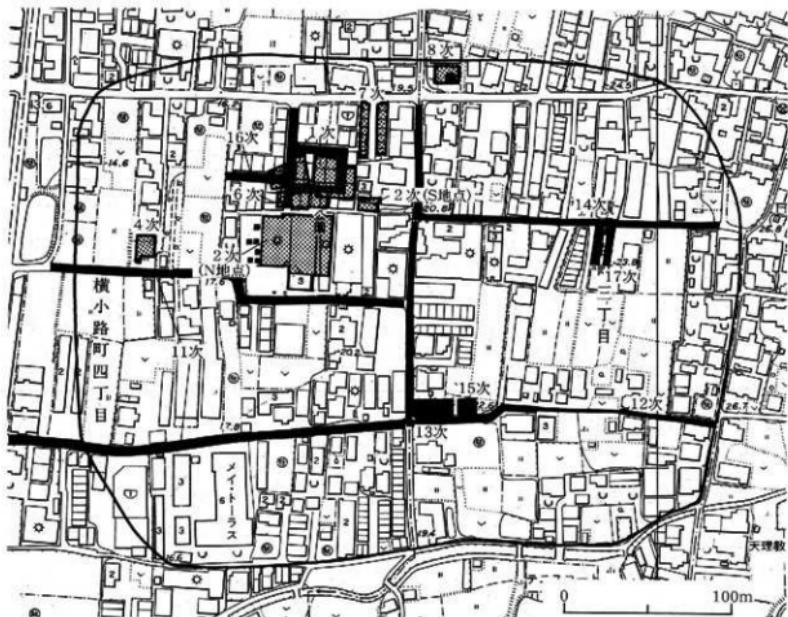
第7章 馬場川遺跡第17次発掘調査

1) はじめに

馬場川遺跡は、東大阪市横小路町3丁目から4丁目町に広がる縄文時代中期から江戸時代にわたる複合遺跡である。本遺跡は、昭和44年工場建設に伴い多量の縄文土器が出土したことから、その存在が明らかとなり、それ以降これまでに16次におよぶ発掘調査は行なわれてきた。とくに縄文時代の集落遺跡としてよく知られ、多量の縄文土器とともに30数個の土偶や多種の土製品が出土していることで周知されている。遺構としては住居跡、土坑墓（埋葬人骨伴う）、炉跡、埋甕などがあり、遺物としては他に動物・勾玉・半球状・十字状などの土製品、石礫などの石製品も出土している。また、弥生時代後期の井戸や古墳時代前半の土器も出土している。近年、遺跡南部において下水道工事および補助事業による調査が行なわれ、縄文時代晚期中葉の土坑墓などの遺構と縄文土器・石器と古墳時代前期の土器が確認されている。

今回の調査地北側の東西道も、平成14年度に下水道敷設工事に伴う調査（第14次-C）が実施されたが、既設道路建設工事などによりほとんど搅乱されていて、遺構・遺物とも検出されていなかった。

平成17年7月22日付けで出口泰正・カル両氏から、横小路町3丁目460において個人による賃貸共同住宅建設に伴う届出があった。8月30日に確認調査を実施し、調査時の現況GL-0.55~1.20m間の3層より中世から古墳時代後期にわたる遺物（瓦器・土師器・須恵器の小・細片）が出土した。



第1図 調査位置図 (1/2500)

この結果に基づき、代理者を通して協議を行ない、敷地南側にあった建物（倉庫）部分（取り壊されてすでに基礎が取り除かれていた）を除き、北側で埋蔵文化財に影響を与える基礎工事部分など、東西5m・南北11m—第1トレンチと東西2m・南北11m—第2トレンチの約77m²を調査対象とした。発掘調査は9月12日から9月22日までの間実施した。

2) 基本層位（第3図 図版1）

表土・盛土

第1層 暗緑灰色（10G4/1）砂混じりシルト質粘土。現代の旧耕土（水田）。

第2層 褐色（7.5YR4/4）砂混じりシルト質土。床土。

第3層 灰黄褐色（10YR5/2）砂混じり砂質土。近世以降の耕土（畑）。

第4層 にぶい赤褐色（5YR4/2）砂・小礫混じりシルト質土。近世以降の床土。須恵器・土師器・瓦器・磁器片出土。第1遺構面。

第5上層 灰褐色（7.5Y5/2）砂・小礫混じりシルト質土。中世の耕土（畑）2。サヌカイト・須恵器・土師器・瓦器片出土。

第5中層 灰黄色（2.5Y6/2）小礫混じり粗～細粒砂。

第5下層 褐灰色（10YR5/1）砂・小礫混じりシルト質土。中世の耕土（畑）1。サヌカイト・須恵器・土師器・瓦器出土。

第6層 灰黄褐色（10YR5/2）・褐色（7.5YR4/4）砂・小礫混じり土。中世の整地土。サヌカイト・須恵器・土師器・瓦器出土。第2遺構面。

第7層 灰色（5Y6/1）・にぶい黄色（2.5Y6/4）粗～細粒砂 灰色（7.5Y5/1）砂混じりシルト質土のブロック含む。土師器・須恵器・瓦・土製品・石器・サヌカイト出土。第3遺構面。

第7下層 灰色（7.5Y5/1）シルト質土混じり砂。

第8層 褐灰色（10YR4/1）・暗褐色（7.5Y3/3）砂・小礫混じりシルト質土（やや粘質）。炭多く含み、土師器・須恵器・石器・サヌカイト出土。第4遺構面。

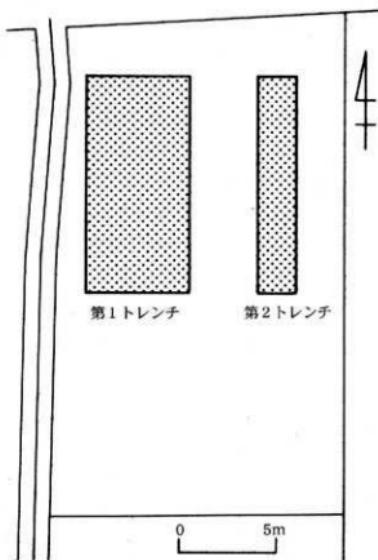
池埋土 暗緑灰色（10G4/1）砂混じり土。砂の含有やや多い。

土坑1 褐灰色（7.5YR5/1）砂礫混じり粘質土

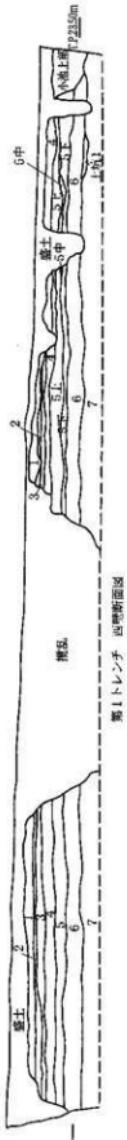
落ち込み1 オリーブ灰色（2.5GY5/1）砂礫混じりシルト質土 砂の含有やや多い。

3) 遺構

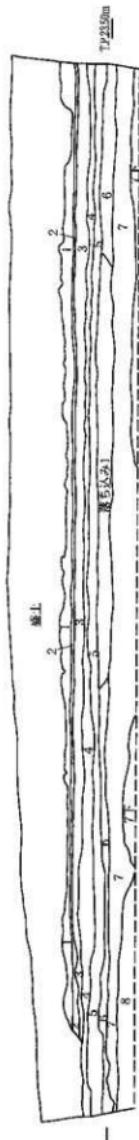
調査は、第1トレンチ・第2トレンチとも表土と旧建物に伴う盛土および第1層の耕土、第2層の床土、第3層近世以降の耕土、現代の攪乱坑・溝と確認調査坑の大半を機械掘削と人力掘削によって



第2図 トレンチ位置図



第1トレーンチ 西側断面図



第2トレーンチ 東側断面図



第3図 第1・2トレーンチ断面図

除去し、第4層以下は人力掘削による調査を実施した。擾乱坑は西・北側に3箇所あり、北側には現代の小池・杭坑・溝があった。

遺構としては、第4層上面で南北方向の鋪溝群、第6層上面での溝群と落ち込み、第7層上面で溝・土坑、8各層上面で溝群を検出した。第3・4層からは須恵器、土師器、陶磁器片などが出土したが、量はさほど多くなかった。以下、第4層上面遺構以下各検出遺構を記していく。

第4層上面遺構—第1遺構面—（第4図 図版2）

第4層はにぶい赤褐色砂・小礫混じりシルト質土で、須恵器・土師器・瓦器・磁器の小・細片を包含した近世前半の床土で、第1トレント南側でのみ遺構を確認した。調査地の北側は近世後半以降に削平されたため、第1トレント中央から北側と第2トレントでは第4層の残存厚は薄く、遺構は検出されなかった。上面で鋪溝14条と土坑1基（土坑0）を検出した。

土坑0は、2条の溝を切断する形で検出した。約0.7×0.45m、深さ0.1mの不定形を呈し、埋土は灰色（5Y5/1）砂混じり土で遺物は出土しなかった。用途は不明。近世後半以降。

鋪溝は、幅32~11cm、深さ5~2cmを測り南北方向に延びる。埋土は暗灰黄色（2.5GY5/2）砂混じり土で、土師器の小・細片がごく少量出土した。耕作に伴うものである。近世前半以降。

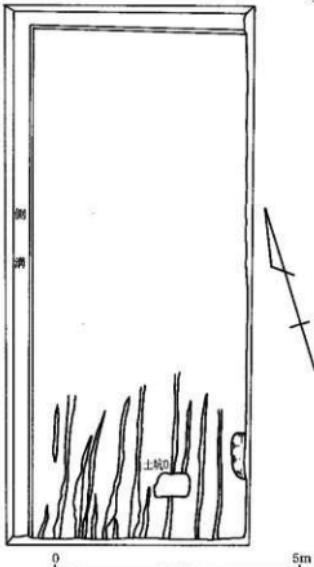
第6層上面遺構—第2遺構面—（第5図 図版2・3）

第6層は灰黄褐色・褐色砂・小礫混じり土で、土師器（小皿-3）、須恵器（壺-4、杯-5・38、蓋杯-7・8・39、壺底-9・10・40）、丸瓦（65・66）、平瓦（67~69・73）などを包含した室町時代の整地層で、第1トレントで12条の南北方向の溝（溝1~13）、第2トレントで落ち込み2基（落ち込み1・2）と南北方向の溝2条（溝14~15）・東西方向の溝1条（溝16）を検出した。南北の溝群は畑作に伴う畝を形成する畝間の溝の残存と考えられる。

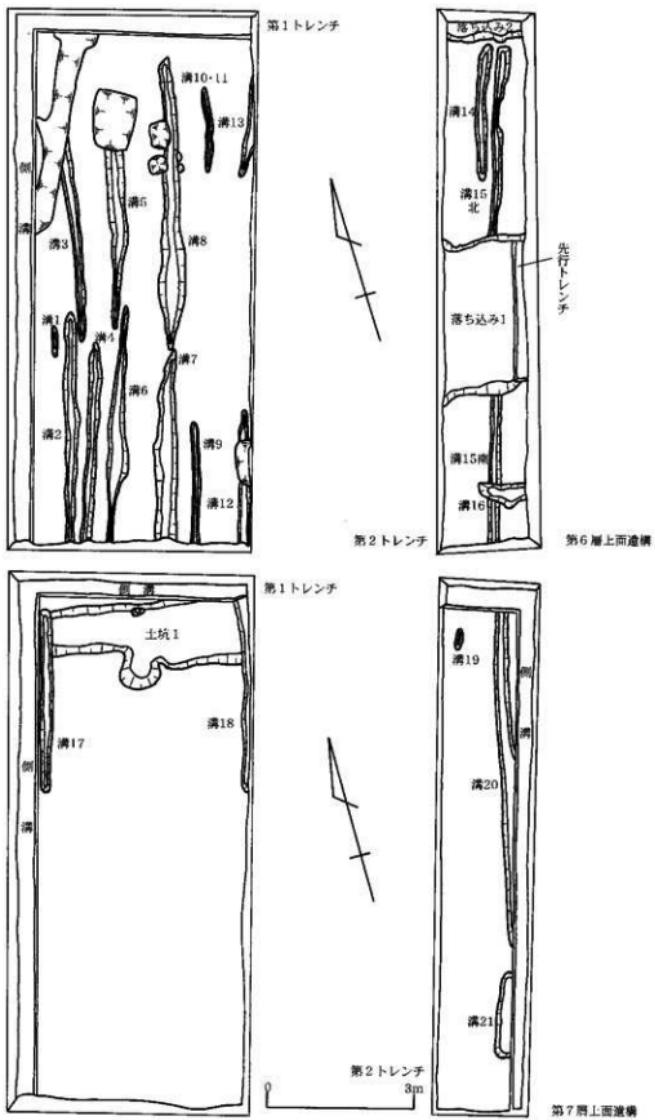
第1トレントの溝群は幅0.5~0.1m、深さ0.05~0.1mを測る。埋土は褐灰色砂・小礫混じりシルト質土で、土師器の小・細片が少量出土した。

第2トレントは中央に幅3.4m、深さ0.15mの落ち込み1があり、溝15を切断していた。埋土は砂をやや多く含むオリーブ灰色（2.5GY5/1）砂礫混じりシルト質土で、陶器碗（32）のほか須恵器・土師器・磁器の小・細片が出土した。溝15は落ち込み1で切断され、南端は調査地外へ延びていた。長さ10.2m、幅0.25m、深さ0.1mを測り、埋土は褐灰色砂・小礫混じりシルト質土で、土師器の小・細片が出土した。落ち込み2は北側および東西端は調査地外。長さ2m以上、幅0.40m以上、深さ0.1mを測り、埋土は褐灰色砂・小礫混じりシルト質土で、土師器の小・細片が出土した。溝14は長さ2.8m、幅0.25m、深さ0.12mを測り、埋土は褐灰色砂・小礫混じりシルト質土で、土師器の小・細片が出土した。埋土は褐灰色砂・小礫混じりシルト質土で、土師器の小・細片が出土した。

落ち込み1および溝16は近世前半、落ち込み2および南北溝群は室町時代と考えられる。



第4図 第1トレント第4層上面遺構平面図



第5図 第1・2トレンチ第6・7層上面造構平面図

第7層上面遺構－第3遺構面－（第5図 図版3・4）

第7層は灰色砂混じりシルト質土のブロックを含む灰色・にぶい黄色粗～細粒砂で、土師器（小皿-11、大皿-12・13、甕-14、羽釜-15・41、鍋-16、竈-17）、須恵器（甕-18・19、瓶-20、杯-21・46～49、蓋杯-22～25・43～45、脚部-26、壺-42、壺底部-27～31・50～53、器台脚部-55など）、丸瓦（70・66）、平瓦（71・72）、土製品（76）、磨製石器（77）、サスカイトなどを包含した平安時代の整地土で、第1トレンチで土坑1基（土坑1）と2条の溝（溝17・18）、第2トレンチで3条の溝（溝19～21）を検出した。

土坑1は第1トレンチ北端で検出し、東および西端は調査地外へ延び不明。南側中央付近に不整円形の突出部を有する短冊状を呈し、断面は浅い逆台形をなす。東西長5m以上、南北幅1.7～0.9m、深さ0.15mを測る。埋土は褐灰色（7.5YR5/1）砂礫混じり粘質土で、土師器梶（1・2）のほか須恵器・土師器の小・細片が出土した。

溝17・18はいずれも土坑1埋没後に掘削されたものである。溝17は長さ3.2m、幅0.25m、深さ0.1mを測り、埋土は灰黄褐色・褐色砂・小礫混じり土で、土師器・瓦器の細片が出土した。溝18は、北端および東側は調査地外へ延びる。長さ4.1m以上、幅0.3m以上、深さ0.1mを測り、埋土は灰黄褐色・褐色砂・小礫混じり土で、土師器の細片が出土した。

第8層上面遺構－第4遺構面－（第6図 図版4）

第8層は第2トレンチの北側のみで確認した。第8層は炭多く含む褐灰色・暗褐色砂・小礫混じりシルト質土で、瓦（平瓦-75）、土師器（大皿-60～62・小皿-63、竈-64など）、須恵器・石器・サスカイトの小・細片を包含した平安時代後期の整地土で、南側は上層の第7層によって破損していた。この破損箇所はすでに建築基礎底面に達していたことから、その下に第8層が残存しているかどうかは不明。第8層の残存長は2.5～1.6mで、この上面で極めて浅い3条の溝（溝22～24）を検出した。埋土は第7層で、遺物は出土しなかった。

4) 遺物

縄文時代～近世期の遺物がある。土師器、須恵器、陶磁器、瓦、土製品、石器などが出土した。以下、各遺物をトレンチごとに遺構及び遺物包含層に分けて説明を記す。

土器

第1トレンチ

遺構出土土器

土坑1（第7図1・2）

1・2は土師器の杯である。底部から体部にかけて外上方へ伸び、口縁端部が丸く終わる。体部外面に指頭圧痕が残る。1は底部に断面が三角形の高台を貼り付ける。口縁部内外面をヨコナデ調整、体部内面をナデ調整する。10世紀前半。

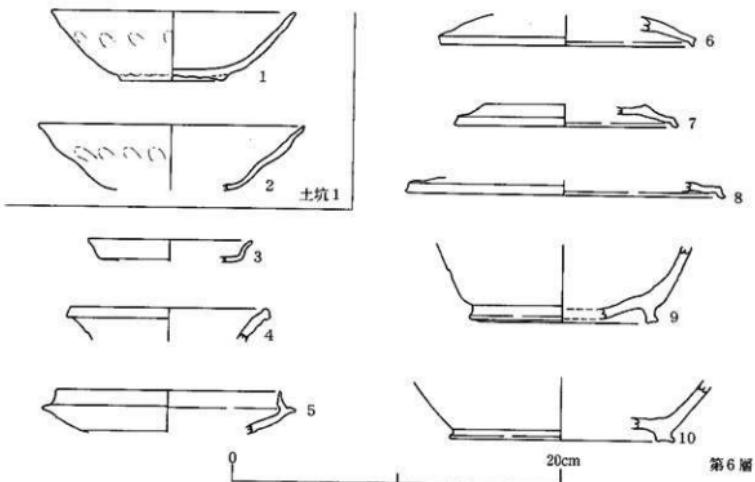
遺物包含層出土土器

第6層（第7図3～10）

土師器と須恵器がある。



第6図 第2トレンチ
第8層上面遺構平面図



第7図 第1トレンチ土坑1・第6層出土土器実測図

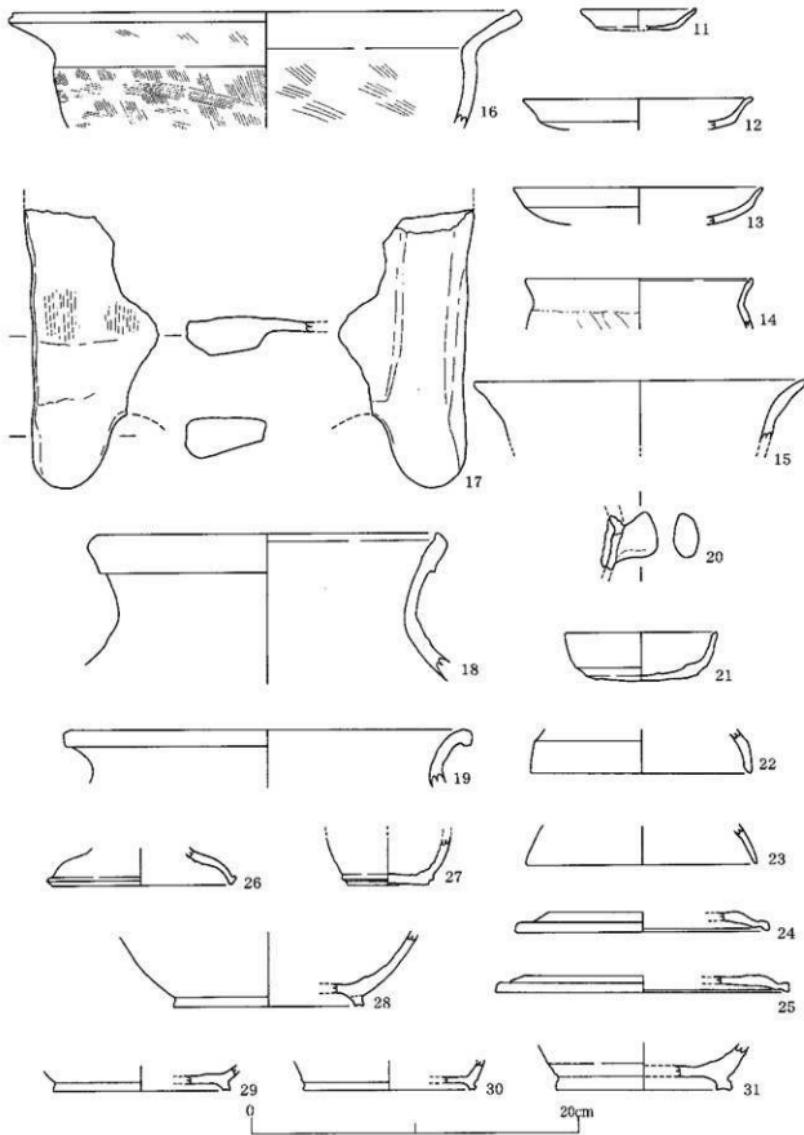
3は土師器の小皿である。(土師器の皿については口径10cm未満を小皿、10cm以上12cm未満を中皿、12cm以上を大皿とする。) 口縁部が外反し、口縁端部は丸く終わる。口縁部外面をヨコナデ調整、他はナデ調整する。11世紀初頭。

4～10は須恵器である。壺・杯・蓋杯・底部がある。4は壺の口縁部である。口縁部が外上方へ伸び、口縁端部を下方へやや拡張する。外面を回転ナデ調整する。7世紀末～8世紀初頭。5は杯である。底部から受部にかけて外へ開き気味に伸び、受部は水平に付く。立ち上がり部はやや外反しながら内傾し、端部は尖り気味に終わる。底部を回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。6世紀中頃。6～8は蓋杯である。口縁端部は内折し、丸く終わる。6は天井部から口縁部にかけて下方へ開きながら伸びる。7・8は天井部が平らに伸び、口縁部がやや外反する。外面を回転ナデ調整する。7は天井部外面を回転ヘラケズリ調整する。6は8世紀前半、7・8は8世紀後半。9・10は底部である。壺と考えられる。体部下半は外上方に伸びる。底部は端部が左右にやや肥厚した高台を削り出す。外面を回転ナデ調整する。8世紀。

第7層(第8図11～31)

土師器と須恵器がある。

11～17は土師器である。小皿・大皿・甕・羽釜・鍋・壺がある。11は小皿である。口縁部が外反し、口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面をヨコナデ調整、他はナデ調整する。11世紀初頭。12・13は大皿である。体部から口縁部にかけて内弯する。口縁部が外反し、口縁端部が丸く終わる。口縁部外面をヨコナデ調整、他はナデ調整する。11世紀初頭。14は甕である。口縁部は外折し、口縁端部は丸く終わる。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁端部内面近くに沈線を廻らす。口縁部内外面をヨコナデ調整する。体部内面は風化により調整が不明である。9世紀前半。15は羽釜の口縁部である。長胴の羽釜と考えられる。口縁部が大きく外反し、口縁端部は丸く終わる。口頸部に鉗部の剥離痕が残る。口縁部外面をヨコナデ調整する。内面は風化により調整が不明である。7世紀後半～8世紀前半。16



第8図 第1トレンチ第7層出土土器実測図

は鍋である。体部から口縁部にかけてやや内湾しながら上方へ立ち上がる。口縁部は外折し、口縁端部がやや面を持つ。口縁部外面をヨコナデ調整、体部内外面は8本/cmのハケメ調整する。体部内面に炭化物が付着する。10世紀前半。17は竈の炊口部である。据端部が丸く終わる。体部外面は5本/cmのハケメ調整、据端部外面と内面をナデ調整する。8世紀前半。

18~31は須恵器である。壺・瓶・杯・蓋杯・脚部・底部がある。18・19は壺の口縁部である。口縁部が大きく外反する。18は口縁端部が外側へ肥厚し、尖り気味に終わる。19は口縁端部が面を持ち、下方へ拡張する。内外面を回転ナデ調整する。18は7世紀前半、19は6世紀中頃。20は瓶の把手である。把手部は外上方へ短めに伸びる。断面が梢円形を呈する。ナデ調整する。5世紀。21は杯である。底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。底部外面を回転ヘラケズリ調整、他を回転ナデ調整する。底部内面はナデ調整する。7世紀中頃。22~25は蓋杯である。22・23は口縁部に稜はみられず、なだらかに下がる。22は口縁端部が尖り気味に終わり、23は丸く終わる。内外面を回転ナデ調整する。24・25は天井部から口縁部にかけて平らに伸び、口縁部が外反する。口縁端部は内折し、丸く終わる。内外面を回転ナデ調整する。22・23は6世紀後半~7世紀初頭、24・25は8世紀後半。26は脚部である。柱状部から裾部にかけて外反しながら広がり、裾部が内湾する。裾端部が左右に肥厚し、面を持つ。内外面を回転ナデ調整する。6世紀中頃。27~31は底部である。壺と考えられる。底部から体部にかけて内湾する。27は平底である。底部外面近くに凸帯文を廻らす。内外面を回転ナデ調整する。底面に糸切り痕が残る。28は底部に断面が方形の高台を貼り付け、29・30は削り出す。内外面を回転ナデ調整する。31は底部に端部が左右に肥厚した高台を削り出す。底部外面を回転ヘラケズリ調整、高台部外面と内面を回転ナデ調整する。底部内面はナデ調整する。8世紀。

第2トレーナー

遺構出土土器

落ち込み2（第9図32）

32は陶器の碗である。唐津焼である。底部に断面が方形の高台を削り出す。内面と体部外面に施釉する。見込み部に砂目の重ね痕が2ヶ所残る。底部を回転ヘラケズリ調整、他を回転ナデ調整する。施釉部の色調は灰オリーブ色、底部はにぶい赤褐色を呈する。近世期。

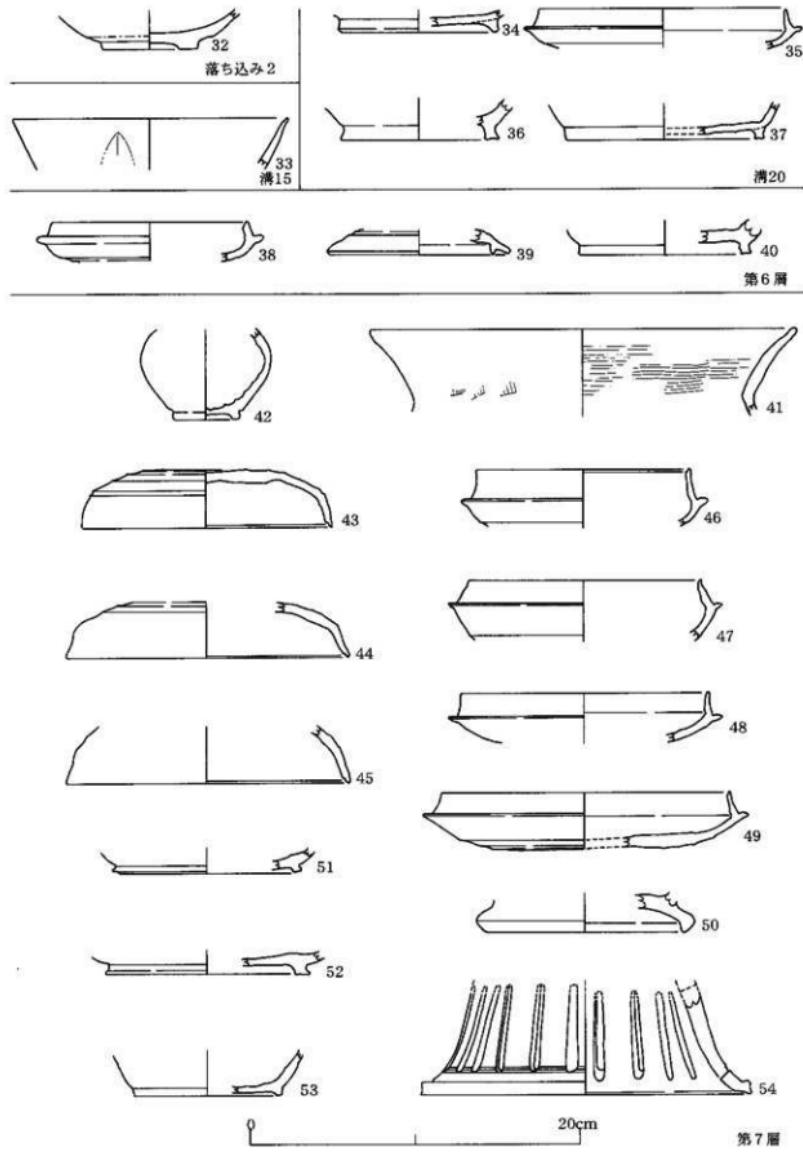
溝15（第9図33）

33は磁器の口縁部である。龍泉窯系青磁の碗である。口縁部が外上方へ伸び、口縁端部は丸く終わる。体部外面に錦蓮弁文を施す。内外面を施釉する。色調は明オリーブ灰色を呈する。13世紀前半。溝20（第9図34~37）

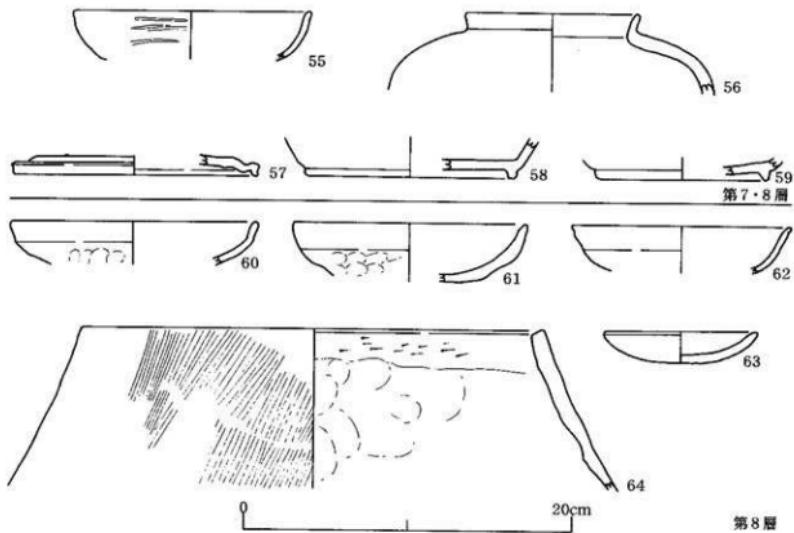
上師器と須恵器がある。

34は上師器の底部である。底部に断面が方形の高台を貼り付ける。内外面をナデ調整する。8世紀後半。

35~37は須恵器である。杯・底部がある。35は杯である。底部から受部にかけて外へ開き気味に伸び、受部は水平に付く。立ち上がり部はやや外反しながら内傾し、端部は尖り気味に終わる。底部を回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。6世紀中頃。36・37は底部である。36は壺と考えられる。底部に端部が左右に肥厚した高台を削り出す。内外面を回転ナデ調整する。37は杯と考えられる。底部に断面が方形の高台を貼り付ける。体部内外面を回転ナデ調整、底部内外面をナデ調整する。8世紀。



第9図 第2トレンチ落ち込み2、溝15・20、第6・7層出土遺物尖端図



第10図 第2トレンチ第7・8層出土遺物実測図

遺物包含層出土土器

第6層（第9図38～40）

38～40は須恵器である。杯・蓋杯・底部がある。38は杯である。底部から受部にかけて内湾し、受部は水平に付く。立ち上がり部はやや内傾し、短めに伸びる。端部は尖り気味に終わる。6世紀末～7世紀初頭。39は蓋杯である。天井部から口縁部にかけて下方へ開き気味に伸びる。口縁端部は丸く終わる。口縁部内面に短いかえりを施す。天井部は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。7世紀後半。40は底部である。壺と考えられる。底部に断面が方形の高台を削り出す。内外面を回転ナデ調整する。8世紀。

第7層（第9図41～54）

土師器と須恵器がある。

41は土師器の羽釜である。長胴の羽釜と考えられる。口縁部が外反し、口縁端部は丸く終わる。口縁部外面をヨコナデ調整、口縁部内面と頸部外面は6本/cmのハケメ調整する。7世紀後半～8世紀前半。

42～54は須恵器である。壺・蓋杯・杯・底部・脚部がある。42は壺の体部である。底部に断面が方形の高台を貼り付ける。体部は大きく内湾し、球状を呈する。9世紀。43～45は蓋杯である。天井部から口縁部にかけて内湾しながら下がり、口縁端部は丸く終わる。口縁端部内面近くに沈線を廻らす。43は天井部外面と口縁部外面の境に沈線を廻らす。44・45は口縁部がやや外反する。天井部外面を回転ヘラケズリ調整、他を回転ナデ調整する。6世紀中頃。46～49は杯である。底部から受部にかけて外へ開き気味に伸び、受部は水平に付く。立ち上がり部はやや外反しながら内傾する。46は口縁端部が面を持ち、内面に沈線を廻らす。47～49は口縁端部が尖り気味に終わる。底部を回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。46は6世紀前半、47～49は6世紀中頃。50～53は底部である。

壺と考えられる。50は底部にハの字に伸びた高台を削り出す。底部端部が内折し、尖り気味に終わる。高台部外面上部に自然釉が付着する。51・53は底部に断面が方形の高台を削り出す。52は底部に端部が外側へやや肥厚した高台を削り出す。内外面を回転ナデ調整する。8世紀。54は器台の脚部である。裾部にかけてなだらかに外反しながら伸び、裾端部は上下にやや肥厚する。方形の透かし孔を施す。裾部外面に沈線を2条廻らす。内外面を回転ナデ調整する。8世紀前半。

第7・8層（第10図55～59）

土師器と須恵器がある。

55は土師器の杯である。体部は内弯し、口縁端部は丸く終わる。体部外面は粗いヘラミガキ調整、内面は風化により調整が不明である。8世紀。

56～62は須恵器である。壺・蓋杯・底部がある。56は短頸壺である。体部が大きく張る。口縁部は外反し、上方へ短く伸びる。口縁端部は丸く終わる。内外面を回転ナデ調整する。8世紀前半。57は蓋杯である。天井部から口縁部にかけて平らに伸び、口縁部が外反する。口縁端部は内折し、丸く終わる。内外面を回転ナデ調整する。8世紀後半。58・59は底部である。底部に断面が方形の高台を削り出す。内外面を回転ナデ調整する。8世紀。

第8層（第10図60～64）

60～64は土師器である。大皿・小皿・竈がある。60～62は大皿である。底部から体部にかけて内弯し、口縁端部は丸く終わる。60・61は体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部内外面をヨコナデ調整、体部内面をナデ調整する。62は口縁部外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。11世紀前半。63は小皿である。底部から体部にかけて内弯しながら外へ開き気味に伸びる。口縁端部は丸く終わる。内外面をナデ調整する。12世紀前半。64は竈である。口縁部から体部にかけてハの字型に伸びる。口縁端部は面を持つ。口縁端部と体部外面は4本/cmのハケメ調整する。口縁端部内面をヘラケズリ調整、体部内面をユビナデ調整する。8世紀前半。

瓦

白鳳～平安時代の丸瓦と平瓦がある。胎土中に角閃石、石英、長石、雲母を含むものを生駒西麓産、それ以外を非河内産と記す。

第1トレンチ出土瓦

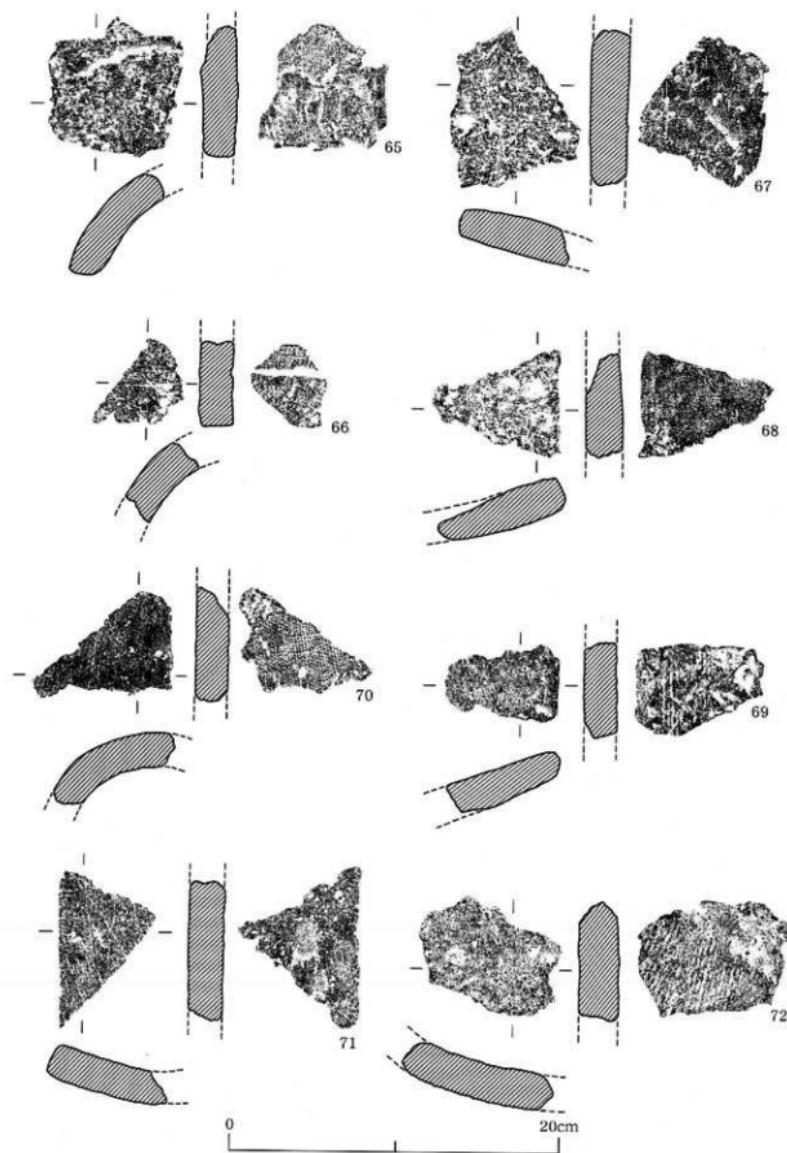
第6層（第11図65～69）

65・66は丸瓦である。凹面に粘土のつなぎ目痕が残る。凸面はナデ調整する。側面はケズリで面取りする。65は凹面に縦横10本/cmの布目痕が残る。残存長7.9cm、残存幅5.6cm、厚さ2.2cmを測る。色調は凹面が灰色、凸面が灰白色を呈する。66は凹面に縦横4本/cmの布目痕が残る。残存長5.2cm、残存幅4.5cm、厚さ2.2cmを測る。色調は灰色を呈する。65は生駒西麓産、66は非河内産。

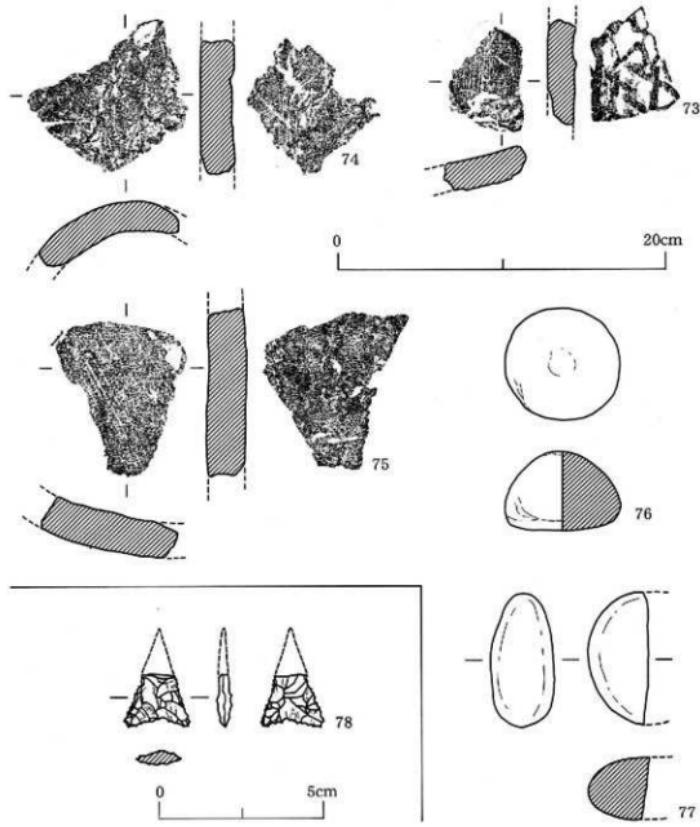
67～69は平瓦である。凹面は風化しているが布目痕が残る。側面はケズリで面取りする。67・68は凸面をナデ調整する。67は残存長9.5cm、残存幅6.7cm、厚さ2.3cm、68は残存長6.3cm、残存幅7.8cm、厚さ2.3cmを測る。色調は灰色を呈する。69は凸面を繩目のタタキ調整する。残存長5.8cm、残存幅6.9cm、厚さ2.2cmを測る。色調は灰黄色を呈する。67・68は平安時代、69は奈良時代。生駒西麓産。

第7層（第11図70～72）

70は丸瓦である。凹面に縦横7本/cmの布目痕が残る。凸面はナデ調整する。残存長6.9cm、残存幅7.3cm、厚さ2.0cmを測る。色調は凹面が青灰色、凸面が緑灰色を呈する。非河内産。



第11図 第1トレンチ第6・7層出土瓦実測図



第12図 第1・2トレンチ出土遺物実測図

71・72は平瓦である。側面はケズリで面取りする。71は凹面に縦横8本/cmの布目痕が残る。凸面はナデ調整する。残存長8.5cm、残存幅7.3cm、厚さ2.1cmを測る。72は凹面が風化しているが布目痕が残る。凸面は繩目のタタキ調整する。残存長7.3cm、残存幅9.1cm、厚さ2.4cmを測る。色調は灰色を呈する。71は平安時代、非河内産。72は奈良時代、生駒西麓産。

第2トレンチ出土瓦

第6層（第12図73）

73は平瓦である。凹面は風化しているが布目痕が残る。凸面は格子のタタキ調整する。側面はケズリで面取りする。残存長6.5cm、残存幅4.9cm、厚さ1.7cmを測る。色調は灰白色を呈する。白鳳時代、非河内産。

第7・8層（第12図74）

74は丸瓦である。凹面は風化しているが布目痕と粘土のつなぎ目痕が残る。凸面はナデ調整する。残存長8.2cm、残存幅8.4cm、厚さ2.0cmを測る。色調は灰色を呈する。生駒西麓産。

第8層（第12図75）

75は平瓦である。凹面に縦横8本/cmの布目痕が残る。凸面はナデ調整する。残存長10.2cm、残存幅8.3cm、厚さ2.3cmを測る。色調は灰色を呈する。平安時代。非河内産。

縄文時代の出土遺物

第1トレンチ出土土製品（第12図76）

76は用途不明の土製品である。形状は半球形を呈し、中実である。風化により調整は不明である。直径7.0cm、高さ4.8cmを測る。第7層より出土。生駒西麓産。

第2トレンチ出土石器（第12図77・78）

磨製石器と打製石器がある。

77は磨製石器の磨石である。形状は扁平な円形を呈すると考えられる。円周部に磨り痕が残る。残存長8.1cm、残存幅3.8cm、最大厚3.8cm、重さ156.13gを測る。第7層より出土。

78は打製石器の石鎌である。先端部が欠損する。三角形を呈する石鎌である。基部は凹基である。細部は押圧剥離で整える。石材はサヌカイトである。残存長1.6cm、最大幅1.9cm、最大厚0.5cm、重さ0.86gを測る。第7・8層より出土。

5)まとめ

これまで馬場川遺跡は縄文時代中期末から晩期前半、弥生時代後期、古墳時代前期の集落遺跡として知られていた。縄文時代の集落状況は明確ではないが、多量に出土している縄文土器やその出土範囲およびその状況などから、大きな集落が形成されていたことがうかがえる。とくに近畿地方でも奈良県橿原遺跡（183個）・三重県天白遺跡（70個）につぐ数を数える土偶や種々の土製品の存在はさらに特異な集落であったことを示している。

今回の調査で、縄文時代の遺物としては半球形土製品、磨石、石鎌とサヌカイト片などは出土したが、縄文土器は出土していない。縄文時代の遺物はいずれも奈良時代から室町時代にわたる土層から出土し、各時代の整地時にもたらされた客土の中に混入していたもので数は少なく、縄文土器が見えないことは調査地周辺に縄文時代の集落が及んでいなかったことをうかがわせている。これに対し、平安時代から江戸時代の遺構と古代から近世の遺物を数多く確認した。検出した遺構はすべて耕作に伴う遺構であったが、須恵器・土師器の出土量が多く、近辺に古代から中世にわたる集落の存在をうかがわせ、とくに白鳳から平安時代に相当する丸・平瓦を検出したことは、この時期に瓦葺きの建物が存していたことを物語っている。

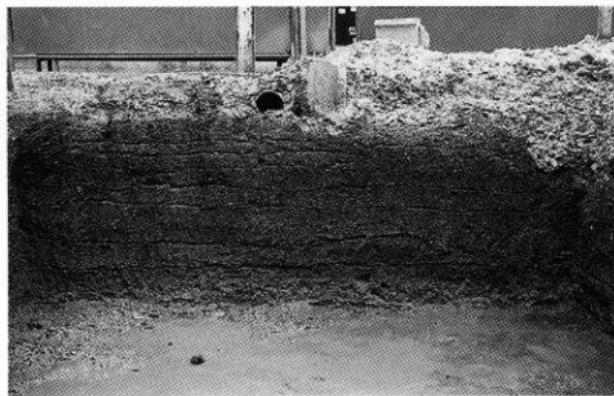
図版 1
馬場川遺跡第17次調査
遺構



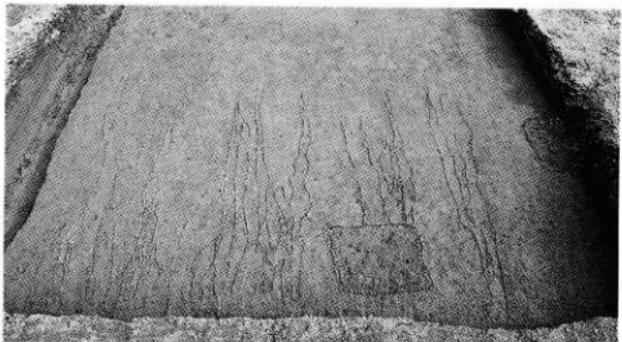
第1トレンチ西壁
断面一部
(東より)



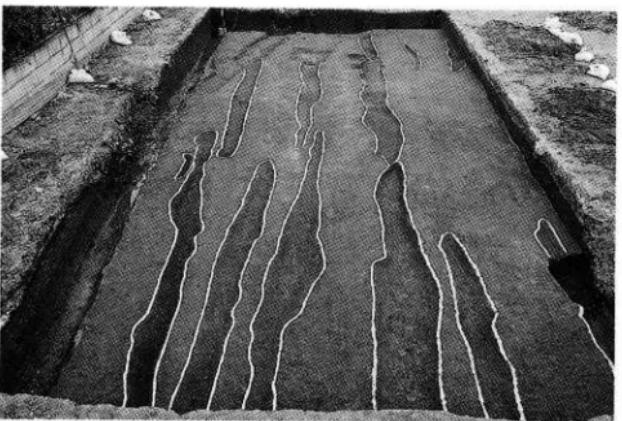
第2トレンチ東壁
断面一部
(西より)



第2トレンチ北壁
断面
(南より)



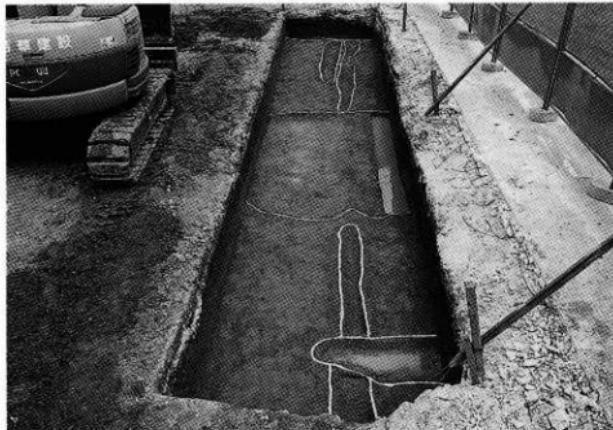
第1トレンチ第4層
上面遺構検山状況
(南より)



第1トレンチ第6層
上面遺構完掘状況
(南より)

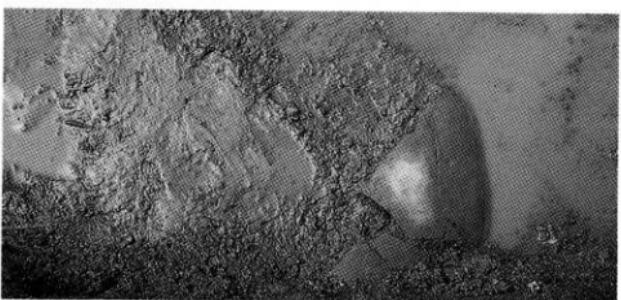


第2トレンチ溝15内
磁器出土状況
(西より)





第2トレンチ第7層
上面遺構完掘状況
(北より)



第1トレンチ第7層
内須恵器出土状況
(東より)

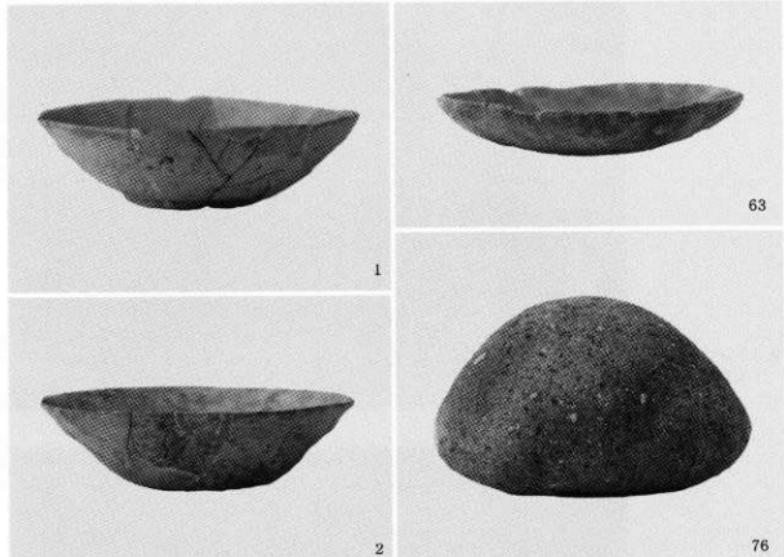


第2トレンチ第8層
上面遺構完掘状況
(北より)

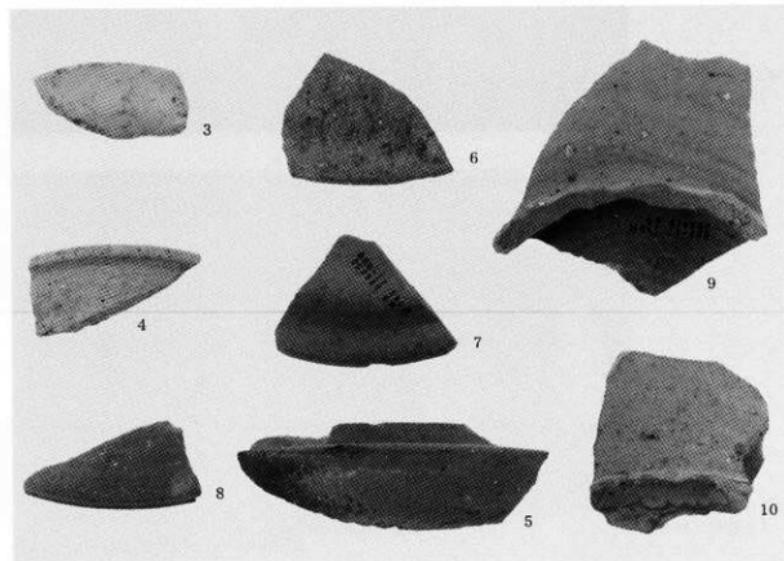
図版 5

馬場川遺跡第17次調査

遺物

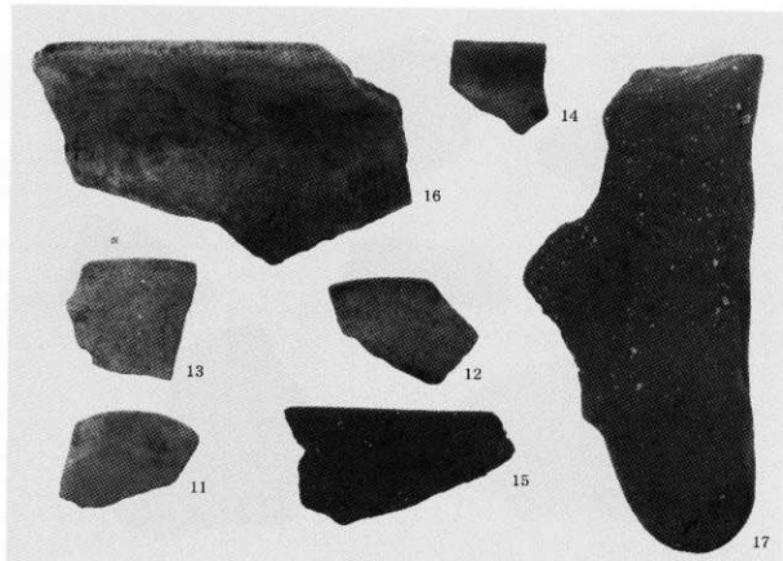


第1 トレンチ土坑1出土土師器杯 第7層出土縄文時代の土製品 第2 トレンチ第8層出土土師器小皿

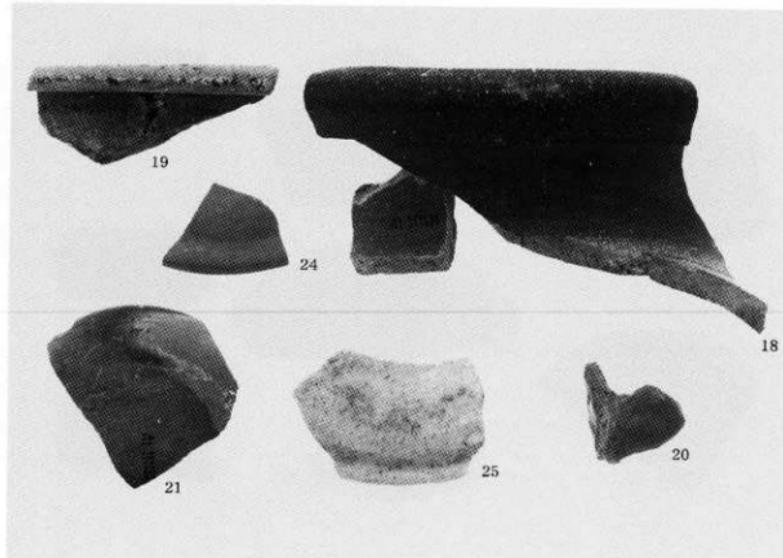


第1 トレンチ第6層出土土師器小皿、須恵器壺・杯・蓋杯・底部

図版6 馬場川遺跡第17次調査
遺物



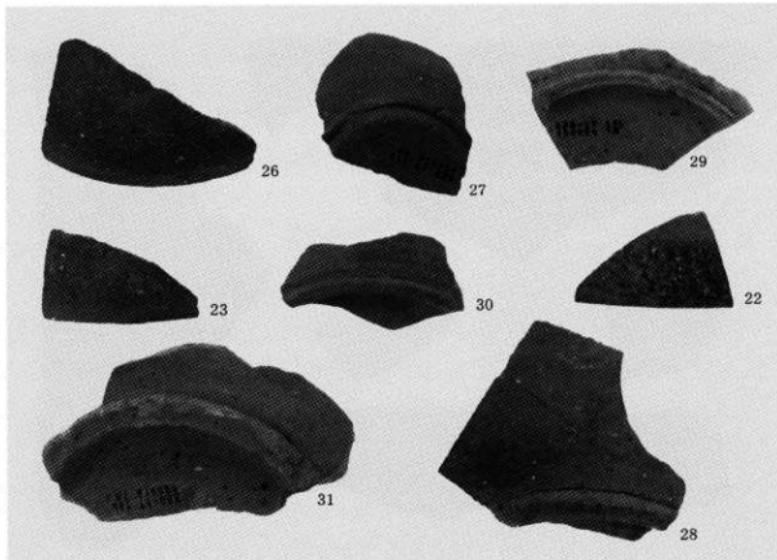
第1トレンチ第7層出土土師器小皿・大皿・甕・羽釜・鍋・竈



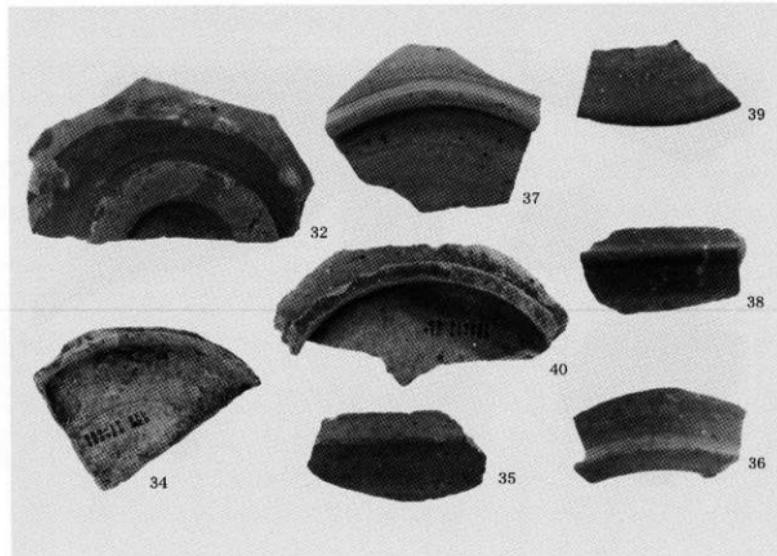
第1トレンチ第7層出土須恵器甕・瓶・杯・蓋

図版 7

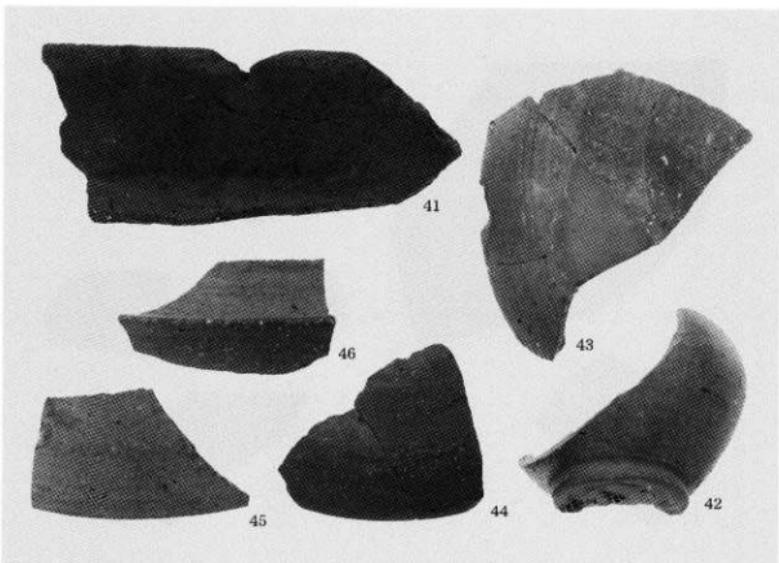
馬場川遺跡第17次調査
遺物



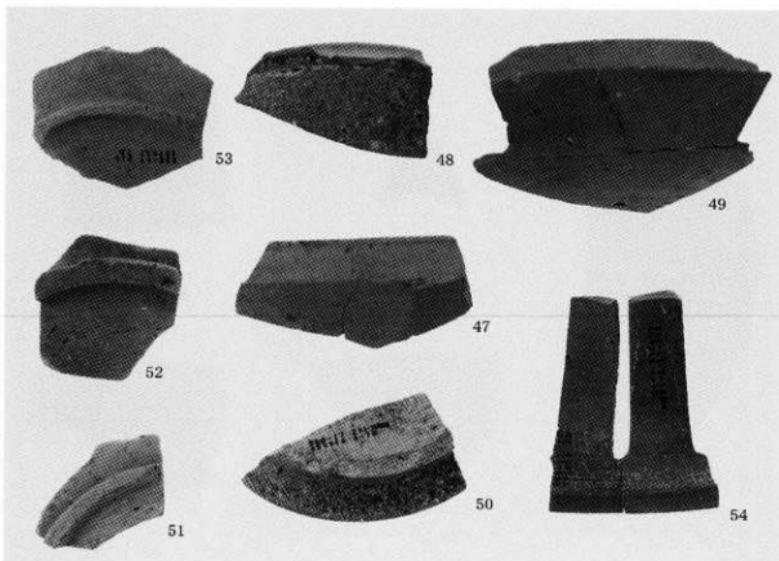
第1トレンチ第7層出土須恵器蓋・脚部・底部



第2トレンチ落ち込み2出土唐津焼碗 溝20出土土師器底部、須恵器杯・底部 第6層出土杯・蓋杯・底部

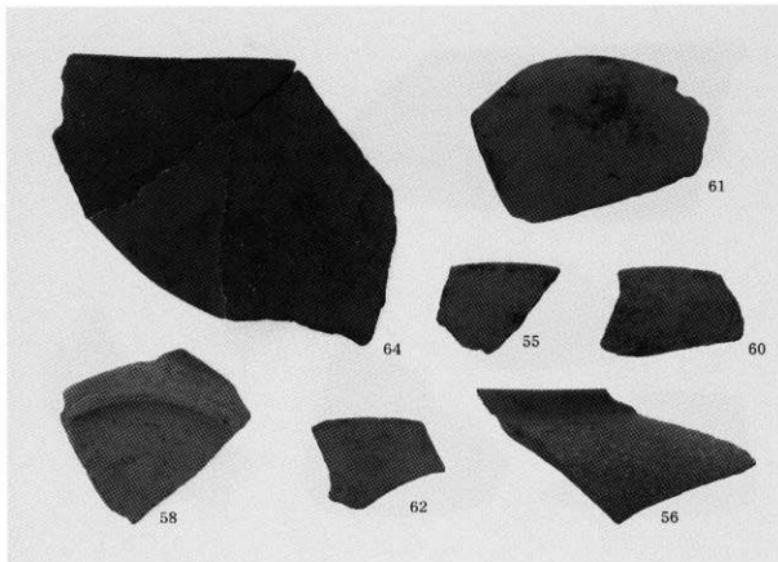


第2トレンチ第7層出土土師器羽釜、須恵器壺・蓋・杯

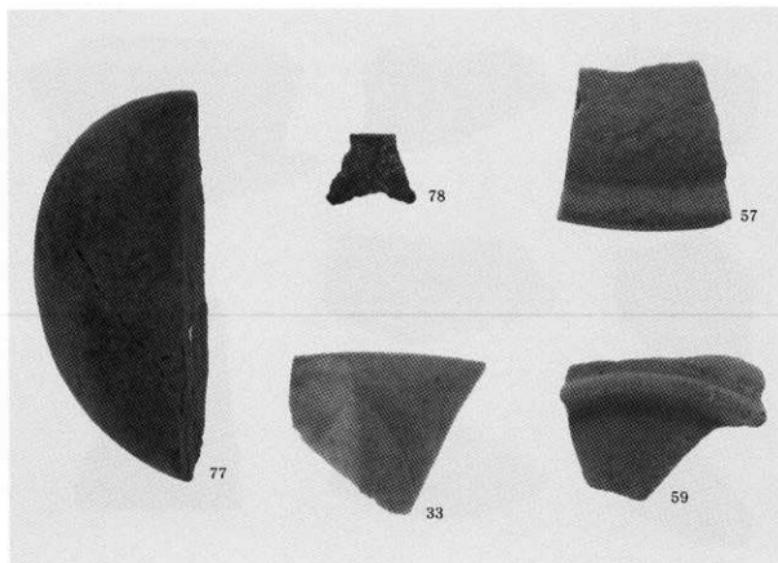


第2トレンチ第7層出土須恵器杯・底部・脚部

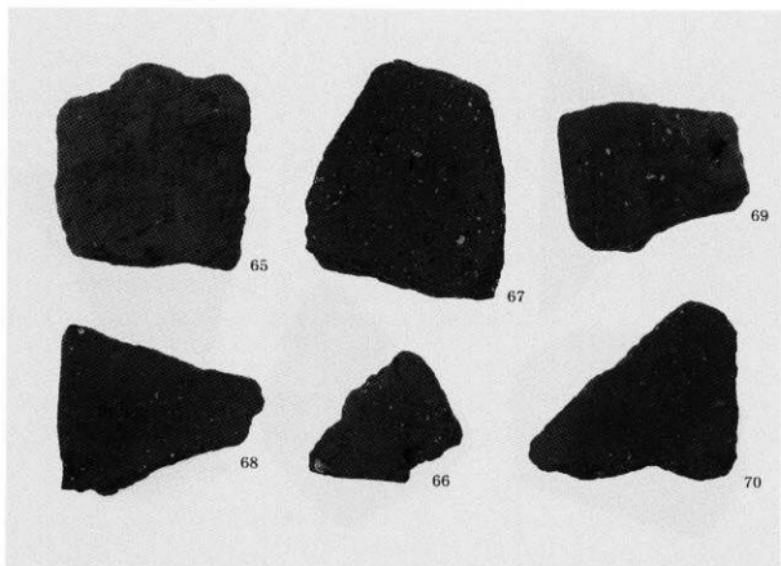
図版9 馬場川遺跡第17次調査 遺物



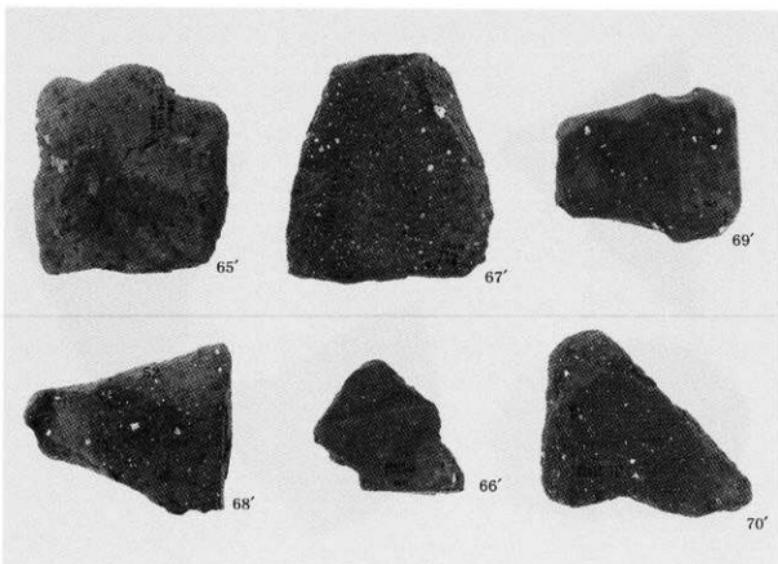
第2トレンチ第7・8層出土須恵器壺・底部 第8層出土土師器大皿・縁



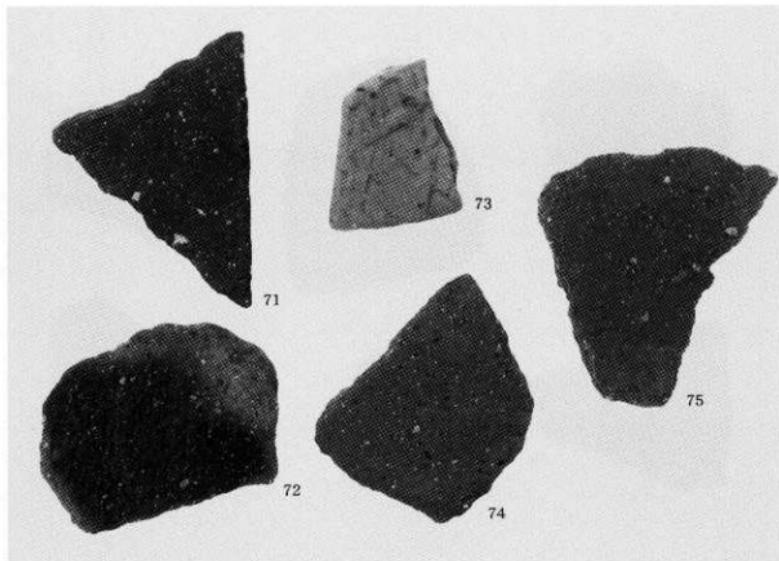
第2トレンチ溝15出土青磁碗 第7・8層出土須恵器蓋杯 第8層出土須恵器底部 縄文時代の石器



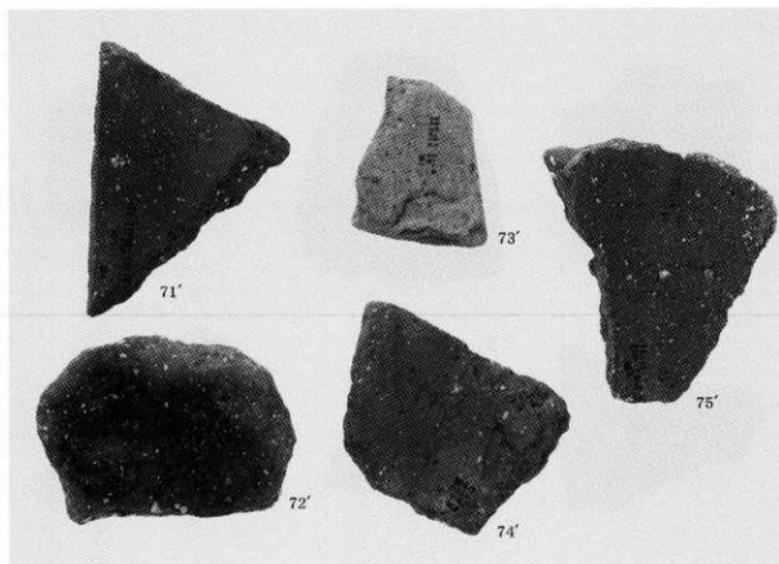
第1トレンチ第6層出土丸瓦・平瓦 第7層出土丸瓦(凸面)



同上(凹面)



第1トレンチ第7層出土平瓦 第2トレンチ第6層出土平瓦 第7・8層出土丸瓦・平瓦（凸面）



同上（凹面）

報告書抄録(その1)

ふりがな	ひがしおおさかしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう —へいせい17ねんど—
書名	東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成17年度－
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	菅原章太 若松博恵 釜田有理絵 青柳佳奈
所在地	〒577-8521 東大阪市荒本北50番地の4
発行年月日	2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地	市町村 コード	遺跡 番号	調査期間	調査 面積	調査原因
かわちてらあと 河内寺跡	東大阪市河内町 443番地	27227	63	平成17年2月15日 ～3月2日	100m ²	保存目的
	東大阪市河内町 673番地23	27227	63	平成17年6月9日・ 6月21日	51m ²	分譲住宅 建設
	東大阪市河内町 685番地	27227	63	平成17年8月31日 ～10月20日	96m ²	排水管 埋設
やまはたこふんぐん 山畠古墳群	東大阪市瓢箪山町 59番地9	27227	66	平成17年11月4日 ～11月20日	70m ²	個人住宅 建設
	東大阪市瓢箪山町 56番地4	27227	66	平成17年11月26日 ～12月7日	54m ²	個人住宅 建設
わかえいせき 若江遺跡	東大阪市若江北町 3丁目873番地1, 873番地2	27227	98	平成16年12月27日・ 12月28日	19m ²	賃貸共同 住宅建設
なわていせき 縄手遺跡	東大阪市南四条町 788番地他	27227	72	平成17年3月7日・ 3月8日	11m ²	小学校 外構改修
さらいけいせき 皿池遺跡	東大阪市河内町 335番地3	27227	62	平成17年7月20日 ～7月25日	70m ²	個人住宅 建設
ばばがわいせき 馬場川遺跡	東大阪市横小路町 3丁目460番地	27227	89	平成17年9月12日 ～9月22日	77m ²	寄宿舎ビル 建設

報告書抄録(その2)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
河内寺跡 (第11次調査)	社寺跡	飛鳥時代～平安時代	塔	瓦・土師器・黒色土器	南面階段を検出
河内寺跡 (第12次調査)	社寺跡	古墳時代	溝	瓦・土師器・須恵器	
河内寺跡 (第13次調査)	社寺跡	奈良時代	回廊	土師器・須恵器・瓦	回廊の礎石が遺存
山畑古墳群 (第25次調査)	古墳	古墳時代～室町時代	土坑・溝・ピット	埴輪・須恵器・土師器・瓦器	
山畑古墳群 (第26次調査)	古墳	古墳時代～室町時代	土坑・溝・ピット	埴輪・須恵器・土師器・瓦器	
若江遺跡 (第82次調査)	集落跡・官衙跡・城館跡・社寺跡	奈良時代～室町時代	濠・ピット	土師器・瓦器・陶器・埴輪	
縄手遺跡 (第18次調査)	集落跡	縄文時代	(遺物包含層)	縄文土器	
皿池遺跡 (第7次調査)	集落跡・官衙跡	古墳時代	総柱 掘立柱建物	土師器・須恵器 ・傳式系土器 ・製塙土器 ・弥生土器	総柱建物を1棟分検出
馬場川遺跡 (第17次調査)	集落跡	縄文時代～室町時代	土坑・溝・ピット	土製品・石器・ 土師器・須恵器 ・磁器・瓦器・瓦	

東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

－平成17年度－

発行日 平成18年3月31日
 編集・発行 東大阪市教育委員会
 〒577-8521 東大阪市荒本北50番地の4
 TEL. 06-4309-3283
 印刷所 グランド印刷(株)

